

福岡大学

# 日本語日本文学

第 34 号

2024

福岡大学日本語日本文学会

福岡大学日本語日本文学

第三十四号

目次

片岡鉄兵は訴える——「若き読者に訴ふ」論——	永井太郎	3
川端康成「禽獸」論——川端の宗教観による解釈を中心に——	吉満律成	17
太宰治「葉桜と魔笛」とモーツァルト「魔笛」をめぐって	畑中佳恵	35
修士・博士論文要旨		
彙報		
前号目次・前々号目次		57
「福岡大学日本語日本文学」投稿規程		58
編集後記		59
接尾辞の語基拡大と意味——接尾辞「め」について——	河野友希	76 (51)
山田美妙「いちご姫」		
都の花版・金港堂版の表現末尾の全体相	山県浩	104 (23)
間接疑問文は日本語にどのように発達したか ——直接疑問文との対比から——	衣畑智秀	126 (1)

# 片岡鉄兵は訴える

——「若き読者に訴ふ」論——

永井太郎

## 1 はじめに

新感覚派の誕生における、片岡鉄兵の「若き読者に訴ふ」(『文芸時代』大二三・一二)の役割については、近代文学史で必ず言及される。しかし、この論については、十分な検討がなされていない。川端康成の「新進作家の新傾向解説」(『文芸時代』大一一・一)や横光利一の「感覚活動」(『文芸時代』大一一・二)に関しては、数多くの研究があるにも関わらず、片岡の「若き読者に訴ふ」だけを取りあげた論文はほとんどないに等しい。片岡については、杜翔南の博士論文「物質的他者の反乱 片岡鉄兵と中国新感覚派に関する研究」があり、これが唯一と言っていい本格的な研究である。片岡の文学の価値について、多岐にわたって検討しており、本論の主張とも重なるところが多い。ただ、杜の研究は、「若き読者に訴ふ」という一つのテクストについての詳細な分析ではなく、片岡のいくつかの論を横断的に論じたものである。

以下の論では、片岡鉄兵の「若き読者に訴ふ」を中心に彼の新感覚派の主張を考察する。「若き読者に訴ふ」における、感覚、事実、言語について検討し、杜の主張とは違う視点から、「若き読者に訴

ふ」のモダニズムとしての価値を分析する。さらに、片岡の主張が、川端康成、横光利一の論にどう継承され、あるいは継承されなかったのかを見た上で、その時間意識について論じる。

## 2 片岡の「感覚」

片岡が語る感覚とは何か、あるいは、事実とは何かということについてはあまり論じられて来なかった。片岡は、「感覚主義」(菊地)や「感覚的表現」(岩田)など、感覚を重視したといわれる。こうした論では、感覚の意味について特別な検討はされていない。しかし、「若き読者に訴ふ」は、感覚と事実の意味について新たなアプローチをしようとしたものである。既存の解釈に従って、片岡の言う感覚と事実を理解するのはなく、片岡の主張の文脈の中で、感覚と事実の意義を再考する必要がある。本章では、まず、「若き読者に訴ふ」における感覚の問題について考察する。

片岡は、「頭ならびに腹」の冒頭の一文、「沿線の小駅は石のやうに黙殺された」を擁護する有名な一節で、感覚について以下のように論じている。

効果強く、澆測と！ 爾り、汽車といふ物質の状態を表はすに、感覺的表現の他の何物が能く澆測と効果強き表現と成り得よう。物質のうちに作者の生命が生き、状態のうちに作者の生命が生きたるための交渉の、最も直接にして現実的な電源は感覺である。その他の何物でもない。心の交渉ではない。もし人間の魂や心が此の場合の急行列車に交渉したら、それは感覺の後に来る第二番目の生活である。然し、彼新進作家は、その第二番目の生活は貪る必要を認めなかつた。尠くともそれを、最初の一句で読者に訴へる事を念としなかつた。彼は只澆測と効果強く、状態を感覺的に描写したかつたのである。

ここで、片岡の主張しているのは、我々の認識に二つのレベルがあるということである。それが「心」による認識と「感覺」による認識である。感覺は「心の交渉ではない」と言っているように、「心の交渉」と感覺は別である。「魂や心」と対象との関係は、「感覺の後に来る第二番目の生活」であるとして、感覺と明確に区別される。引用に続く文章の中で、感覺の後の生活が「長い生活」につながるかとされており、日常的な認識のことを指す。片岡は、我々の経験の中に、「心」による日常的な認識とは異質の認識の領域を見出す。片岡は、その異質な認識を感覺と呼ぶのである。

片岡によれば、感覺は、対象との間の「最も直接」的な関係である。それは、「物質のうちに作者の生命が生き、状態のうちに作者の生命が生きる」交渉であり、「物質」と「作者の生命」が一体化する状態である。この関係が、「生命」に基づくものとされているのは、これが、「作者」（人間）にとつて、本質的なものであることを示す。

感覺に対して、「心」の交渉は、二次的なものである。「心」によ

る対象の認識は、「生命」がないものにとらえられている。そして、「魂や心」による「急行列車」（対象）への交渉は、感覺の「後」に生じる。このずれに、ある長さを持った時間の経過が含まれるかどうかについては、片岡は論じていない。しかし、感覺による認識が、「心」による認識に先行することは明らかである。

我々は、感覺にとどまることが出来ず、「心」へと移行する。片岡は、感覺と「心」の関係について、「作者の感覺が物と共に溶合して生きたる事は、その瞬間に第二の生活の始まる事を約束するのは云ふまでもない」とも言っている。感覺が、対象との一体化を生み出す「瞬間」に、「心」による認識が生じることは「約束」されている。感覺は、必ず、「心」による交渉へと移行し、感覺の存在が無視されるのだ、と言っているのである。感覺による本質的な現実認識から、より非本質的な「心」による認識へと、我々は疎外される。そのプロセスは不可避なのである。

片岡は、対象との一体化という真の認識を感覺と呼んだ。それが、通常の意味で使われる感覺と、同じなのかどうかについて充分に論じられていない。しかし、片岡の論で重要なことは、日常的な認識とは異質な認識の領域の発見である。我々が、日常、当たり前と思っている経験が捨象してしまっている経験の領域がある、片岡はここに文学的関心を向けるべきだと主張したのである。「若き読者に訴ふ」は、感覺の意味規定の曖昧さはあるものの、我々の日常性への批判を文学的テーマとしたのである。

### 3 共有された経験としての事実

次に、事実の意味について検討する。片岡は、「若き読者に訴ふ」において、事実を描くと言う時の、事実とは何かということの問題にしている。

事実を認識するのは、「心」、つまり日常的な意識である。片岡は、「急行列車が、小駅に停らずに驀進して行く」という「素直な文章」が、「単なる事実の報告」であると指摘する。それに対し、横光の表現は、「急行列車と、小駅と、作者自身の感覚との関係」を示しているとする。感覚と「心」の違いを踏まえるなら、感覚を現わした横光の表現と対置される通常の表現は、認識における「心」に対応する。「単なる事実の報告」は、「心」の認識によって行われる。

この日常的な意識は、他者と共有されるものである。片岡は、「急行列車が、小駅に停らずに驀進して行く」といった表現について、「一人の心中にある『事実』を他人の心中に移入するだけの目的なら、簡明瞭な文句が一番好いわけである」と述べている。片岡は、表現について、他者とのコミュニケーションの可能性に問題を限定している。対象との対応は、問題にしていない。さらに、「小駅には停らずに、全速力で疾走した」という文についても、「一般の人間に共通した物の見方を以て、一般の人間の通常な理解に訴へる」点を重視する。ここでも、事実が、「一般の人間」の、つまり、他者の「理解に訴へる」ものであるという、他者との共有性に焦点が当てられる。我々が、事実、あるいは現実と言っているものは、他者と共有される共同な認識なのである。

事実をあくまで客観的な対象としてとらえるなら、それは変更し

えない、固定的・普遍的なものである。それに対し、片岡は、事実を客観的な対象として実体的にとらえるのではなく、共有された経験の問題とみなす。それによって、片岡は、たった一つの現実<sup>1</sup>に忠実であるしかないというリアリズムの制約を乗り越えようとするのである。

一方で、「心」による、日常的な経験は、二次的な経験である。感覚についての分析で述べたように、「心」における認識とは、対象との真の関係、感覚による対象との一体化という関係を捨象したところに成立する。我々が事実と受け止めていることは、我々の経験の中の二次的なものにすぎない。それは、真に「生命」が生きている認識ではないのである。

また、「心」が他者との共有性と関連付けられることで、捨象される感覚に、個の固有性という意味が付与される。他者と共有されるものは、他者と共通のものである。石という言葉がコミュニケーションされるということは、ある人の考える石の意味ともう一人が考える石の意味が同じでなければいけない。「心」によって、感覚が捨象されると言う時、感覚は、他者との共有性から抜け落ちる個の固有性の意味を帯びるのである。

片岡は、「単なる事実の報告」ではない感覚の表現を目指したというのは、皮相な評価である。感覚というチームによって、日常的な認識とは異なる認識の領域を文学的なテーマとして見出し、事実の意義を、対象そのものではなく、対象に対する認識の他者との共有性<sup>2</sup>に求めた。こうした点にこそ、彼の主張の意義があった。

#### 4 認識と言語・表現

次に、「若き読者に訴ふ」における言語の問題に注目する。

片岡の論の、もう一つ重要な点は、認識と言語の相関性である。片岡は、「心」による、日常的な意識を「常識」と呼んでいる。この常識を前提に書かれた文章が、リアリストイックな「素直にして飾り気のない描写」である。意識（常識）は、ここで「描写」、つまり、言語・表現と相関するものととらえられている。

認識と相関する言語は、他者と共有されるものである。常識は、感覚という真の現実認識から疎外された、「心」による認識であり、それは他者と共有されるものである。従って、「素直」な「描写」は、常識という、他者と共有される認識に従うことで、はじめて成立するものである。「常識に訴へた素直な文章は、たとへば『急行列車は小駅に停らずに』云々の如き文章は、常識的な、一般的な、公式的な感覚を持つて居る」とは、以上のような意味で理解される。

さらに、片岡は、「一般的な感覚といふものが、一般的な感覚に止まつて作者独特の物でないのは云ふまでもない」と、他者と共有される認識が、個の固有の感覚を疎外するものであることを指摘する。これは日常的な言語が個を表現していないということである。言語と認識との相関性から、言語の他者との共有性、そして、言語における個の固有性の疎外を彼は導くのである。

こうした言語観に基づいて、リアリズムが批判される。この「素直な文章」が「リアリスト」の文章であり、「既成作家」の表現は、「常識的文章」ではない。それは、彼らが、常識に従い、常識の範囲内で、物を考え、語っていることを示す。

片岡は、リアリズムとの違いを、書く題材ではなく、書く言葉の問題としている。彼は、他者と共有される認識を、文章あるいは表現というレベルでとらえている。新感覚派以前、白樺派や耽美派といったグループは、何を書くのか、何をテーマとするのか、という物語の内容に関して、自然主義・リアリズムと対立してきた。それに対して、片岡は、何を書くかという以前に、言葉そのもの、表現そのものの、原理的な問題を提出している。言葉・表現自体が、リアリズムの成立基盤であると批判するのである。

言葉・表現の原理に立脚することで、議論の対象は、作品というレベルに限定されなくなる。作品全体であっても、作品の中の一つの表現であっても、言葉・表現としては同じ価値をもつものとして、等しく論じられるのである。片岡は、言葉・表現という立脚点に立つことで、横光の「頭ならびに腹」の冒頭一行だけを、作品の全体のストーリーやテーマとは切り離して論じることが出来たのである。

これを、作品のストーリー・テーマに関する議論の回避と見なし、批判したのが、広津和郎であった。広津は、「頭ならびに腹」の冒頭の一行で、「感覚的手法の勝利を主張するは早過ぎる。それは「頭ならびに腹」と云ふ作物全体との有機的關係に於いて、その言葉が生きてゐるかどうかといふ事の方が、もつと重大なのだ」と批判した（広津「新感覚主義に就て——片岡鉄兵君に与ふ——」（二）（『時事新報』大一一・二二・九）。これに対し、片岡は反論する。

私にとつては、一つのセンチンスに各々独立した必然性があるのである。各々のセンチンスの上に働いた作家の心的活動や、各々のセンチンスの上の心的活動の推移に、その瞬間々々独立した必然性があるのである。（片岡「新文学を論ず——広津和郎

氏に答へて——(二)〔『時事新報』大二三・一二・一八)〕

片岡は、一つの文の意義を作品全体の一部として評価しようとする広津に対し、一行の表現と作品全体の価値を等価とする。片岡は、原理としての言葉・表現という観点から、一つの文と作品というヒエラルキーを認めないのである。

## 5 動的なものへの関心

前章では、片岡の、言葉・表現が他者と共有された認識と相關的であり、そのため個の固有性を疎外するという主張を考察した。次に、こうした、片岡の言語論の背景について考える。本論では、これをベルグソンの影響であると考える。そのために、まず、彼の、動的なものへの関心を確認する必要がある。感覚とともに、初期の片岡の論で中心となるのが、世界が常に変化し、動的であるという認識である。

「若き読者に訴ふ」では、「沿線の小駅は石のやうに黙殺された」という文について、感覚が「物の「動」の状態の上に澁澗と生動」していると評価する。感覚は、「動」であり、「澁澗」としたものととらえられている。片岡は、静と動という対立を文学の評価の基準とし、後者を前者より価値的に上位に置く。

「若き読者に訴ふ」以降、動的なものへの積極的評価はさらに顕著になる。「新感覚派は斯く主張す」〔『文芸時代』大一一・七〕では、「若き読者に訴ふ」と同様に、事実に関する認識の共有性が問題とされる。リアリストが描くのは、「普通の真理」であり、その「真理の尺度」に従うために、「普遍にして共通なる印象に訴へ」るものであ

る。それは「一般民衆の常識に訴へ」るものでもある。普遍性を基準とすることで、多くの人に共有されるのである。片岡は、この共有された認識の内容を、「客観的眞実への服従」であるととする。この客観性の追求は「数学的眞理への迎合」である。数学とは、「物を計量の対象」とすることである。片岡は、現代では、「数学」こそ「真理の根本」であるとみなされており、マルクス主義も数学から必然的に導かれると主張する。共有された認識は、対象の計量可能性として新たにとらえ直される。

片岡は、こうした認識を、すべてを静的にとらえていると批判する。「従来物の考え」は、「万物を静止的客体」と見て、「固定し静止した尺度」を適用している、と片岡は指摘する。数学も科学も、ブルジョア文化も、マルクス主義も、リアリズムも、「静止的な尺度」に従うがゆえに否定される。対象の不変性という認識を、片岡は斥けるのである。

片岡がそれに対置するのが、すべてを動的にとらえることである。「万物は流動」しており、それは「静的な尺度」ではとらえられない。常に変化し続けるのが、世界の実相であると、片岡は主張する。「流動」として世界を見た時、世界は「澁澗たる感覚的世界」として現れるというように、この動的な世界を把握するのが、感覚なのである。

「気体的生活者に答ふ」〔『新潮』大一一・七〕でも、静と動の対立がテーマである。「万物は静止す」と考える者にとって、だれがいつ見ても、丸ビルは丸ビルである。しかし、片岡は、「石造の建物は並んで聳えて居た」と表現する人が見た建物と、「石造の建物は空で斬り結んで居た」と表現する人が見た建物は、「石造建築物の内容は全

然ちがふ」と言う。ここで彼が論じているのは、認識の相対性である。片岡は、これを根拠に、現実が一つではなく、動的に変化するものであることを主張する。「万物は流動する」が真の現実である。「一切の物が、リズムを持ち、一切の物が不断に変化する内容であり、価値」なのである。そして、片岡は、このことを「感覚」すると述べ、ここでも感覚を動的なものに結び付けるのである。

片岡の初期の論では、動的であることが常に価値あるものとみなされる。感覚も動的な変化の文脈の中に位置づけられる。「若き読者に訴ふ」では、動的であることは、感覚の内容規定だった。しかし、これらの論では、感覚は動的なものの受容として論じられるのである。

## 6 ベルグソンの影響

片岡の、動的なものへの関心について、杜は「反形而上学」的な「生成変化の哲学」と呼び、背景にベルグソンを含めた大正時代の生命主義があると論じている。特に、神原泰の「第一回神原泰宣言書」に注目している。これらの指摘は充分首肯できる。ただ、本論では、この動的なものへの関心と言語への批判との関連を重視したい。両者を共に備えているのが、ベルグソンである。

ベルグソンが大正期に広く受容され、文学・思想に影響を与えたことはすでに多くの研究がある。当時のベルグソン概説書では、しばしば、ベルグソンを、「流動」の哲学、「動」の哲学と評している。

「ベルグソンは生命を解釈するに、流動そのものを以てし、流動則生命、生命即流動の如くに見做したる」（伊達源一郎『現代叢書ベル

グソン』（民友社、大四・八）、「実在は動かない変化しないものとなつて居たものを、ベルグソンは流動である持続であると説いて居る」（三浦哲郎『ベルグソンの哲学』（出版者赤城正蔵、大三・四））、「真実の実相は常に『動く姿』の中に最もよく瞭々と現はる、ものである。何故なれば生命は時々刻々の流動であるから」（野村隈畔『ベルグソンと現代思潮』（大同館、大三・五））、などである。『近代思想十六講』（新潮社、大四・二二）は、「第一講 近代思想の概観」において、ジェームズや、オイケン、ベルグソンの思想を「従来の理知本位の哲学を破つて、情意本位の哲学を樹てた（中略）その世界観も、従来のやうに静的なものではなく、動的なものとなつた」とコメントしている。より通俗的な、当時の用語辞典にも、ベルグソンの思想として、次のような記述がみられる。

万有は常に流動して止まない。然るに多くの学問は、万有の真相を静止したものと仮定して研究する。斯の如きは生命の死骸を抱いてそれが生命と思うやうなもので、大なる間違ひである。吾等の新哲学は、動を本体として考へねばならぬ。静は便宜上の抽象であつて、實在せぬものであるといふことを常に頭において考へねばならぬ。（ポケット顧問 や、これは便利だ）  
「流動の哲学」の項<sup>註10</sup>

むろん、これらの文献でも、ベルグソンの哲学を「流動」や「動」という言葉だけで説明しているわけではない。持続や直観、創造的進化などの問題について詳述している。ここで示したかったのは、「動」や「流動」といった言葉が、ベルグソンと結びつく言葉であったということである。

片岡が、ベルグソンを読んだという明確な証拠はない。しかし、

彼の主張には、ベルグソンの主張と一致する点が他にもある。片岡は数学を批判するが、ベルグソンもまた、世界を等質に分割するものとして「数」を批判する。「知識といふものが、如何に生活の「便利」のためのみの道具にすぎないか」（新感覚派は斯く主張す）という言葉は、「我々の知覚は（中略）吾等の実用生活に迎合する物象だけを選択し、之に明白な外形をつけさせて物質界を個別する」（中沢臨川『ベルグソン』（実業之日本社、大正・一〇））や「我々の今有する知識は初めから生活に効果あるやうに翻訳的に構成したものである」（野村前掲）を想起させる。

片岡へのベルグソンの影響の可能性は、言語観との関係において重要である。ベルグソンは、言語を他者との共通性のための記号ととらえ、それが個人の感情や印象を捨象することを指摘しているのである。

「意識に直接与えられたものについての試論」において、ベルグソンは、空間的に、対象を分離し、「並置」することに対して、我々の真の体験が、対象が相互に「溶解浸透」する時間であるとする。そして、「真の自我」では、意識は「互いに浸透融解して一の要素は他の全体の要素で色づけられて居る」ため、「各人の愛情憎悪などは全体の個人性を反映して居るもので、各人共通の愛情など云ふものはない」。しかし、「言語は特殊な個人性を背景とした愛情や憎悪を現はすことが出来ないから、愛情や憎悪の客観的非人格的方面のみを表出するのである」。「永久に変化の状態たる感情其物」を、我々は、「言葉に表はすために固定化」し、言語とこの感情と混同してしまふ、とベルグソンは指摘する。言語は「固定化」するものであり、「言語は我々に対する印象中の固定共通の従つて非人格的要素を含ん

で居るから、個人の意識の繊細な隠微な印象を暗まして了ふ」。

同様の主張は、「笑い」でも見られる。ベルグソンは、ここで、言語について以下のように論じている。

我々が認識してゐる感情は、非人格的の面のみで、言葉によつて一旦記し得たもの、みである。何故かといふに、言葉なるものは、同一の条件の下にあつてはあらゆる人にとつて、殆ど同一のものであるからである。かやうな訳で、吾々は自己の中にあつても、個性を逸し去るのである。

ベルグソンは、芸術家は「言葉に写し得る歓喜悲哀の情よりも、もつと奥に、言葉とは全く縁の無いもの」をつかんでおり、それは「最も内的なる感情よりも一層奥底に潜める生命のリズム、呼吸のリズム」だとしている。「官能なり意識なりが、實在に就いて知つてゐることは、僅かに実用的に単純化したもの、みである」という言葉もある。

以上のような、ベルグソンの言語観は、片岡と共通する。片岡も、「文章」について、それが他者と共有されるものであることを問題にしていた。そして、ベルグソンも片岡も、言語が個を捨象することを批判する。以上のような共通性から、彼の言語観は、ベルグソンから影響を受けていると言えるのではないだろうか。

## 7 モダニズムと「若き読者に訴ふ」

日常的な認識とは異質な認識としての感覚、共有された経験としての事実、認識と言語の相関性が、片岡の主張であることを明らかにし、動的なものへの関心を踏まえて、認識と言語の相関性がベル

グソンに由来するのではないか、ということ論じてきた。次に、片岡の、こうした主張がモダニズムとして正当なものであることを考察する。

片岡の意図は、第一に、日常性への批判である。彼は、日常的な意識の中で関心を向けられてこなかった、感覚の意義を復権しようとする。我々が、日常、当たり前と思っている認識を批判し、それに揺さぶりをかけようとするのである。

それは事実を客観的な対象として、固定的・普遍的にとらえるリアリズムへの批判である。我々が事実とみなしているのは、他者と共有された認識に過ぎない。それは、感覚という真の現実を排除するものである。リアリズムは、実は真の事実をとらえていない、という認識によって、非リアリズムの文学の可能性を開くのである。さらに、これは表現のレベルでの革新を必然とする。感覚を排除する日常的な意識は、「素直な文章」と対応している。従って、日常的な意識を批判することは、「素直な文章」への批判でなければならぬ。リアリズムの批判は、描く題材の革新ではなく、その文章そのものを革新することが不可欠である。

片岡は、こうした理論の筋道を通って、新たな感覚の表現を主張した。表現の実験によって、リアリズムを否定し、疎外されていた感覚と個の固有性を復権させるのである。ただ、他者との共通性を批判した結果、個の固有性に根ざす感覚を、表現としていかに他の個人である読者に理解させるのか、ということはアポリアとして残る。コミュニケーションによって伝達されるものは、他者との共通性であり、それを片岡は否定しているからである。そのため、表現された感覚が、「読者の同様の感覚」を「幻想されたる物の状態の上

に溶合せしめ」という比喻によるしかなかったのである。

こうした理論的な難点はあるものの、片岡の新感覚の論は当時勃興しつつあった、モダニズム芸術と問題意識を共有している。

二十世紀のモダニズムが企図したのは、十九世紀の芸術の規範であつたリアリズムの超克である。モダニズムは、リアリズムがとらえようとしていた日常的で、客観的とされた現実に対して、新しい現実、新しい精神の領域を提示する<sup>(注10)</sup>。日常的な認識の批判と、現実認識の拡張こそモダニズムの特徴である。

サンボリズムは、分節化出来ない、微妙な心理を言語化しようとし、ジョイスやウルフらの意識の流れもまた同様である。そして、シュルレアリズムは、フロイトの精神分析を背景に、人間の無意識を追求する。絵画でも、印象派は、うつろいゆく光をタブローにうつしとろうとし、キュビズムは多元的な現実を対象とする。未来派が描こうとしたものは速度であり、時間である。カンディンスキーやモンドリアンは、抽象絵画によって、リアリズム絵画のような物質ではなく、精神を描くことを目的とした。

こうした新しい現実、新しい精神の領域を描くために、新しい形式・手法が、形式の刷新が求められる<sup>(注11)</sup>。従来のリアリズムの手法は、新しい現実をとらえることが出来ない。客観的な対象と対応をするリアリズムの限界の認識が表現の革新を必然とする。

サンボリズムは、直接的な叙述ではない、象徴による暗示を用いる。意識の流れでは、客観的な描写のない、切れ目のない内言や、断片的なイメージによってテキストが構成される。シュルレアリズムの詩は、本来結びつかないイメージを結合する。印象派の絵画では、光をとらえるため、対象が明確な輪郭を失う。キュビズムは、

遠近法を無視し、対象の諸側面を同時に描き、未来派は、印象派の点描やキュビズムを継承する。表現主義は、人や物の姿をデフォルメし、カンディンスキーやモンドリアンは、精神を描くために、物質を排除した抽象に向かう。

後の、ダダや構成主義などが、対象から完全に切り離されたオブジェを作るが、二十世紀初めのモダニズムは、新たな現実を描くために、非リアリズム的な、手法の革新を行った。シクロフスキーの「異化」の概念は、こうしたモダニズムの論理を、汎用性の高いモデルに変えたものである。<sup>(注11)</sup>

以上のことを踏まえると、片岡の主張が、二十世紀のモダニズムと同じことを企図していたことは明確である。彼は、感覚という、日常的な認識とは異なる認識の領域を文学的なテーマとした。すでに論じたように、片岡の言う感覚の内実はあいまいであり、そのため、他のモダニズムにおける持続した意識の流れや無意識と比べ、日常からの離脱が明確ではない。しかし、他のモダニズムと同様に、片岡の本来の意図も、日常性の批判であった。そして、それを言語化するために、彼は、横光の作品にみられる非リアリズム的な表現を評価したのである。ここでも、新感覚派の擬人法や比喩などが、意識の流れやシュルレアリスムのイメージの飛躍と比べると、微妙であったとしても、その方向性は同じである。二十世紀的な、手法・形式の革新こそ、片岡の主張であったのである。

## 8 川端・横光との関連

片岡のモダニズムの主張は、続く川端や横光の主張にどう受け継

がれていったのか。

川端の「新進作家の新傾向解説」は、片岡の主張と主要な点で共通性がある。川端は、「百合と私が別々にあると考へて百合を描く」、つまり主客対立を前提とした対象認識を「自然主義的な書き方」とする。そして、「百合の中に私がある。私の中に百合がある」という「新主観主義的表現」をこれに対置する。別のところでは、これを「自我一如」「万物一如」とも呼んでいる。片岡が、「心」や「単なる事実の報告」と言うにとどまった日常的な認識を主客の対立ととらえ、新たな認識をその超克と位置付けている。しかし、日常性の批判という構図は同様である。川端もまた、従来の認識とは違う、新たな認識を感覚として主張している。

さらに、川端は、言語による精神の制約という問題を取りあげる。彼は、文章は「お互いの思想感情を言葉で了解するための規約」であり、必然的に「非個性的」で、「非主観的」であると述べる。そして、「文芸が契約芸術の悲しみ」を持つていと主張する。言葉は、他者と共有される「契約」であり、そのために、共通の内容を持つた「非個性的」なものであり、文章もその「契約」から免れない、と川端は言うのである。

それに対し、「私達の頭の中の想念は、この規約通りに浮びはしない」。ダダイズムは、秩序に収まらない、人間の精神の自由さをとらえるものである。だから、「最も主観的」で「直観的」で、「感覚的」なものである。こうしたダダイズム的発想を、新たな可能性として、川端は評価する。そして、「文芸史上の総ての新文芸運動は、新しい表現様式の出現は、一面から見れば、人間の精神が言語の不自由な束縛から解放されやうとする類ひの爆發である」というのである。

川端が、言語による精神の制約というとき、問題となつてゐるのは、対象に対する認識の問題である。何かを感じるときに、その感じ方が、言語によつて規定されてゐるのである。対象それ自体の属性の問題ではない。それが、単に他者と共有された認識というだけではなく、言語と相関して論じられてゐる。この点について、川端が神保格の言語学から影響を受けたことが指摘されてゐる。しかし、事実ではなく、事実に対する認識と、その言語との相関性を問題とすることは、川端ほどの明晰さを持ってゐないものの、すでに片岡の主張にあつたものである。川端も片岡も、我々の認識を制約する言語への批判から、新たな表現の可能性を探つていく。

片岡、川端に続く新感覚派の論文が、横光の「感覚活動」である。しかし、横光の論文は、片岡、川端と、これまで見てきた点で大きく違つてゐる。

横光は、「新感覚派の感覺的表徴」は「自然の外装を剝奪し物自体」に躍り込もうとするという。「物自体なる客観」を認識するためには、その認識は「悟性と感性との綜合体」である必要がある。通常「感覺」は、「純粹客観から觸発された感性的認識の質料の表徴」であるが、「新感覺」は、それを「觸発」するのが、「純粹客観のみならず、一切の形式的仮象をも含み意識一般の孰れの表象内容をも含む統一体としての主観的客観から觸発された感性的認識の質料の表徴」である。その「表徴」には、「悟性」が、より強く活動している。

晦渋であり、端的に理解に苦しむ文章であるが、彼が捕えようとするのは、「自然の外装」、つまり、表面には表れない、対象の本質である。それは普通の感覺で認識しただけではわからない。そのた

めには、「感性」、つまり通常の感覺的認識だけではなく、それ以上の「悟性」を働かす必要がある。普通の感覺は、日常的に認識できるものを描く。これがリアリズムに当るのである。それに対して、「新感覺」は、日常で認識できるものに縛られない。「一切の形式的仮象」以下の記述は、描くイメージが客観的現実と対応しないこと、そこに意識が反映していることを指しているのではない。客観的に存在するイメージに限定されることなく、「悟性」を働かせて、対象の本質をとらえようというのが、横光の主張である。

まず、彼がとらえようとしているのが、「物自体なる客観」であることは、片岡、川端と大きく違う。横光は直接、対象を問題にする。表層と深層というモデルに基づき、「外装」という表層の下にある深層の、対象の本質に迫ろうとするのである。横光の「感覚活動」に、当時の表現主義や象徴主義の影響があることも指摘されてゐる。

それに対し、片岡や川端は、現実に対する一種の構成主義の立場に立つ。現実をいかに認識しているのかを踏まえ、その認識を再編成しようとする。我々の認識の中の新たな可能性を追求する。これは、他の二十世紀のモダニズムにも共通する志向である。

さらに、片岡、川端が関心に向けた言語の問題が横光には見られない。描く対象に関するイメージへの言及はある。しかし、それを表現する言語一般への関心が横光の論には見られない。そのために、「物自体」を表現するために、なぜ、新たな言語表現の実験が必要なのか、が理論的に不明確である。「一切の形式的仮象」は、言語とどういう関連を持つのか、横光は論じてゐない。

あくまで、「感覺活動」という論に限るが、片岡・川端というライオンの主張と、横光の主張との間に、差異があつたことは、明らかで

ある。横光の論は、片岡や川端の問題と、別の問題意識によって書かれている。むしろ、横光は、二人が切り開いた新たな認識を継承・発展し得なかったのである。

## 9 時間意識と肉体

これまで考察してきたのは、片岡が旧来の文学観を超克する上で立脚した認識論についてであった。本章では、初期の片岡における時間と時代の問題を取りあげる。

片岡は、常に、過去と未来から切り離された、「今」を重視する。それはきわめて短い瞬間にまで凝縮される。

片岡の言う感覚は、瞬間のものである。「若き読者に訴ふ」で、片岡は、「頭ならびに腹」の最初の一文のみを問題にした。これは、汽車が驀進してくるといふ出来事に遭遇した際の、その瞬間の作者の感覚をあらわしている。片岡は、前後を切り離し、瞬間的な時間を特権化するのである。

「若き読者に訴ふ」では萌芽的だった瞬間は、「道徳と感覚」〔『文芸時代』大―四・九〕では、論のキーワードとして前景化される。彼にとって、「永遠の尺度」(「道徳と感覚」)や不変性は否定の対象である。ある瞬間に続く次の瞬間は、「新に創造された世界の瞬間である」と片岡は言う。片岡は、世界は変化するという認識によって、連続性を否定するのである。そこには、瞬間しかない。彼にとって、「生活とは瞬間々々の詩であり、愛であり、争闘である」。さらに、彼は、「瞬間々々に創造される生活には、瞬間々々の美の追及がある」とし、この「瞬間々々の道徳を創造する」のが、新たな「良心」

である、と主張する。「良心」の内容は、片岡の他の概念と同様に不明確だが、重要なことは、片岡が、今という瞬間の生に、新しい芸術と倫理を築くことを構想したということである。

「今」の重視は、「答案一つ」〔『文芸時代』大―三・一〇〕と「道徳と感覚」では、現代という時代の肯定に拡大される。

その背景にあるのが、伝統的・精神的な価値の終焉という時代認識である。片岡はしばしば現代は人類滅亡に向っていると語った。「答案一つ」では、「人類滅亡」は、「宿命」であり、「物質文明」のもたらす「頹廢」も「歴史的必然」であるという。「道徳と感覚」では、「資本主義文明の一切が退廢の表現」であると、その現象として「科学」及び機械の勢力「階級意識の自覚」「暴力の露骨な自己主張」や産児制限、「欲望の弁解」としての恋愛至上主義などをあげる。片岡は、これを人類の「滅亡」と表現しながら、より正確には、これは「人間の精神的意義」の衰退であると言う。「新感覚派の表」〔『新小説』大―五・四〕では、「人類滅亡」という「悲観的な意義を付与するのは、旧来の尺度其物である」と言っている。杜が指摘するように、片岡の主張は、伝統的な世界認識・道徳観・人間観の終焉なのである。人類そのものが滅亡することではない。

この認識からもたらされるのが、過去と切り離された現在の肯定である。過去の世界認識・道徳観・人間観は、すでに無効である。片岡は、現代の意義は過去の価値観の終焉から始まるという。「答案一つ」では、「新時代」の文学の目的は、「頹廢」した社会を「享樂」することに、「新しい可能性」を見出すことである。「道徳と感覚」では、「近代の諸相を与へられた物」とし、「この中に生きることを条件として、我々はこゝに生まれて来た」のだから、「現代を愛」す

るべきだと、現代を積極的に肯定する。片岡は、現在を、過去から切り離し、動かし難い所として、そこから、文学の創造を出発させるべきだとする。彼は、瞬間と共に現代であることを特権化するのである。

片岡が、現代の意義とするのが「肉体」である。「若き読者に訴ふ」では、感覚が独立した概念となっているが、他の彼の論では、感覚はしばしば「肉体」と関連付けられる。「答案一つ」や「道徳と感覚」では、「精神」だけではなく、「感覚」と「肉体」を持った生活こそ現代の生活であることを片岡は論じている。精神を重視した文明の終焉は、「下等な欲望の発現として排斥」された「感覚生活」「肉体生活」の意義が復権される時代なのである。

片岡は、認識においては感覚を重視し、倫理や生活の問題では、精神に対する「肉体」を対置して、価値転換を図ったのである。両者は関連し、哲学的にはいわゆる身体論として、思想的に深化できる可能性を持っている。しかし、片岡は両者の関連については十分に論じていない。むしろ、「肉体」を、性や風俗の問題としてとらえていた。次第に、片岡は、性や欲望と関係する、現代の生活への関心に重点を置いていく。<sup>16)</sup>

彼の関心の変化は、リアリズム批判を中心とした文学論にも反映する。彼は、リアリズム批判を、認識論ではなく、人間のイメージの問題にシフトさせていく。普遍的・固定した人間像を描くことを批判し、新感覚派は、現代という時代の新たな人間のあり方を描くと主張するのである。「新感覚派の表」では、まだ認識論への言及があるが、おざなりの感否めない。さらに、「止めのルフレエン」(『文芸時代』昭二・四)では、認識の問題は抜け落ち、変化する時

代に関心が集中している。片岡が、その実例としてあげるのも、経済的に自立するとともに、「女性の性的行為が自由」になり、「性道徳」が変化するという、風俗的な現象である。

同じことが、「新しき文学とは」(『創作時代』昭二・一〇〜昭三・一)にも言える。片岡は、リアリズムの目的を、「日常生活の描写」と個人の心理の解剖であると指摘する。続けて、リアリズムについて、その人間に対する見方が、「苦悶の深淺」を中心としていること、そうした見方が「既成の常識」に基づくものであると、従来の批判を繰り返す。そして、ここでも、新しい文学の課題は、「此の時代の真実」をとらえているかどうか、である。リアリズムについての一般的な議論を深化させるのではなく、現代の生活を文学の判断基準としている。そこで、例としてあげられるのも、飛行機と、「男の生理試験」を問う、性に対する規範意識の変った現代の女性である。

マテイ・カリネサクは、モダンの特徴を「うつろいややすさのなかで掴み取られた感覚的な現在に自己を同一化しようとする傾向」であると<sup>17)</sup>している。杜も、風俗的な、片岡の「輕薄」さが、自覚的なものであることを指摘する。<sup>18)</sup>片岡は、確信的に今を特権化すること、時間意識の点でも、モダニズムの主張を鮮明化させたのである。

## 10 まとめ

本論では、「若き読者に訴ふ」における、片岡鉄兵の感覚、事実、言語に関する主張を検討し、それが理論的にモダニズムと呼ぶに値するものであることを明らかにした。また、その時間意識について

も、モダニズムの特徴が主題化されていることを論じた。その後、左傾した片岡は、こうした議論を深化させることは無かった。しかし、彼の主張は、新しい文学の方向性を鮮明にしたという点で、大きな意義があったのではないだろうか。

#### 注

- (1) 片岡鉄兵全体の研究についても、先行研究は多くない。以下にあげる。菊池弘「片岡鉄兵論」(『日本近代文学』昭四七・五)、岡岡彬一「片岡鉄兵における新感覚派成立の問題」(『白百合女子大学研究紀要』昭四九・一二)、同「片岡鉄兵論——新感覚派文学からプロレタリア文学へ」(『国語と国文学』昭五〇・四)、中村良衛「新感覚派時代の片岡鉄兵——「理性」的文学の相貌」(紅野敏郎編『新感覚派の文学世界』(名著刊行会、昭五七・一二)所収)、中川成美「新感覚派という〈現象〉——モダニズムの時空」(栗原幸夫編『廢墟の可能性——現代文学の誕生』(インパクト出版会、平九・三)所収。後、『モダニティの想像力』(新曜社、平二二・三)の第三章として所収)、岩田光子「片岡鉄兵の文学」(『片岡鉄兵 書誌と作品』(京王書林、平二二・一一)所収)、廣瀬陽一「勝ち組」になりたい!——流行作家・片岡鉄兵の日本帰郷——(『昭和文学研究』平二一・九)、島村輝「片岡鉄兵——「失われた環」としての」(『国文学解釈と鑑賞』平二二・六)、土田俊和「結びつく「感覚」と「肉体」——新感覚派時代の片岡鉄兵——」(『横光利一研究』平二九・三)。
- (2) 杜翔南「物質的他者の反乱 片岡鉄兵と中国新感覚派に関する研究」(博士論文)(平二九・六、東京工業大学)
- (3) 杜は、片岡の言う感覚について、感覚は、「言わば物質のインターフェイスで、五感であれ直感であれ感覚は意識とは独立に存在し精神的・身体的(五官、無意識)、取りも直さず物質的なものである」とし、「感覚の強調」は「作者の意識の中から脱出」することであると分析している。次の注で紹介するリアリズム観をもとに、「物質を捉えるには作者の意識を遮断した感覚による表現が必要である」とも述べている。結論については賛成だが、「若き読者に訴ふ」における感覚と「心」との関連など、テクストの重要な言葉についての具体的な分析がなされていない。
- (4) これについても、杜にすでに指摘がある。片岡が、リアリズムを「客観的な現象のそのままの再現というよりもむしろ架空の固定観念による解釈」であり、「作者の固定観念が読者の意識に働きかけ、その中にある同様な観念を喚起し強化するものである」ととらえていることを指摘している。さらに、「外的・客観的現実の複写と考えられるリアリズムの作品は作者の、現実への観念的な認識でしかない」と分析している。本論も、これについては杜の主張と同様である。しかし、杜は、以下の章で論じる言語との関連については触れていない。
- (5) 杜前掲
- (6) 大正三年四月平凡社刊。引用は、大正五年二月再訂大増補版を、二〇二三年六月平凡社から復刊したものによる。
- (7) 以下の、「意識に直接与えられたものについての試論」からの引用は、北聆吉『ベルグソン哲学の解説及び批判第一編 時間と自由意志 哲学入門』(南北社、大三・四)による。
- (8) 「笑い」に関する引用は廣瀬哲士訳『笑の研究』(叢山書店、大三・

(9) 四)による。以下の引用も同様。

日常性の否定について、高橋秀爾は、二十世紀美術について論じるなかで、「単なる反写実主義、反自然主義から、特異なもの、異常なもの、非日常的なものへの積極的関心、あるいは特殊な感覚世界の強調ないし誇張、部分的、断片的なものへの強い傾斜、さらには、きわめて日常的なものに非日常的な意味を与えようとする逆説的態度にいたるまで、二十世紀の美術には一貫して平凡な日常的感覺世界を拒否しようとする方法意識が見てとれる」と指摘している（高橋秀爾『20世紀美術』(ちくま学芸文庫、平五・四) 序章「現代美術の課題」）。

(10) 丹治愛は、モダニズムの、客観的なリアリズムへの批判を二点あげる。その一つが認識への反省である。「現象の背後に客観的に——主観から独立して——世界が実在し、かつそれがあるのままに認識可能であるというリアリズム」に対して、モダニズムは、「現実はその認識する意識とどのような関係において存在しているか、またその現実をありのままに認識することは可能か、という認識論的な反省へと転換している」。もう一つが、形式の自立性である。オルテガの「芸術の非人間化」を引用しながら、「芸術作品は現実を透かして見るための透明な窓ガラスではなく、むしろ不透明なもの」であり、「それ独自の恣意的な論理と形式とをもったもの」というのが、モダニズムの思想であるとする（丹治愛『モダニズムの詩学』(みすず書房、平六・五) 5 「印象主義とフォーマリズム」）。丹治は、前者を「リアリズムの延長」とし、後者をより徹底した反リアリズムと評価する。しかし、両者は判然と区別できない。丹治は、認識への反省の記述の中で印象派を例にあげているが、印象派もまた絵画の手法・

形式の革新をもたらしている。本論は、認識の反省と形式の自立を別とするのではなく、両者が関連することを重視する。

(11) 田口律男は、新感覺派にシクロフスキーの「異化」に近い試みを見出している（『都市テクスト論序説』(松籟社、平一八・二) 第二部第二章2「新感覺派文学という現象」）。ただ、田口の論では、「若き読者に訴ふ」への言及はない。

(12) 片山倫太郎「川端康成の思想構造——その表現理論と主体——」(『国語と国文学』平二・五)

(13) 高橋幸平「新感覺・理論と象徴主義」(『国語国文』平一九・九)

(14) 丹治前掲及びマイケル・ベル「モダニズムの形而上学」(『モダニズムとは何か』(松柏社、平一四・六) 所収) の「II科学」などを参照。

(15) 杜前掲

(16) 土田は、片岡に性に対する継続的な関心があったこと、その契機として、グールモンの影響が考えられることを指摘している。

(17) マテイ・カリネサク『モダンの五つの顔』(せりか書房、平一・二) I 「モダンの観念」

(18) 杜前掲

# 川端康成「禽獸」論

——川端の宗教観による解釈を中心に——

吉 満 律 成

## 序論

川端康成「禽獸」は一九三三年七月、「改造」に發表された。<sup>(注1)</sup>

「禽獸」に関する論文は約五十本存在する。その中で田中実<sup>(注2)</sup>は、「冒頭、主人公「彼」はヒロイン千花子のいる日比谷公会堂に向かって車を急がせていた。その間「彼」は「白日夢」を見ていた。それが「小鳥の鳴声」によって破られ、気付いて見ると、目の前のフロントガラスに「二十三」とある。「二十三」という数字に特別喚起させるものはないが、車の混雑ぶりはよく分かり、「彼」の車は「葬ひの自動車」の列<sup>(注3)</sup>に挟まれて渋滞し、住職の葬式のある禅寺の前にあつた。」と論じている。確かに、単語の表面的な意味を捉えるならば「二十三」という数字そのものに、「特別喚起させるものはない」のは確かである。しかし、カギ括弧で括り強調されているため、何らかの意味が込められていると考えることもできるのではないか。

また、馬場重行は、「禽獸」の中で唯一固有名詞を与えられている存在である千花子は、その名のとおり、廣大無辺で華やかな、実態のない、がらんどうな存在として語られている。先述したように、この作品全体を覆う雰囲気は甚だ仏教(禪)的なものである。(中

略)そして、「彼」は正にそうした禅的世界の前を通過していくだけの存在なのである。決して門を潜りはしない。作中に夥しい死が多く語られてあるのも基底に禅的世界が潜んでいる故であり、死の捉え方も禅的なものを要求している。」と論じている。<sup>(注3)</sup>しかし、千花子という名前が「その名のとおり」「実態のない、がらんどうな存在」として語られているという点に疑問が残る。作品で唯一固有名詞を与えられている千花子という名前には何か仏教的な要素が込められているのではないか。

また、岩田光子は、「彼ののぞむ幸福、喜びは、新しい生命の誕生」である。それは、種族保存<sup>(注4)</sup>につながる。ただし、性<sup>(注5)</sup>の認識はあくまで、生殖<sup>(注6)</sup>の手段という全く生物学的な認識に立つゆえに、倫理から解放された無拘束の性<sup>(注7)</sup>である。」と論じている。確かに、「犬の出産と育児が、彼にはなによりも楽しい」ため、「新しい生命の誕生」を喜んでいるという意味では岩田の指摘には説得力があると言えるが、種雄として名高いとされている日本テリアが登場する場面では、その風貌を目の当たりにして「さすがの彼も目をそむけ、無気味な思ひ」をしている。そのため、性の認識は「倫理から解放された無拘束の性<sup>(注8)</sup>」であるという考えには疑問が残る。

また、「彼」はポストン・テリアが産んだ「袋児」を見殺しにしている。馬場が述べる「禅的な「死の捉え方」とは、馬場の言葉を借りて言えば「死なせてやることで生じる幸福」である。そのため、岩田の指摘である「彼ののぞむ幸福、喜びは、新しい生命の誕生」であるとは一概に言えないのではないか。

本論では川端の宗教観に注目し、その生い立ちと川端自身の作品、及び関心を持った作品を紐解くことによって、千花子の役割と「彼」の望み、さらには「彼」の末路について追究する。

## 第一章 川端康成の宗教観

### 第一節 川端康成と北条泰時の関係

川端の宗教観を論じる前に、まず川端の生い立ちについて確認しておく。

太田鈴子によると「川端康成が「大黒像と駕籠」(大正一五年(一九一六)・九「文藝春秋」)には、先祖が北条泰時だという証拠の金箔の木額があるという話しを書き、「十六歳の日記」(大正十四・九「文藝春秋」)には「この家は北条泰時から出て七百年も続いたんやさかい」と書いている。「川端康成が、北条泰時の子孫とあえて書くのは、(中略)泰時が良いイメージで世間に知られていたからでもあったのではないだろうか。肉親を早く失い、後ろ盾の乏しい身分であった青年期の川端康成にとっては、北条泰時の影は支えになりうる存在だっただろう。」と述べている。川端は「三歳で父を亡ひ四歳に母を失ひややく小學に入った八歳に祖母を失ひ十三歳に不幸

な姉を失ひ(中略)唯一人の祖父」までも失ってしまったと述べ、天涯孤獨の身となった。そんな川端にとつて、確かに北条泰時は支えになり得る存在であったと考えてもおかしくはない。その北条泰時は仏教説話集『沙石集』(巻第三の三)に登場する。例えばその一つに次のような説話がある。

實二情アリテ、萬人ヲハグ、ミ、道理ヲモ感ジ被レ申ケル。マ  
メヤカノ賢人ニテ、仁惠世ニ聞へ、道理程面白キ物ナシトテ、  
道理ヲ人申セバ、涙ヲ流シテ感ジ申サレケルトコソ聞傳ヘタル。  
民ノ歎ヲ我歎トシテ、萬人ノ父母タリシ人ナリ。

まことに泰時は人情に厚く、万人をはぐくみ、道理のあることを讃められた。誠に本当の賢人であつて、その慈愛と恵みは世に知られるのである。「道理ほど面白いものはない」といつて、道理を人が申せば涙を流して感心し讃められたと伝えられている。民の嘆きを我が嘆きとして、万人の父母だった人である。

以上のように、泰時の優れた人格であつたことが書き記されている。また、川端は「中學に入つてから寂寥な心をなぐさめる爲に心を讀書によせた「讀書狂となつた」(注10)「文学書のめぼしいものはほとんどもらさなかつた」とも述べている。したがつて、川端は「沙石集」を読み込んでいたと言えるのではないだろうか。その根拠として、『卵』との共通点が挙げられる。『卵』は夫と、その夫を「異物」であると思う妻と、その娘秋子が登場する。秋子はいやな夢を見た

と云う。その内容は、夢の中で自分は死んでおり、真つ直ぐな道を歩いていると「妙なお婆さん」がどこまでも後を付けてきた。逃げ込んだ家は卵が沢山積んであり、その家から秋子は昇天したというものであった。<sup>〔註11〕</sup>秋子は、母親の体調が悪いので卵を飲ませようとしてきたが、妻は「私はなんだか気味が悪くて飲めませんね。あなた召し上がれ。」と夫に卵を勧めたというものである。

『沙石集』(巻第九の一四)「鶏の子を殺して報ひたる事」は以下の通りである。<sup>〔註12〕</sup>

尾州ニ女人アリ。子ニクワセムトテ、鶏ノ子ヲアマタ殺シケテ。或時夢ニ、女人一人來テ、我子ガ臥タル枕本ニウチキテ、「子ハ、絲惜キゾカシナク」ト云テ、ウラメシゲナル氣色ニテ、ウチ泣キくスルト見テ、此子、ナヤミテ程ナク失ヌ。

尾州に、女がいた。子供に食べさせようと、鶏の卵をたくさん殺した。ある時、夢にとある女がやって来て、女の子が寝ている枕もとに座り、「子供とはかわいものだよ、かわいものだよ」と恨めしそうな素振りで繰り返し泣くと夢に見て、女の子が病気にかかり、間もなく亡くなった。<sup>〔註13〕</sup>

この短い二つの話には「卵」、「夢に出てくる女」、「子が亡くなる」という共通点が確認できるのである。

更に、伊藤博之・今成元昭・山田昭全らによると、『沙石集』には「不空羂索經」についての記述がある。<sup>〔註14〕</sup>その内容は以下の通りである。

『沙石集』(二・八)に「不空羂索經の二十七卷の中には『此の陀羅尼を満て、土沙を加持する事一百八反して、此の土沙を墓所に散らし、死骸に散らせば、土沙より光を放ち、靈魂を救ひて、極楽に送る』と説かれたり。念仏には是程の文証未だ見及び侍らず」と、本經の卓抜した功德が紹介されている。

不空羂索經が人を救うということに関していかに力を發揮するかが分かる。

次節では「不空羂索觀音」と禽獸、千花会の関係を考察していく。

## 第二節 不空羂索觀音と禽獸、千花会の關係

「不空羂索觀音」とは「梵 Anoghapāsa の意識。「索」は鳥獸をとらえるわな。「不空」は失敗することのないことを意味する。仏語。六觀音、または七觀音の一つ。慈悲の羂索をもつて一つの失敗もなく衆生を救済する觀音。その陀羅尼(だらに)を誦持すれば、現世に二〇種、臨終に八種の利益があるという。」という意味である。<sup>〔註15〕</sup>また、作品名の「禽獸」とは「鳥と、けもの。鳥獸。また、恩義を知らず、道理をわきまえない人のたとえ。」という意味がある。<sup>〔註16〕</sup>「禽獸」の出典の一つに「而其流之弊、孟子<sup>〔註17〕</sup>至比<sup>〔註18〕</sup>於禽獸夷狄。」とあり、「彼らの末流の弊害を孟子は禽獸・夷狄(人間性を喪失することを禽獸夷狄に例える)になぞらえたのであって」という口訳になる。<sup>〔註19〕</sup>

ここで、作中で唯一固有名詞を与えられている千花子の名前の意義について考察する。「千花」は「いろいろの花。多くの花。」という意味がある(その出典は「鬪百草一、鬪千花一。」であり、口訳は「百草を互いにたたかひ合せ、数多の花を合せる。」である)<sup>〔註20〕</sup>が、

関連する興味深いものとして、「千花会」が挙げられる。「千花会」とは「東大寺の羅索堂で六月二三日に行った、千の造花を仏に供養する法会」を意味する。<sup>注21</sup>

したがって、川端は『沙石集』を読んだことがあり、そこから「不空羅索観音」を知り、『禽獸』の題材にしたとも考えられる。

「不空羅索観音」像は「東大寺法華堂（三月堂）の本尊像が有名」であるとされている。「讀書狂」である川端は、そこから東大寺について情報を集め、東大寺千花会の存在を知ったと推測できる。

その根拠は次の文章から考えられる。

運轉手の顔の前のガラスに「二十三」といふ番號札を貼り附けていた。

禪寺の庭からなにか六月の木の花の惱ましい匂ひが流れて来た。

しかしここで触れておかねばならないことがある。「千花会」は「六月二三日に行った」とされているが、正しくは「六月二三日」であると考える。

「千花会」の出典に「六月（二十二）東大寺千花会」とあるが、この（二十二）は第二十二条を意味する。更に「東大寺要録」によれば、本会は六月二十三日羅索堂での行事」であるとの記述がある。<sup>注22</sup>

確かに「廿三日千花會 於 羅索堂 行レ之」とあるため、「千花会」が行われたのは「六月二三日」であることがわかる。したがって、「二十三」という番號札、「六月の木の花」はどちらも「千花

会」を連想させるものであると言えるのではないか。

## 第二章 千花子の役割

古典について川端は以下のように述べている。<sup>注23</sup>

私は東方の古典、とりわけ佛典を、世界最大の文學と信じてゐる。私は經典を宗教的な教訓としてではなく、文學的幻想としても尊んでゐる。（中略）これは今まで人に打ちあけたこともない、川端家の楽しい祕法であつた。

川端は「文學的な幻想」として、千花子には「彼」にとつての「不空羅索観音」としての役割を課したと考える。以下考察していく。

「彼」は人間を嫌い、「動物の生命や生態をおもちゃにして、一つの理想の鑄型を目標と定め、人工的に、畸形的に育ててゐる方が、神のやうな爽やかさがある」と思つていた。

「彼」は動物に対して以下のように接していた。

けれども、次の朝目が覺めてみると二羽が一つの温かい毛絲の鞠のやうに眠つてゐる、その止木の下の籠の底に、一羽は半な翼を開き、足を伸ばし、細目をあけて、死んでゐた。

屑鳥など拾つてもしかたがないと、彼の佛心は忽ち消えた。

ところが、薄目を開く頃の或る朝、子犬が一頭死んでゐた。

彼はつまみ出して懐に入れると、朝の散歩のついでに捨てて来た。

しかし、彼の看病も一向しるしがなく、怠けがちとなり、縮んだままの足指は糞にまみれ、六日目の朝、菊戴の夫婦は仲良死骸となつてゐた。

鳥籠を窓の日差のなかに置いて、菊戴の死んでゆくのを、ただぼんやり眺めてゐた。

助かるはずの動物を見捨て身勝手に命の選別を行う「彼」は、人間性を喪失していると言えよう。

「彼」は十年近く前、「いつまでも獨身で動物と暮らしてゐる、さういふ生活に浮かぶ泡沫の花に似た思ひ」を抱き、千花子と心中しようとした。千花子を心中の相手として選んだのは、「まだこれでは生きてゐる」とは言えないようだと思つたからである。商売とは言え、「彼」に対して「私あなたはずゐぶん好きなの。」と言つた相手を「生きてゐる」とは思えず「死の相手」に選ぶ「彼」は、恩義を知らず、道理をわきまえない存在であると言えないだろうか。「彼女は「彼」に背を向けて寝ると、無心に眼を閉ぢ、少し首を伸ばしてそれから合掌した。「彼」は虚無のありがたさに打たれ、この女を愛りがたく思ひつづけねばならない」と感じ、「それから後は自殺を夢にも思はず、また口にもしなくなつた」。千花子が眼を閉じ、首を伸ばし、合掌している様子は「不空羅索観音」像と一致している。速水侑は「投じられた羅索から逃れられるものはないとされ」、「観音

が慈悲の羅索をもつて、もれることなくすべての人々を救い、その願いを満足させる」と述べている。<sup>註6</sup>つまり、「不空羅索観音」は鳥獸を捕らえるわな（羅索）によつて、禽獸、「彼」を救つたのである。「不空羅索観音」として千花子は、「彼」を生かすことに関して一つの失敗もなく、「彼」を救済したのである。

しかし「彼」にとつての救済とは何か」という疑問が生じる。福田淳子は以下のように述べる。<sup>註7</sup>

つまり、人間の成熟した大人の性を感じさせない（幼い初恋人）を至上の美しさとして（彼）は思うのであり、その理想を映し見ることができなのが菊戴なのである。（中略）菊戴は天に極めて近い、理想の鳥であり、何よりも（動作も潑刺としてゐて、まことに可憐ながら、高雅な気品）を放つ、小柄で活発で上品な動きを（彼）は気に入っているのである。

菊戴の夫婦を見て、「彼」は「人間でも幼い初恋人ならば、こんなきれいな感じに眠つてゐるのが、どこかの國に一組くらゐはあてくれるだらうか」と思う。また、「彼」は「男の鬱陶しさ」を極端に嫌うが故に「女性」が側に居ることを望んだ。これらのことから、「彼」にとつての救いとは、「彼」にとつての望みとは、「いつまでも彼の側を離れない、動作が活発な女性がいること」であると考えられる。

「彼」にとつての（幼い初恋人）とは、結婚し、出産をする前の千花子であった。「彼」に体を買つた時の千花子は「自分のしてゐること、なんの責任も感じてゐない」様子であった。生活のために体

がみられる。自我のない千花子を、「彼」は千花子の「生命」を「おもちゃ」にして「理想の鑄型」に嵌めることに、「神のやうな爽やかさ」を見出した。

確かに、「彼」が千花子の体を買ひ、千花子は「彼」に体を売るといふ関係は性差別的であるし、当時を思い出して「道徳的苛責な似たもの」を感じるまでに幼い少女を買つたことは年齢差別的であると捉えてもおかしくはない。しかし、馬場は「雄テリアへの「彼」の嫌悪感は、「彼」自らが〈母性的なもの〉への憧れを強く持つてゐることを暗示している」と述べている。また、「少年少女の文章を読むことを「彼」はなにより樂し」と感じ、その樂しみの中からこの〈母性の幻想〉の一文を見つけた(註28)としてゐる。つまり「彼」の極端な処女志向は単なる性差別でも年齢差別でもなく、「彼」が〈母性的なもの〉を強く求めていることに起因するものである。〈母性的なもの〉については第三章第二節で論述する。

やがて千花子が方々の舞台上に立つた頃、「彼」はその舞踊を見て「彼女の肉体の野蠻な類廢」に惹かれた。その舞踊は正に、〈動作も潑刺としてあて、まことに可憐ながら、高雅な氣品〉を放つていたのではないだろうか。そのため、千花子と心中しようとした時、「彼」は救われたのである。

しかし、千花子はやがて「彼」のもとを離れ、結婚し子供を産み、その処女志向は失われてしまった。

### 第三章 「彼」の末路

#### 第一節 救済を求めた末路

千花子の肉体は衰え、「野蠻な力の名残は俗悪な媚態」に変化してしまつた。ここに来て「彼」にとつての「不空羅索觀音」は「彼」の側を離れ、「彼」を救う存在にすることができなくなつた。つまり、「彼」は救ひを失つたのである。

「彼」は失つた救ひ、心の抛り所を求め、「なにか甘いものを見つけないければ」と慌てる。「一六で死んだ少女の遺稿集」を持つており、その母の日記の終わりに「生れて初めて化粧したる顔、花嫁の如し。」とあつた。

馬場は、「作品末尾の一句は、川端が文芸時評類で絶賛を惜しまなかつた山川彌千枝の「薔薇は生きてゐる」の一句である。」と述べている。(註30)「薔薇は生きてゐる」は病に伏した少女が残した日記と、その母の日記、後書きで構成されてゐる。(註31)

一六歳で死んだ少女は永遠に変わることのない存在である。「彼」にとつての救済が「いつまでも彼の側を離れない、動作が活発な女性がいること」であるならば、この少女は正に適していると言えるのではないか。その根拠として、母親の後書きに次のような一文がある。

生來かほそい質のやちえは、其快活さから弱々しい感じを消して居た。いつも元氣一杯な目の輝きは此子に病氣などといふ影をもたなかつた。

彌千枝は活発な性格であつたことが読み取れる。「生れて初めて化粧したる顔、花嫁の如し。」には、母親が思い描く理想の彌千枝像、すなわち病床に伏す前の活発な彌千枝像と、母親が見ることを望んだ將來の彌千枝像が読み取れると考へる。千花子は結婚し、その肉体は出産を経て衰へてしまつた。しかし、少女は亡くなつていながら、遺稿集の中では活発な少女として存在し続けるのである。

「彼」は菊戴の雌の死骸を見て次のように思う。

「どちらが死んだのかしら。」と鳥籠を上げしげしげ見てゐたが、豫期とは逆に、生き残つたのは、どうやら古い雌であるらしいかつた。一昨日來た雌よりも、しばらく飼ひな込んだ雌の方に愛着がある。その彼の慾目が、さふ思はせたのかもしれなかつた。

「彼」は「しばらく飼ひな込んだ」「古い雌」に愛着があることがわかる。千花子と「彼」が心中しようとした時、千花子の年齢を推測する。千花子は「十九の時、投機師に連れられて、ハルビンへ行き、そこで三年ばかり」舞踊を習つた時点でおよそ二二歳である。そこから自分の舞踊会を催すようになった千花子の「野蛮な頽廢」に惹かれ、「六七年前の千花子と思ひくらべて」不思議でなかつたという描写から、およそ十六歳であることがわかる。遺稿集の少女の年齢と同じである。

ただし、「いつまでも彼の側を離れない、動作が活発な女性がいること」とは結婚することを意味するのではない。武智政幸は、テクストを「禽・獸・人間」の三項に分けて考へた際、「禽」と「人間」<sup>(註16)</sup>とが最も離れた関係であるとした。千花子における最初の回想(十年

前「彼」に体を売る場面)では、「彼」の意識においてまだ人間となつていなかつた。ところが、二回目の回想(ボストン・テリアのように無心ではいられなかつた場面)では、千花子は「我」を張るようになつており、それは「彼」が嫌悪するものであつた。また、武智は、「心中未遂を図つたときの千花子」「白日夢」のなかで見る千花子は、「人間」からは最もかけ離れた「禽」性としての千花子であつたとし、「なぜあの頃結婚しておかなかつたのかとさへ思」いながら結婚して自分のものとしてつなぎ止めなかつた」のは、「結婚が千花子の「禽獸」性を保持するのに無効」であり、「結婚という結びつきが「人間」に近くなる」からであると述べている。<sup>(註17)</sup>十年前に心中しようとした時、千花子は「不空羂索觀音」という役割を持つていた。「不空羂索觀音」は「人間」を「慈悲の羂索をもつて、もれることなくすべての人々を救い、その願いを満足させる」存在である。心中未遂を図つた際の千花子に関して武智は、「唐突に用いられる「虚無」という言葉」は「生の世界と死の世界を同時に包含する世界」を表していたと述べている。「不空羂索觀音」として千花子は「彼」を「生の世界」へ導き出し、<sup>(註18)</sup>生きることに關して救済したのである。「禽」性としての千花子と「不空羂索觀音」としての千花子はどちらも「人間」からはかけ離れた存在であると言へるのではないか。

「花嫁の如し」とあるが、あくまで花嫁の相手は不在である。「古い雌」に愛着があることは、やはり千花子対する思い入れが強いということではないか。救済としての一六歳の少女の遺稿集は、千花子の代替である。

田中は「そもそも千花子との夢、十年來の「白日夢」が明らかじ

めどこかで破れることを予感していたために、十六歳の少女の遺稿集を「彼」は懐に入れておく必要があった」と述べている。「六月（二十） 東大寺千花会」には「散衆雑花遍十方、供養一切諸如来（衆の雑花を散ずること十方に遍く、一切の諸如来を供養せよ）」という記述があり、花を供養する功德について述べている。「彼」は小女に「花籠」（散華を入れる籠という意味がある）を持たせていた。「散華」とは「花をまいて仏に供養すること」である。その出典は「懸レ絵燃レ燈、散レ華焼レ香。以レ此廻向願レ生レ彼国」であり、その口訳は、「燈火をともし、華をまき、香を焚き、これらの功德を差し回して、阿彌陀佛の国に生まれたいと願う。」である。「彼」は「不空羅索観音」としての千花子に花籠を届けようとしたが、直接渡すことはしなかった。千花子に直接花を渡さなかったことは、「彼」は千花子に救済を求めることに終わりを感じていたことの暗示である。

東大寺法華堂の宗派は華嚴宗であるが、華嚴宗による救済には至らなかった。華嚴宗は偶像崇拜であるため、千花子が「不空羅索観音」という役割を持つことは、そこからも言えよう。

「彼」が「なにか甘いもの」として思い浮かんだ、「生れて初めて化粧したる顔、花嫁の如し。」という文句は、『薔薇が生きている』においては、その一句がカギ括弧で括られていない。しかし『禽獸』においてはカギ括弧で括られている。では、「生れて初めて化粧したる顔、花嫁の如し。」は「彼」の口から出たものであっただろうか。『禽獸』の本文における会話文の性質にはどのようなものがあつたのだろうか。「彼」が口にしたという確証はないが、引用文であれば二字下げでもよいし、改行することなく「その文句は、」の後に続けてもよいのではないか。したがって、『禽獸』では二字下げすることなく

改行していることと、カギ括弧で括られていることから、会話文と一致しており、形の上では「彼」の発言であると推定することができる。

では、なぜ「彼」はその文句を発言したのであるか。『美しい日本の私』には明恵上人と西行との歌物語が引用されている。

我またこの虚空の如くなる心の上において、種々の風情を色どるといへども更に蹤跡なし。この歌即ち是れ如来の眞の形體なり。

引用はなされていないが、この話には続きが存在する。

されば一首読み出ては一体の仏像を造る思ひをなし、一句を思ひ続けては秘密の眞言を唱ふるに同じ、我れ此の歌によりて法を得る事あり。若しここに至らずして、妄りに此の道を学ばば、邪路に入るべし

平泉流は、「自分もまたこの大空のような心の上に、いろいろと情趣を詠んでゆくものの少しも跡を残さない、そのままこれが釈迦如来の本当の姿である」だから和歌一首をつくるたびに、仏像御一体を造る気持ちです。一句の和歌を口ずさみ心にあれこれ思う間は、秘密の尊い眞言を唱えるのと同じ気持ちである」と解釈している。

西行は、一体の仏像を造る時と同じ気持ちで和歌を詠むことは、眞言を唱えることと同じであり、自身が詠む和歌そのものが、本当の釈迦如来の姿であると考えていた。「詠（読）む」とは、「歌・

詩・經典・文章などを) 声をたてて、一区切りずつ、一音ずつたりながらいう。声に出して唱えていく。唱えて相手に聞かせようとする」ことである。(その出典は「夜のふけにしかば、経などよませてなん、とまりにし」であり、その現代語訳は「夜がふけてしまったので、お経などを読ませて」である。) つまり、仏の教え同様に、西行自身の口から出る言葉を感じていたと考える。

明恵上人の宗派は華嚴宗であるが、高橋英夫は「仏教思想における諸宗の混在、もしくは無方向性は「心」の全方向性と噛みあっていた」が、「宗教における無方向性は「心」の全方向性と噛みあっていたとすべき」であると述べている。<sup>(注46)</sup> すなわち西行はあらゆる宗派に属さなかったと言えよう。つまり、川端が西行の歌物語、それも華嚴宗を信仰する明恵上人に西行が語る場面を最後に引用するということは、華嚴宗よりも西行の考え方を重要視していると言えるのではないか。千花子との関係に限界を感じていた「彼」は、千花子に直接花を届けることもなく、西行の考え方に沿う形で救済を求めた。そのため、「生れて初めて化粧したる顔、花嫁の如し。」という自分の口から出る言葉を信じたのである。

## 第二節 川端の宗教観と「彼」の動物に対する行い

康林は、川端が「特に愛着を持って」おり、他の作品において何度も引用したという一節について、以下のように述べている。<sup>(注47)</sup>

芭蕉は「悼松倉風蘭文」で「老荘を魂にかけて風雅を肺肝の間にあそばしむ」といい、代表的な作品『笈の小文』において次のように書いている。<sup>(注48)</sup>

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る処花にあらざといふ事なし。おもふ所月にあらざといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心礼にあらざる時は鳥獸に類ス。夷狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり。(傍線は著者康氏による。)

(中略) ここでは芭蕉は日本文化の基底にある美意識を、老荘の言葉(思想)によって表現して見せているのである。

康は、「たとえ間接であるとしても、老荘思想の感化をうけたことは間違いない」としている。「老荘思想」は「(無)は老荘思想における基本概念の一つである」とし、「老子」によると、人がこの(無)為自然)を体得したなら、彼は自然の万能を体現して、処世・政治などあらゆる事態に融通無碍に対処しうる」ことができ、「『莊子』の場合、(無為自然)とは存在者(有)の本来の(万物斉同)の相である。(無)とは、差異対立に一切の有限的存在者を否定し、否定に否定を重ねた果ての(万物斉同)であり、主客を含む一切の融合充足であった」思想である。<sup>(注49)</sup> 『美しい日本の私』では最後に西行の歌物語を引用しているが、「およそあらゆる相これ虚妄なる」「この虚空如くなる心の上において、種々の風情を色どるといへども更に蹤跡なし。」とは、平泉の解釈によれば「すべての姿は真実でない」のであって、「自分もまたこの大空のような心の上に、いろいろと情趣を詠んでゆくものの少し跡を残さない」とは老荘思想の、特に「莊子」

の万物斉同、「主客を含む一切の融合充足」ということと通ずるものがある。高橋は「仏教思想における諸宗の混在、もしくは無方向性が西行には否みようもなく存在していた」と述べているが、<sup>(註53)</sup> 仏教思想における諸宗の混在の一つに老荘思想が見られたと言えるのではないか。

上野洋三は『笈の小文』を以下のように解釈している。<sup>(註53)</sup>

西行があの名歌を詠んだときにも、(中略)花も見れば身も心も花になり、月を思えば身も心も月になる、といった具合に、花月の風流は、たちどころに現成するはずである。この身が、花月の風流を体現しないのでは、野蛮人とおなじことだ。この心が、花月の風流を心得ていないのでは、もの言わぬトリ・ケダモノとおなじことだ。なんとか未開野蛮の境地を脱し、トリ・ケダモノとちがうところをみせて、人間らしいところで生きたい。それは、天然自然に従順になり、その天然自然の根本のところ<sup>(註54)</sup>にたちかえって、あらゆる存在の根柢から出発しなければならぬ。

『笈の小文』では、心に思うものが花でない時は鳥獣と同じであり、鳥獣を離れて自然に従い、自然に帰ることは、西行の和歌にも通ずることであると述べられている。人間と違って鳥獣は、心に思うものが花ということはない。芭蕉は鳥獣を良いものとは考えなかった。しかし『禽獸』での「彼」は以下のように述べている。

しかし彼にしてみれば、新しい小鳥の来た二三日は、全く生

活がみづみづしい思ひに満たされるのであつた。この天地のありがたさを感じるのであつた。多分彼自身が悪いせみであらうが、人間からはなかなかそのやうなものを受け取ることが出来ない。貝殻や草花の美しさよりも、小鳥は生きて動くだけに、造化の妙が早分りであつた。籠の鳥となつても、小さい者達は生きる喜びをいっぱいに見せてゐた。

ここには、『笈の小文』に登場した「鳥獣」「造化」という単語が登場する。「彼」は小鳥たちに「造化」を見出し、「人間」には見出さなかつた。ここに芭蕉の考え方と異なる点が見受けられる。しかし「彼」は動物に「造化」を見出しているにもかかわらず、動物に残酷な行いを繰り返した。川端は「これは私の嫌悪から出發した作品である」と述べ、「冷たく、いやらしくつとめたものの、その頃の私の犬や小鳥に對する愛情が邪魔をして、十分徹底することは出来なかつた。」と述べている。<sup>(註54)</sup>そのため、「彼」の動物に對する行いには、川端の何らかの意図があると考ええる。

「彼」は動物を見捨てたり、看病をしてもやがて怠けがちになつたり、見殺しにしてきたりした。その考えの根底にあるのは「動物の生命や生態をおもちゃにして、一つの理想の鑄型を目標と定め、人工的に、畸形的に育てている(中略)動物虐待的な愛護者達は、彼はこの天地の、また人間の悲劇的な象徴として、冷笑を浴びせながら許してゐる」からである。だから「彼」は自分の手で動物を成長させることを望み、自分の動物を飼うことで周りの動物に目を向けなくなる程熱中した。その根柢は以下である。

どんな名犬でも名鳥でも、他人の手で大人となったものは、たとひ貰つてくれと頼まれたにしろ、飼はうとは思はぬのである。だから人間は、いやなんだと、孤獨な彼は勝手な考へをする。

犬には彼の心のやさしさが分るのだと、ありがたかつた。けれども、自分の犬を飼ふやうになつてからは、道の雑犬など見向きもなくなつた。人間についても、またかくの如くであらうと、彼は世のなかの家族たちをさげすみながら、自らの孤獨も嘲るのである。

たつみ都志は、「四十近いのに、未だ独身の「彼」にとつて人間存在とは、このような自己制御を適用できぬ、理不尽なものであった。倫理的、社会的規範が彼をがんじがらめにして「生命」や「生態」を「おもちゃ」に出来なくさせる」のであつて、動物を相手にしてこそ初めて、自分の理想とする姿を実行できるとしている。<sup>注55</sup>

動物に対する様々な残酷な行いは「彼」を「人間性を喪失」した「禽獣」たらしめる要因である。また、「禽獣」で「彼」は次のように述べている。

「どこかへ捨てといてくれ。西洋では、産れた子供をまびく、出来の悪い子供は殺してしまふ。その方が、いい犬を作ることになるんだが、人情家の日本人には、それが出来ない。——親犬には、生卵でも飲ましといてくれ。」

これは品種改良を指す一文である。三浦慎吾は、「品種交配の歴史

は古く、アリストテレスは『動物誌』のなかで、すでにテリアなど多数の犬種を記載し、より強いイヌの交配法を伝授している」と述べている。<sup>注56</sup>「人情家の日本人」と「不人情な西洋人」、「彼」にとつて西洋は思いやりがないと捉えているが、品種改良の歴史は古く、必ずしも悪であるとは言ひ切れない。それこそが、「人間の悲劇的な象徴」であるとしても、「彼」はその行いに価値を見出ししている。

彼の動物に対する行いには、西洋の「ニヒリズム」と東洋の「虚空」の違いを表したいという川端の意図があつたのではないか。『美しい日本の私』で川端は明恵上人と西行の物語を引用した後、次のように述べている。

日本、あるひは東洋の「虚空」、無はここにも言ひあてられます。私の作品を虚無と言ふ評家がありますが、西洋流のニヒリズムといふ言葉はあてはまりません。心の根本がちがふと思つてゐます。

「ニヒリズム」についてニーチェは「生の否認を制度化したキリスト教を告発するために用いた」とし、「従来<sup>注57</sup>の最高価値がその価値を喪失すること」と定義した。<sup>注58</sup>

「ニヒリズム」という概念の参考文献であるハイデガー『ニーチェ』では以下のように述べる。ニーチェが言う「神は死んだ」の神とは、「道徳的」神、「キリスト教的神」を指す。「神は死んだ」という言葉は「ただキリスト教徒の神の無力さだけでなく、人間が服従すべき、そして服従することを望んだ一切の超感性的なるものの無力さを宣告」する。<sup>注59</sup>「従来<sup>注60</sup>の諸最上価値崩壊」という事象は（中略）西洋

歴史全体の根本的生起である。」とする<sup>(注6)</sup>ことから、ニーチェにとってのニヒリズムとは「西洋」におけるニヒリズムを指すことがわかる。これは川端が「美しい日本の私」で述べた「西洋流のニヒリズム」と同義ではないだろうか。

中川洋一郎は、リン・ホワイトJr.の論文を引用し、キリスト教は「創世記に象徴される教義により、「神による物的創造のすべての項目が人間に奉仕するという以外の目的を持っていない」ことを人間に明示し、「自然の感情に関心を持たず人間が自然を搾取できるようにした」と述べている<sup>(注6)</sup>。

そのため「西洋では、産れた子供をまびく、出来の悪い子供は殺してしまふ。その方が、いい犬を作ることになる」という彼の動物に対する行いは、キリスト教の人間中心主義「人間は動物とは決定的に違っていて動物を自由に消尽できる」という「自然に対する「尊大な態度」を意味する。「彼」は助かるはずの動物たちを見殺しにしてきた。それは「彼」が「動物の生命や生態をおもちゃにして、一つの理想の鑄型を目標と定め、人工的に、畸形的に育てて」いたからである。また、「彼」は「なにも死なねばならぬわけはなかつた」にもかかわらず、千花子と心中しようとしたことがあった。「ほんやり人まかせで、まだこれでは生きてゐるとは言へない」「自分のしてゐることの意味を知らぬ」ような千花子は、「人間」からは最もかけ離れた「禽」性としての千花子であり、「彼」にとつて「死の相手」によいと感じた。「彼」にとつては「自由に消尽」する動物的存在でしかなかった。

「不空羅索観音」として「彼」を生きることに関して救つたものの、「彼」の動物に対する行いは留まることを知らなかった。

西洋の「ニヒリズム」が「従来の最高価値がその価値を喪失すること」であるならば、「従来の最高価値」とは「禽」性としての千花子と言えよう。しかし「彼」の側を離れてしまった千花子は「その価値を喪失」した。残された「彼」にとつての「最高価値」は「動物虐待的な愛護者達」ではないか。

「いかに大切に思うかが象徴されていた」菊戴さえも「全く彼の過失で二度の水浴で殺してしまふ。動物相手に暮らすのは、「もつと自由な傲慢を寂しみたため」であり、「自由な傲慢」が「母に似た女にあこがれる。初恋人に似た女と愛する。死んだ妻に似た女と結婚したくなる」ことであるならば、「もつと自由な傲慢」とは、以前と全く同じコピーである存在を求めることを指すのではないか。「彼」は「菊戴とはもう縁切りだよ。」と言つて「木菟」や「百舌」の世話をする場面に移行する。

『禽獣』の本文最後に登場する「木菟」や「百舌」の世話を「彼」は献身的に行つた。「空腹の百舌は激しく噛みつくけれども、それも愛情と受け取れる。「木菟」は「彼」に警戒心を持っているが「彼」はこの木菟を憎むどころか楽しい慰め」としていた。「百舌」に対しては鳴き声を真似てコミュニケーションを図っていた。そこには動物を単なるコピーとしてではなく、「個」として認め接する「彼」の姿が描かれており、「動物虐待的な愛護者」の姿は見取れない。「彼」にとつての「最高価値」であつた「動物虐待的な愛護者」たちは、その価値を失つたのである。「彼」は新たな救いを求めた。それこそが少女の遺稿集である。

一方、東洋の「虚空」とは、歌物語の引用から「およそあらゆる相これ虚妄なる」ということであり、「この虚空如くなる心の上にお

いて、種々の風情を色どるといへども更に蹤跡なし。すなわち、「すべての姿は真実でない」のであって、「自分もまた大空のような心の上にいる」と情趣を詠んでゆくものの少しも跡を残さない。

森三樹三郎は、「万物斉同の立場にたつことができれば貧富窮達、善悪美醜の対立はなくすべてはひとしく、すべてはあるがままにてよし、とする運命肯定の境地に達することができるはず」であり、「生と死の対立もまた同じである」としている。「死が恐ろしく、いとわしいのは、人間が生立場から死を見て」おり、「相対差別の立場にあるから」である。「万物斉同の境地に達することができれば、生も死もまた楽しくなるに相違ない」というのが、その死生観である。

竹盛天雄は、人間を嫌う「彼」には「よほど純粋な人間関係のイメージ」が存在し、「母や初恋の人や死んだ妻、なじみのある動物に対する恩愛の絆を断ち切ることによって、「自由な傲慢を寂しみた」という主人公の発想には、恩愛へのなみなみならぬ牽引が感じられる」として(注66)いる。最終的に動物の「個」を認め接するようになった「彼」の姿からも、「恩愛」を感じざるを得ない。すなわち、「純粋な人間関係」とは、「母性的なもの」である。「彼」は「男の鬱陶しさ」を嫌う故に「女性」が側に居ることを望んだ。また、少女の遺稿集において母親の後書きを引用するということも、「母性」に憧れを抱いていると言えよう。そして川端は、大正九年に「本郷元町のカフェ・パリや初代のあるカフェ・エランにしばしば出かけ、大正十年には「初代との戀愛、婚約といふ出来事が秋から冬にかけてあり、そのため九月から十月にかけて、岐阜や岩手縣岩谷堂へおもむいた。この婚約はすぐに破談となつた。」と(注67)されている。婚約破

談の理由については「西方寺にて、僧に犯されたり」と初代が襲われたことが原因であると(注68)されている。

川端と婚約をしていた初代には子供を産むことによって母親になるという可能性があったが、僧との事件をきっかけに婚約は破談となり、川端は手にするものが失われた。そのため、母性への救済を抱いたのではないだろうか。また、「純粋な人間関係」とは「人間の成熟した大人の性を感じさせない(幼い初恋人)」でもあり、それは川端が望んだものの、手にすることはできなかった初代との関係でもあると言えよう。それは『禽獣』において、「彼」に体を売る時の千花子である。千花子は結婚し、その肉体は出産を経て衰えてしまった。「結婚という結びつきが「人間」に近くなる」、「彼」が嫌悪する「我」を持つ存在になってしまった千花子は「彼」の救いになることができなくなった。しかし「十六歳で死んだ少女」は形の上では花嫁であり、その相手は不在である。それは「人間」に近くなる「結婚という結びつき」とは言えないであろう。武智は、「「彼」は「人間」に「我」があるゆえに嫌悪していた」「我」を無くすためにはどうすればよいだろうか。それは「死」しかない。生きながらにして「我」をなくすこと＝生きながらにして死ぬこと」であると述べた。(注69)

川端は一九七二年四月一六日夜、逗子マリーナ・マンションの仕事部屋でガス自殺を遂げたと(注70)されている。遺書は見当たらなかった。羽鳥徹哉は以下のように述べている。(注71)

奈良県桜井市にある、日本最古の古道といわれる山の辺の道。ここに晩年の川端が、揮毫したとされる歌碑が残されている。

昭和四十六年（一九七一）年、桜井市観光課より、記紀万葉から歌を揮毫しそれを「石碑に彫って山の辺の道に設置する」という依頼を受けた川端は、その趣旨に賛同、知人にも呼びかけた。川端が選んだ歌は倭健命の絶唱。東征の帰路、病に倒れ、故郷をしのんで歌った歌だ。

大和は国のまほろば たたなづく  
青かき山ごもれる 大和美し

（中略）しかし三月、川端はその約束を反故にする。自分のようなものは、古代の英雄である倭健命の格調ある歌を書くのに相応しくないと、暗く沈んだ声で言ったという。そして四月、川端は突然、自裁する。（中略）東山は推察する。相聞歌ではなく、倭健命の絶唱を選んだこと自体、すでに死を覚悟していたのではないかと。

川端は晩年健康が優れず、一九七一年三月八日、盲腸炎で入院手術することもあった。七二歳という年齢もあって、死を意識したに違いない。そのような状況下で病に臥してなお、故郷をしのび格調ある歌を歌いあげてみせた倭健命の歌を揮毫することは相応しくないと考えた。死を鮮明に意識するようになり、死への恐怖も少なからずあったに違いない。死への恐怖に打ち克つには、自ら死を選択し、受け入れることであると川端は考えたのではないだろうか。それは老荘思想における、万物斉同の境地に至り、生と死の対立が同じ状況になることと通ずる。「死が恐ろしく、いとわしいのは、人間が生

の立場から死を見て」いるからである。死の立場から生を見ようとすることで、川端は全てを肯定しようとしたのではないだろうか。『禽獸』における「彼」は「死にたい死にたいと口癖にして」おり、「なにも死なねばならぬわけはなかつた」にもかかわらず、千花子と心中しようとした。その結果「彼」は「自殺を夢にも思はず、また口にもしなくなつた」。「彼」は「不空羅索観音」としての千花子に救われたのである。「彼」は「母性的なもの」、「人間の成熟した大人の性を感じさせない（幼い初恋人）」という「恩愛へのなみなみならぬ牽引」を持っていた。それは川端にとつては手にすることの叶わなかつた、潰えた初代との未来である。千花子と心中未遂をした「彼」に対して、川端は一人で自殺を決意し、亡くなった。初代との未来があつたならば、果たして川端は自裁していただろうか。川端には初代への忘れ得ぬ思いがあつたのではないか。

そして川端は遺書を残すことなく自殺した。川端は、僧良寛の辞世の句「形見とて何か残さん春は花山はほととぎす秋はもみぢ葉」を引用して以下のように述べた。

その人の辞世が、自分は形見に残すものはなにも持たぬし、なにも残せるとは思はぬが、自分の死後も自然はなほ美しい、こ  
れがただ自分のこの世に残す形見になつてくれるだらう

自分の形見に残すものは何もないが、ただ美しい自然だけが形見となつてくれる。老荘思想の「すべてはあるがままにてよし」とする運命肯定の境地であると言えるのではないか。「すぐれたものを求める」「彼」は、ありのままの自然を受け入れない。「彼」があらゆ

る「人間」及び人工的に育てた動物にかかわらず全ての存在を受け入れた時、そこに残るのはただありのままの自然である。

「彼」は「人間」に対して勝手な考えを繰り返し、動物によって満たされない思いを発散させてきた。動物といつまでも暮らし続け、動物に残酷な仕打ちをするが、それは「彼」の救いである。「いつまでも彼の側を離れない、動作が活発な女性がいること」が叶わないためである。動物に対する様々な残虐な行いや、十年前の千花子に対する扱いは、「彼」を「人間性を喪失」した「恩義を知らず、道理をわきまえない」「禽獣」たらしめる要因である。「不空羅索観音」として千花子は「彼」を生きる事に関しては救った。やがて「彼」は、少女の遺稿集に救いを求めた。「一六歳で死んだ少女」は「彼」が嫌悪しない「我」を持たない存在であり、生きながらにして死んでいる存在である。生と死の対立のない状況は、老荘思想の万物斉同の境地に達していると言えるのではないか。すなわち遺稿集の少女は老荘思想の表象である。

### 結論

ときに動物に虐待を加えることもある動物愛護者に価値を見出す「彼」は動物に対して残虐な行いを繰り返してきた。「彼」は「我」がある故に人間を嫌っていたが、その裏側には、人間に殊に心を惹かれる「彼」の姿が浮き彫りとなるのである。『禽獣』における「不空羅索観音」とは、川端が千花子に課した役割である。千花子が眼を閉じ、首を伸ばし、合掌している様子は「不空羅索観音」像と一致している。千花子は「彼」を生きることに關して救ったため、十

年前の千花子は「彼」にとって「不空羅索観音」に重なる存在に見えていたと言えよう。しかし、やがて「彼」の側を離れ、結婚し子供を産み、肉体は衰え、「彼」にとつての「不空羅索観音」の役割を果たすことができなくなつた。再び救済が必要となつた「彼」は「一六歳で死んだ」少女の遺稿集にある文句に救いを求めた。予め持っていた遺稿集の母親の後書きを引用して、「彼」は「生れて初めて化粧したる顔、花嫁の如し」と発言した。形の上では花嫁である少女は、生と死を併せ持つ存在である。それは老荘思想における相対差別のない状況である。『禽獣』における華嚴宗の役割は、ただ全てを受け入れて共に心中を図ろうとする千花子の表象であり、それは老荘思想の運命肯定の境地に通ずる。全てを肯定した果てに残るものは、ただありのままの自然である。それこそが「東洋の虚空」である。

「不空羅索観音」としての千花子と、遺稿集の中でも母親の後書きを引用するということは、川端が手にすることのできなかつた初代との未来を表すのではないだろうか。ひいては、川端自裁の理由にも繋がってくると言えるのではないか。

『禽獣』は十年前に心中しようとした場面をはじめ、「彼」が如何なるものを救済の対象とし、またその変遷によつて如何に救われるかを描いた物語である。そこには「東洋の虚空」を重視する川端の宗教観が見られるとも言える。『禽獣』は、「彼」が「東洋の虚空」に至るまでの足跡（そくせき）を浮かびあがらせる物語である。

注

- (1) 初版は『水晶幻想』（改造社、一九三四年四月）。本文の引用は『川端康成全集 第五卷』（新潮社、一九八〇年五月）による。その後、『抒情歌』（創元社、一九四七年一月）に収められている。引用に付す（漢数字）は、章番号を表している。
- (2) 田中実「仮構の神」——『禽獸』試論——（田村充正・馬場重行・原善編『川端文学の世界—その生成』勉誠出版 一九九九年三月）。
- (3) 馬場重行「禽獸」試論——『夢』の破れ——（『文学』一九八九年一月）。
- (4) 岩田光子「川端文学の特相（四）——『禽獸』考——」（『学苑』昭和女子大学近代文学研究所 一九七八年一月）。
- (5) 太田鈴子「明恵上人から見る『美しい日本』（二）昭和における明恵上人——近松秋江の反戦（いくさ）小説」（『学苑』二〇〇八年三月）。
- (6) 川端康成『谷堂書簡 一』（『川端康成全集 補卷二』新潮社 一九八四年四月）。
- (7) 『沙石集』からの引用は無住『沙石集 日本古典文学全集85』（渡邊綱也校注 岩波書店 一九九六年五月）による。
- (8) 無住『沙石集 新編日本古典文学全集52』（小島孝之校注 小学館 二〇〇一年八月）一四五頁。
- (9) 川端康成『谷堂書簡 一』（『川端康成全集 補卷一』新潮社 一九八四年四月）。
- (10) 川端康成『獨影自命』（『川端康成全集 第三十三卷』新潮社 一九七〇年十月）二八頁。
- (11) 川端康成『掌の小説』（新潮社 一九七一年三月）。
- (12) 『沙石集』からの引用は無住『沙石集 日本古典文学全集85』（前掲）による。
- (13) 無住『沙石集 新編日本古典文学全集52』（前掲）四七三頁。
- (14) 伊藤博之・今成元昭・山田昭全『仏教文学講座 第一卷 仏教文学の原点』（勉誠社 一九九四年七月）。
- (15) 日本国語大辞典刊行会『日本国語大辞典 第十七卷』（小学館 一九七五年九月）。
- (16) 日本国語大辞典刊行会『日本国語大辞典 第六卷』（小学館 一九七三年十一月）。
- (17) 王陽明『伝習録』（山田準・鈴木直浩訳注 岩波書店 一九三六年九月）。
- (18) 吉田公平「王陽明『伝習録を読む』（講談社 二〇一三年五月）。
- (19) 小島憲之校注『懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹 日本古典文大系69』（岩波書店 一九六四年六月）。
- (20) 日本国語大辞典刊行会『日本国語大辞典 第十二卷』（小学館 一九七四年十一月）。
- (21) 日本国語大辞典刊行会『日本国語大辞典 第十二卷』（前掲）。
- (22) 真鍋俊照『日本仏像事典』（吉川弘文館 二〇〇四年二月）。
- (23) 源為憲『三宝絵 注好選（新日本古典文学体系31）』（馬淵和夫・小泉弘・今野達校注 岩波書店 一九九七年九月）。
- (24) 筒井英俊校訂『東大寺要録』（国書刊行会 一九七一年一月）。
- (25) 川端康成『文學的自叙傳』（前掲）八七頁—八八頁。
- (26) 速水侑『菩薩 由来と信仰の歴史』講談社 二〇一九年一〇月）。
- (27) 福田淳子「川端康成『禽獸』論——舞踊による解釈の試み——」（『学

- 苑」昭和女子大学近代文化研究所 一九九三年五月二日。
- (28) 馬場重行「禽獸」試論——〈夢〉の破れ——〔前掲〕。
- (29) 馬場重行「禽獸」試論——〈夢〉の破れ——〔前掲〕。
- (30) 馬場重行「禽獸」試論——〈夢〉の破れ——〔前掲〕。
- (31) 山川彌千枝「薔薇は生きている」(沙羅書店 一九三五年八月)。
- (32) 武智政幸「禽獸」論 千花子のなかの「禽獸」〔昭和文学研究〕28 一九九四年二月。
- (33) 武智政幸「禽獸」論 千花子のなかの「禽獸」〔前掲〕。
- (34) 武智政幸「禽獸」論 千花子のなかの「禽獸」〔前掲〕。
- (35) 田中実「仮構の神」——「禽獸」試論——〔前掲〕。
- (36) 『日本国語大辞典 第二版 第十卷』(小学館 二〇〇一年十月)。
- (37) 『日本国語大辞典刊行会』『日本国語大辞典 第九卷』(小学館 一九七四年五月)。
- (38) 康僧鎧訳『無量寿経』(阿満利磨注解 筑摩書房 二〇一六年二月)。
- (39) 山川彌千枝「薔薇は生きている」〔前掲〕。
- (40) 川端康成『美しい日本の私』(『川端康成全集 第二十八卷』新潮社 一九八二年二月)。
- (41) 平泉洸『明恵上人伝記』(国宝社 一九八〇年一月) 一六七頁。
- (42) 平泉洸『明恵上人伝記』(前掲) 一七二頁—一七三頁。
- (43) 『日本国語大辞典刊行会』『日本国語大辞典 第二十卷』(小学館 一九七六年三月)。
- (44) 藤原道綱母『蜻蛉日記』(今西祐一郎校注 岩波書店 一九九六年九月)。
- (45) 室生犀星『現代語訳 蜻蛉日記』(岩波書店 二〇一三年八月)。
- (46) 高橋英夫『西行』(岩波新書 一九九三年四月) 一七二頁。
- (47) 康林『川端康成と東洋思想』(新典社 二〇〇五年四月) 五七頁。
- (48) 芭蕉『古典俳文学大系5 芭蕉集』(集英社 一九七〇年一月) 四五六頁。
- (49) 廣松渉・子安宣邦・三島憲一・宮本久雄・佐々木力・野家啓一・末木文美彦編『岩波哲学・思想事典』(岩波書店 一九九八年三月) 一五六一頁。
- (50) 川端康成『美しい日本の私』(前掲)。
- (51) 平泉洸『明恵上人伝記』(前掲)。
- (52) 高橋英夫『西行』(前掲) 一七二頁。
- (53) 上野洋三『現代語訳付 笈の小文・更科紀行・嵯峨日記』(和泉書院 二〇〇八年三月) 四頁—五頁。
- (54) 川端康成『自著序跋』(『川端康成全集 第三十三卷』新潮社 一九八二年五月) 五九一頁。
- (55) たつみ都志「川端康成「禽獸」の構造——畸形的〈純潔〉をめくつて——」〔昭和文学研究〕23 一九九一年七月)。
- (56) 三浦慎吾『動物と人間——関係史の生物学』(東京大学出版会 二〇一八年二月) 四六頁。
- (57) 川端康成『美しい日本の私』(前掲)。
- (58) 廣松渉・子安宣邦・三島憲一・宮本久雄・佐々木力・野家啓一・末木文美彦編『岩波哲学・思想事典』(岩波書店 一九九八年三月) 一二七頁。
- (59) ハイデガー『ニーチェI』(新装版)〔菌田宗人訳 白水社 一九八六年五月 三三四頁。ただし、ハイデガー『ニーチェ』は〔新装版〕に依拠して論じている)。
- (60) ハイデガー『ニーチェII』(新装版)〔菌田宗人訳 白水社 一九八

- 六年六月) 二三八頁。
- (61) ハイデガー『ニーチェⅢ(新装版)』(蘭田宗人訳 白水社 一九八六年七月) 二八頁。
- (62) ホワイト『機械と神——生態学的危機の歴史的根源』(青木康三訳 みすず書房 一九七二年二月) 一八六頁。
- (63) 中川洋一郎『地球環境の悪化とユダヤ・キリスト教の人間中心主義——文明の(だが、同時に環境破壊の)起源としての遊牧——』(経済学論纂(中央大学) 57・3・4合併号 二〇一七年三月)。
- (64) 中川洋一郎『地球環境の悪化とユダヤ・キリスト教の人間中心主義——文明の(だが、同時に環境破壊の)起源としての遊牧——』(前掲)。
- (65) 森三樹三郎『老荘と仏教』(講談社 二〇〇三年九月) 三三三頁―三四頁。
- (66) 竹盛天雄『禽獣』(国文学 解釈と教材の研究) 14―8 一九六九年六月)。
- (67) 川端香男里編『年譜』(川端康成全集 第三五卷) 新潮社 一九八三年二月)。
- (68) 川端康成『大正十二年・大正十三年 日記』(川端康成全集 補巻 一) 新潮社 一九八四年四月)。
- (69) 武智政幸『『禽獣』論 千花子のなかの「禽獣」』(前掲)。
- (70) 川端香男里編『年譜』(前掲)。
- (71) 羽鳥徹哉『川端康成——蒐められた日本の美(別冊太陽 日本のごころ 157)』(湯原公浩編平凡社 二〇〇九年二月) 五一頁―五三頁。
- (72) 川端香男里編『年譜』(前掲)。
- (73) 川端康成『美しい日本の私』(前掲)。

# 太宰治「葉桜と魔笛」とモーツァルト「魔笛」をめぐつて

畑 中 佳 恵

## 一 「葉桜と魔笛」研究と本稿の狙い

「葉桜と魔笛」<sup>(注1)</sup>は、太宰治が三〇歳になる一九三九(昭和一四)年六月に発表した短編小説である。《桜が散つて、このやうに葉桜のころになれば、私は、きつと思ひ出します。——と、その老夫人は物語る。》(二一四頁)という冒頭で、メインとなる一人称の語りがある老いた既婚女性のものであることが示される。そのあらすじは次の通りである。

三五年前、二〇歳の姉《私》と一八歳の妹は、厳格な中学校長の父とともに鳥根県の城下町で暮らしていた。腎臓結核に冒された妹は余命僅かであり、日本海大海戦の大砲が轟くなか、姉は妹のことはかり考えていた。そんな一九〇五(明治三八)年五月のある日、姉は妹から枕元にあった手紙について問われる。それは、姉がM・Tになりかわって書いたものだった。姉は妹が隠していた三〇通ほどの手紙を読み、妹がM・Tという貧しい男性歌人と恋愛をしていたこと、二人は肉体関係を結んだこと、そして妹が病気のために捨てられたことを知り、まるで我が事のような感覚を味わった。そして、M・Tの名で改めて愛を告白する妹宛の手紙を書き、庭の外か

ら軍艦マーチの口笛を吹いて聞かせる約束をしたのだった。

その手紙を姉に音読させた妹は、M・Tは虚構の人物であると明かし、姉が手紙を書いてくれたことに感謝する。妹は異性と恋愛しないまま病に倒れたことを淋しく思い、二年前の秋から自分宛の手紙を書いて投函していたのだという。よその男性と話したことさえない青春は自分も姉も同じだと告げ、《あたしたち間違つてゐた。お俐巧すぎた。》(二二一頁)と嘆き、死ぬのはいやだと吐露する妹。姉が泣きながら抱き合つたとき、庭の葉桜の奥から軍艦マーチの口笛が聞こえる。二人は恐怖し、姉は神様の存在を信じた。妹はその三日後に亡くなつたという。回想を終えた老夫人は、口笛の主は父だったのでないかという疑念に触れ、そんな自分の考えに物欲を感じて恥じるのだった。

本作品は、高校用教材として活用されていることもあり、授業実践記録<sup>(注2)</sup>や作品評釈<sup>(注3)</sup>、典拠紹介<sup>(注4)</sup>も含め、多くの関連研究が蓄積されてきた。研究論文の観点は多岐にわたり整理しにくい<sup>(注5)</sup>が、作者の心理状態や信仰に注目する論<sup>(注6)</sup>、後景としての戦争に焦点をあわせ、作者の戦時体制への違和感と制度への心情的共感という両面性をとらえる論<sup>(注7)</sup>、虚構の手紙を書いた妹に、父や国家への反発を読み取る論<sup>(注8)</sup>、妹の

言動に近代のロマンティックな結核文学への反措定をみる<sup>(注8)</sup>論、回想という形式に着目することで姉の成長を指摘する論<sup>(注9)</sup>、同じく回想形式に注目し、姉が自己のロマンを再構成しているとする論<sup>(注10)</sup>、もう存在しない家族に抱く姉の郷愁を見出す論<sup>(注11)</sup>、記憶を意味づけ直し、家族の死を受け入れようとする姉の姿を読み取る論<sup>(注12)</sup>、M・Tが実在する可能性を指摘する論<sup>(注13)</sup>、老夫人が語ることで時局に抗う側面をみる論<sup>(注14)</sup>、発表当時の『若草』に寄せられた感想や貞操観念の言説を調査し、規範から逸脱する欲望とその再生産を見出す論<sup>(注15)</sup>などが提出されている。

そのうち、目立たないながら、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトによる歌劇「魔笛」との関わりに着目するものもある。小説タイトルに配された「葉桜」は、出来事が起きた季節と場所を表すものとして、また青春という人生の季節を表すものとしても、物語内容と直結する意味や役割を読み取ることができる。一方、「魔笛」という語は作中に登場せず、軍艦マーチの口笛を言い換えたものと理解されてきた。

この「魔笛」という語句について、三谷憲正は一九九三年刊行の『短編の愉楽4 近代小説のなかの恋愛』（有精堂出版、一九九三年八月）で歌劇の名であることに触れ、《愛》というのが、この世に存在する証明として登場している》（一七二頁）とコメントした。また、『太宰治全作品研究事典』（勉誠社、一九九五年一月）の「葉桜と魔笛」の項目を記した神谷忠孝も、両者の関係を考察することの重要性に言及している。研究論文においては廣瀬晋也<sup>(注16)</sup>が、戦争という時代背景を中心に論じるなかでこの問題に触れている。廣瀬は、歌劇「魔笛」の多義的な世界をどの程度意識した作品であるか早速

には判断できなかつつ、「《恩寵をまねく楽音という素材の近似》（七七頁）もあることから、作者・太宰はこの歌劇に暗示を受けたと推測した。両者の関係性をめぐる研究は、廣瀬論文が発表された一九九七年から進展をみていないといっている。

本稿では、モーツァルトの歌劇「魔笛」の歌曲や物語が日本に紹介され、関連情報が流通した様子を調査する。小説のタイトルに組み込まれた「魔笛」という言葉に反応し、両作品を重ねてイメージすることができる読者の存在を可視化することが主な目的となる。加えて、歌劇「魔笛」をめぐる情報に照らすことで小説「葉桜と魔笛」のイメージ形成が活性化されるポイントを幾つか指摘し、若干の考察を加えたい。

## 二 「魔笛」の梗概と日本への移入

「魔笛」は、作曲担当のヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトと台本担当のエマヌエル・シカネーダーが共同で制作した全二幕の歌劇である。完成はモーツァルトが亡くなる二ヶ月ほど前の一九九一年九月。ドイツ歌劇界はもちろん世界的にも知名度の高い作品であることは、現在、周知の通りである。まずは簡単にストーリーを紹介しよう。

異国の王子タミーノは、大蛇に襲われたところを、その地を治める夜の女王の侍女に救われる。女王は一人娘を悪魔のようなザラストロに攫われ嘆いていた。その歌に心動かされ、また娘パミーナの肖像を見て恋に落ちたタミーノは、救出を約束する。彼は女王から魔法の黄金の笛を与えられ、同じく銀の鐘を与えられたお喋りな鳥

狩人・パバゲーノとともに、ザラストロの城に向かう。ザラストロはその地で、イジス、オジリス神に仕える偉大な聖者として崇められていた。

パミーナはタミーノが助けに来ることを知り、パバゲーノとともに逃げ出そうとするが失敗に終わる。彼女は母を恋いつつもザラストロに従っており、後に忍んでやってきた母から、ザラストロを殺して日輪の聖章を奪い返すよう言われた際も、それはできないと思いついた。他方、ザラストロは捕らえたタミーノとパバゲーノを神に仕える仲間とするため、厳しい試練を与える。タミーノは全てに耐えてパミーナと結ばれることを誓う。無言の行の最中にタミーノから無視されたパミーナは自死を考えるほど落ち込むが、残りの試練は二人で臨むことになる。二人は魔法の笛の力を借りて炎と水の試練をくぐり抜け、聖殿で祝福を受けた。パバゲーノは聖者になれなかったものの、お似合いの相手であるパバゲーノと結ばれた。

最後に夜の女王が現れザラストロの命を狙うが、一瞬のうちに返り討ちにあう。ザラストロはタミーノとパミーナを従えて神殿の高座に上り、イジス、オジリスの神を讃える僧侶たちの大合唱で幕が下りる。

本作が日本に移入された場面は、記録上、一八六五（慶応元）年九月三日の英国軍楽隊による演奏（場所は横浜の海岸通り）まで遡ることができる。一八九一（明治二四）年四月二五日には、東京音楽学校奏楽堂で開催された日本音楽会で宮内省式部職が「魔笛」から数曲を演奏、一九〇〇（明治三三）年一月一〇日に、本郷中央会堂で開催された明治音楽会で「魔笛」の演奏があるなど、まずは歌曲として移入された様子が伺える。なお、「葉桜と魔笛」で回想さ

れる時代はバルチック艦隊との海戦があった一九〇五（明治三八）年であり、その時代の日本と「魔笛」は全く無縁だったわけではないといえる。

またこの頃から、歌劇としての梗概が紹介される場面も目につくようになる。一九〇六（明治三九）年一月には「音楽新報」誌上で安藤弘が「マヂック、フリユート」のあらすじを紹介した。また、一九一二（明治四五）年に刊行された柴田環『世界のオペラ』（共益商社書店、一九二二年五月）にも、一二頁にわたる「魔法の笛」のあらすじ紹介がみられる。ただし、魔笛の来歴やそれを使用する具体的場面は書かれておらず、そのイメージは掴みづらい。《タミノ及びパミナ姫はよく神の禁戒を守りたる功により、聖堂にて多くの聖人より賞賛せられ結婚式は目出度く挙げられる。》（『世界のオペラ』六二頁）というように、恋愛成就の物語という側面が重視された。

大正期に入って一九一三年六月一日、帝国劇場で歌劇「魔笛」が小林愛雄訳で上演されたことは、よく知られる事実である。プログラムに記載された「繪本筋書 大正二年六月女優劇」（帝国劇場、一九一三年六月）によると、一幕三場で構成され、『全能の力ある黄金の魔笛』（三丁表）を夜の女王がタミーノに与える第一場から、ザラストロがタミーノとパミーナの《熱き恋に絆されて、其想を遂げしむ》と、『事皆収まり、光明の前に悪事皆消え失す』（三丁表）という第三場までのストーリー全体が上演された。小林の劇評によると、時間上の都合で省略箇所があり、視覚面の工夫不足も惜しまれる一方、侍女役の音羽かね子やパバゲーノ役の清水金太郎の歌唱など見所が少なくなかったようである。その後、浅草オペラの根岸歌劇団も一九二二年九月と翌年二月に金竜館で「魔笛」を上演した。

一九二四（大正一三）年に「魔笛」という言葉を最も流通させたのは吉井勇だろう。吉井はその年の元旦から七月一九日にかけて、『東京朝日新聞』紙上で長編通俗小説「魔笛」を連載した。《「魔笛」！その題名の奇まづ読者の眼を聳たしめずにはおきませまい。》（連載小説豫告）一九二三年一月二五日・二九日、五面）と銘打たれた広告が、タイトルの奇抜さと読者への訴求力を表している。《英雄的叛逆児》である東條五郎をつうじて《貴族階級の現実相》を活写することが作者によって予告され、伯爵家の政略結婚に巻き込まれる乃武子、彌撒子を中心に、それぞれ別に愛する人をもつ彼女らを救わんとする東條の奔走と死が描かれた。「魔笛」は、東條と彌撒子が観に行つた帝劇オペラとして登場する。二人はそのときの印象を折に触れて回想し、身近な人間をタミーノ、パミーナ、ザラストロと重ねてイメージしていた。最終回では、今際の際の東條が自身の慕う彌撒子をパミーナに重ねて「魔笛……魔笛……」と呟く。彼の思いに彌撒子が気づいたところで終わるこの物語は、男女の真実の愛という通俗的なテーマを、歌劇のイメージを借りつつ展開するものだった。

吉井勇「魔笛」は、同年六月に伊井蓉峰・喜多村緑郎の新派劇がさっそく上演し（浅草公園松竹座）、一九三二（昭和七）年一〇月には白黒無声映画「魔笛」（新興キネマ、渡辺新太郎監督）が封切られるなど、メディアミックスをつうじて人々に受容されていく。吉井の「魔笛」は太宰の「葉桜と魔笛」に先行する作品として、歌劇「魔笛」の存在を広く知らしめるものであったといえる。

さて、歌劇「魔笛」の紹介文をみると、これが歌劇作品として難解な部類に入ることには間違いない。とくにメインストーリーにおい

て、前半と後半で人物のイメージが真逆になるなど不合理ともいえるような聖邪の反転が生じることは、《随分奇妙な感じを起こさせ》と指摘された。そのうえで、最終的な勝者かつ聖者としてのザラストロが一切の怨恨を鎮め、彼の元でタミーノとパミーナが神々の祝福を受けるフィナーレは、神威を感じさせる音楽の力もあり、観客に理屈を超えるような感動を与えるものであることが紹介されている。また、脇役ではあるが、魅力的な道化役として最後まで残るパバゲーノの存在も、この歌劇を豊かに生かす要素として注目された。

歌劇「魔笛」の成立をめぐることは、制作中に同業者によって似た趣向の作品が上演されたため内容変更を余儀なくされたことや、一八世紀の啓蒙主義的な自由結社・フリーメーソンの思想との関わりが指摘されており、一筋縄ではとらえられない作品といえる。「魔笛」の黄金の笛は、ストーリー上、「葉桜と魔笛」の口笛のような決定的な働きをしていないという指摘もある。それでも、「魔笛」という邦訳タイトル、若い男女の恋と不思議な力を持つ笛、そして神が重要な物語要素として登場するという表層のレベルで「葉桜と魔笛」との共通点を見つけることは、ひとまず難しくないだろう。

加えて、「魔笛の不思議な力は誰を源とするものか」という疑問点も、両作品にとつて不可欠な要素となっている。「魔笛」のタミーノが夜の女王の願いをかなえるために授かったアイテムが、彼女と敵対するザラストロの指示に従うためのアイテムに変じることが、当時の梗概等でも容易に知ることができた。このメインアイテムである魔笛の位置づけの揺らぎと、「葉桜と魔笛」の魔笛にあたる口笛は誰によるものなのかという語り手の煩悶も、類似点として比較的容

易に感知できると思われる。

もちろん、紹介文の類いに接するだけで、歌劇としての詳細を把握することはできない。さらには、帝劇で上演された作品を実際にみた観客であっても、そのストーリーをどれだけ理解していたかは不明である。本稿の調査において、歌劇「魔笛」全体を翻訳した戦前の資料は見当たらず、物語内容の流通状況について詳細を把握することはできなかった。

とはいえ、モーツァルトの名作として海外で上演されているその内容を知る人は、当ても当然存在してははずである。また、興味を抱き関連情報に触れる読者層が将来的に増えることを前提に、「魔笛」という言葉が小説タイトルに組み込まれたと考えることもできる。作中で語られる出来事は一九〇五年のことだが、現実世界では翌年がモーツァルト生誕一五〇年記念にあたる。その年に国内でもモーツァルトとその作品への関心が強まったことは、雑誌『音楽新報』で特集が組まれたり、東京音楽学校で記念音楽会が開催されたりしたことからも伺い知れる。その後のモーツァルト受容の一端はすでに述べたとおりだが、とくに歌曲はラジオ放送やレコードをつうじて人々の身近に聴かれるようになっていく。

姉妹の人生にとって重要な出来事と「魔笛」というキーワードを結びつけるまなざしは、出来事から三五年を隔てた語りの現在に属するものであり、その時点で歌劇「魔笛」について知識を持つ（あるいはいざれ持つだろう）読者の存在は十分想定されていたとみるべきだろう。「葉桜と魔笛」と「魔笛」をどのように関連付けることができるかについては、小説発表当時には大方の読者にとって馴染みがなかったと思われる歌劇の詳細にも目配りしつつ、第四章で改

めて述べることにしたい。

### 三 唱歌としての「魔笛」

「魔笛」が日本に移入された経緯をたどるとき、もう一つ欠かせないルーツがある。本章では、「魔笛」のいくつかの曲が唱歌として国民教育に取り入れられた様子をとらえたい。先行研究として、明治から昭和の音楽教科書約七〇〇点を調査し、一七曲のモーツァルト作品を確認した高松晃子「日本語唱歌になったモーツァルト」（『音楽文化研究』第七号、二〇〇八年三月）がある。そのうち五曲が「魔笛」の曲を元に作詞されていること、とくに初期のものに「魔笛」の唱歌版が多いことが高松論で明らかにされた。

本稿において現物を確認できたもののうち、大正三（一九一四）年九月文部省検定済みの『中等音楽教科書 乙種巻四』（北村季晴編、弘楽社出版部）は、収録曲「正義」について、原曲がモーツァルトの「魔笛」であることを明記している。「正義」は、第一幕第八番フィナーレの合唱「この道はあなたを目的へと導いていく」の一部を元にして作られた。また、昭和八（一九三三）年三月検定済みの『中学校唱歌教科書 壹』（橋本茂編、高井楽器店出版部）は、収録曲「愛国」に関して、作曲者モーツァルトを肖像付きで紹介している。「愛国」は、第二幕第一番僧侶たちによる二重唱「女の奸計から身を守れ」を元にした楽曲である。このようなかたちで、唱歌教育がモーツァルトや「魔笛」という作品の存在を知らしめる場の一つとなったことは疑いえない。

なかでも、最初期の音楽教科書である文部省編纂『小学唱歌集 第

3編」は、明治期中等教育の場も含め広く活用されたものとして、また大宰治の最終的な蔵書のリスト(注26)に含まれている点でも注目に値する。一八八四(明治一七)年三月に出版されたこの教科書には、モーツァルトとの関連は明記されていないものの、「魔笛」第二幕第二〇番パペーノのアリアを元にした唱歌「誠は人の道」が収録されている。前の「正義」「愛国」も、日本国民の心得を示すものとして元来の意味内容から大きく外れた作詞がなされたが、「誠は人の道」はとくに、本来のアリアの歌詞を真つ向から否定するような、規範意識を求める内容に変換された。主人公であるタミーノとともに神聖な試練を受けることにしたものの、ひたすら己の欲望のままにふるまい、《美しい素晴らしい女子が、このパペーノさまの御所望。／やさしい小鳩のやうな子が手に入れば、／どんなに素敵なことだろう。／飲むもの食うものみんな美味いし、／王侯にもこの身を比べる心地。／賢者の境遇を楽しみ、／極楽の悦びにもあやからう。》と性愛至上主義を宣言するパペーノの歌が、《まことは人の道ぞかし つゆなそむきそそのみちに》、《こころは神のたまものぞ露なげがしそそのたまを》(注28)という、人の道や神との関係を説く歌詞に作り替えられたのである。

「葉桜と魔笛」の家を切り回し妹を看病する姉は、花崎論(注29)で指摘されたように、制度や規範に忠実に生きてきた人物としてイメージできる。唱歌に示された《まことは人の道ぞかし》という価値観は、若い女性を導こうとする明治三〇年代の良妻賢母主義の言説にも刻まれていた。(注30)一九〇二(明治三五)年の菊池大麓文部大臣による女子教育をテーマにした演説は、その典型といえよう。菊池大臣によると、善良なる国民をつくるためには善良なる家庭が必要であり、そ

のためには《誠実と云ふ事、即ち一家の内に秘密のない事が必要である》(注31)。良妻賢母が当然のように唱導されるなか、誠実であること、嘘がないことの重要性が強調されていたことがわかる。良妻賢母は女子の「天職」である一方、女子は教育による「矯正」を経なければならぬという点も看過できない。《女子と云ふ者は兎角感情に走せ易いものであります》。《女子に對しては殊に感情を抑へ得らるゝ様に常識と云ふ者を與へ、理解心を與へ、理學などを以て是れ等のことを矯正すると云ふことの考を取つて行かなければならぬことである」と考へるのです。(注32)「葉桜と魔笛」においては、このような同時代の、とくに女子を対象とする規範のなかで生きてきた姉が、規範をはみ出さかたちで妹に嘘の手紙を書き、妹の真情を知つて感情を溢れさせることになるのである。

以上、唱歌教育と「魔笛」の歌曲の関わりについて、先行研究に学びつつ改めて整理した。「魔笛」の歌曲は初等教育・中等教育の場において、その意味内容を大胆にずらして利用されていた。唱歌に関心を寄せていた太宰は、この状況を視野に入れつつ「魔笛」をタイトルに配し、中学校長に重要な役割を担わせる作品を書いたのではないかと推測できる。唱歌教育と軌を一にする明治の女子教育が、「葉桜と魔笛」の姉妹に生じるドラマのベースとなっていることは、改めて確認されてよいだろう。

#### 四 「魔笛」と「葉桜と魔笛」

ここまで述べてきたように、小説「葉桜と魔笛」が発表された当時、そしてその後の読者はとくに、歌劇「魔笛」とその関連情報を

得て作品の読みにかすことが可能であった。本章では、両作品がどのように重なるかを確認し、具体的な考察へと進みたい。若い男女の恋愛が描かれており、不思議な力を持つ笛（横笛・口笛）が登場し、神が重要な物語要素であるという、分かりやすい共通点が存在することは既に述べたが、そのほかにも、歌劇の詳細が小説の解釈に影響を与えるポイントがある。

まず注目したいのが、笛がもつ（とされる）能力である。歌劇「魔笛」の冒頭で、タミーノの魔笛は《いついかなる時も護ってくれる黄金の横笛》と紹介されるが、夜の女王の次女たちの説明から興味深い性質を備えていることがわかる。それは、野獣を操り火や水を防ぐという物理的な力をもつだけでなく、《人の心さえ変えることが出来る》という性質である。歌劇の作中で魔笛が誰の心を変えたか実は定かでないが、「葉桜と魔笛」の口笛は、それを耳にした姉妹の心的状況を一変させる。それまで《かなしいやら、こはいやら、うれしいやら、はづかしいやら、胸がーばい》だった姉の激しく複雑な心情を、《言ひ知れぬ恐怖》一色に染め、《何もかも神さまの、おぼしめし》という静かな達観をもたらすのである（二二二頁）。

加えて、「魔笛」の侍女たちの《悲しむ者は心楽しく独身の老人にも夢が訪れるだろう》という説明は、「葉桜と魔笛」の老いた姉の現在を思わせるだろう。語りの現在において新たな戦争が進行中であることは、廣瀬論文をはじめ多くの先行研究が指摘してきた。《日中戦争のさなか、昭和十三年には国家総動員法が公布され、勤労動員がはじまり、十四年にはノモンハン事件が起き、まもなく第二次世界大戦が勃発する》という暗い時代にあつて、父は自分たちを不憫に思ってくれていたという個人的かつ甘美な想像に彼女を浸らせ

るのが、かつて一度だけ鳴り響いた口笛である。このように、人の心に働きかける力を持ち、「夢」を見せるという点で、「葉桜と魔笛」の口笛はタミーノの横笛を思わせる。

この不思議な横笛の力が誰に由来するものであるかという問題は、口笛の主は誰かという「葉桜と魔笛」の語り手の疑問とオーバーラップする。タミーノは冒頭で夜の女王の次女たちに命を救われ、娘・パミーナをさらったザラストロから彼女を助け出してほしいという女王の詠唱に感動する。美しいパミーナの肖像画に心ひかれたタミーノは、彼女を救出して永遠に結ばれることを決意した。黄金の横笛＝魔笛は、その際に女王から授けられたアイテムである。その後、タミーノから魔笛を取り上げたザラストロが、タミーノに改めて授け直すという展開は本稿第一章でも触れたとおりだが、さらに歌劇の詳細に踏み込むと、タミーノとパミーナが手を合せて試練に臨む場面で、魔笛はそもそもパミーナの父が生前に作ったものだったと判明する。ここに至って観客は「魔笛とは何か、その力は誰が起源とするか」という歌劇のタイトルとも関わる解釈をめぐり、亡くなった「父」という要素も含め、更なる吟味を促されるのである。あることは、改めて言うまでもないだろう。

歌劇「魔笛」に欠かせない脇役であるパパゲーノについても、小説と相通じる要素を取り上げたい。彼は、ザラストロの試練を乗り越えれば若くて美しい女が得られると聞き、乗り気になったものの、沈黙の行を守らず飲み食いを楽しんでいた。第二幕第二三場でアリア「娘っ子が可愛い女房がひとり」を、《誰ひとり恋を囁いてくれなければ、／炎に焼かれて死んでしまう。でも婦人の口づけを頂ける

なら、／それだけで元氣を取戻すだろう。』と歌い終わると、それに  
応じるように現れた老婆が若い娘・パパゲーナに変身し、パパゲー  
ノは彼女に夢中になる。しかし、二人は釣り合わないという理由で  
引き離され、パパゲーノは死を決意するほど落ち込む。そのとき、  
夜の女王から授かった魔法の鈴を鳴らすことで、パパゲーノはパ  
パゲーナと再会し、結ばれた。

このように、自然人を自称するパパゲーノの生き方は、魔法の鈴  
に助けられつつ完遂されている。彼はタミーノのように最終的に神  
の祝福を受ける者ではないが、その場その場の欲と感情に忠実な者、  
愚かで純粹な存在として、ストーリー上、肯定されているのである。  
『葉桜と魔笛』の父が口笛を吹くことで、娘たちの人間としての生理  
的な欲求やそれと関わる欲望、情動を是とする合図を送ろうとして  
いたとイメージするとき、その口笛には恋の力を歌うパパゲーノの  
アリアを重ねることができらるだろう。

そして、中学校長である父が、唱歌「誠は人の道」として国民に  
親しまれているこの曲を、本来の異性愛を渴望する歌として奏でる  
姿に着目するとき、イメージ形成はより複雑化することになる。

父を考察するにあたり、彼が家父長制度下の厳格な家長であるだ  
けでなく、作品の背景に見え隠れする「戦争する国家」の主体であ  
り、しかも国民育成を通じて国家を支える教育者であることは、決  
して看過できない。この点について神田論（前掲、五二頁）が、『戦  
争に生徒たちを向かわせなければならぬ中学校長としての立場』  
に言及し、その口笛に『表だつては時局と闘えない父が、裏で時局  
と闘っている姿』（五二頁）を指摘している。本稿第三章で確認した  
ように、当時の中学は愛国者を育成するなかで、モーツァルト「魔

笛』を日本国民の唱歌に変容させて利用してきた。中学校長の職務  
は、この唱歌という科目の教育とも決して無関係でない。

一八九八（明治三一）年、唱歌教育を導入するという文部省の諮  
問案を受け、全国の官公私立中学校長一一〇余名による会議が行わ  
れた。唱歌を必須科目とすべきか否かをめぐり、時間切れになるま  
で議論が交わされたという。その後も音楽学校への視察を経て会議  
を重ね、問題点を話し合い、賛成意見をまとめた主体は、全国の中  
学校長たちであった。

そんな経緯も記憶に新しい一九〇五（明治三八）年、「葉桜と魔  
笛」の作中では、一人の中学校長が自分の娘たちのため、唱歌にア  
レンジされて国家の論理と化した歌曲を、性愛をめぐる個の欲望を  
肯定する本来の「魔笛」の歌へと差し戻した。このように想像を繋  
いでゆくと、父は家庭内の『頑固一徹』（二一四頁）という印象のみ  
ならず、当時の中学校長としての役割からも大きく逸脱したと読む  
ことができる。

歌劇「魔笛」においては、ザラストロと彼の信奉する  
神の勝利が理屈を超えたかたちで祝福されることについても、一考  
の余地があるだろう。歌劇では、一連の事態の收拾が荘嚴な音楽と  
ともに宣言され、観客に感動をもつて受け入れられる。復讐のため  
に乗り込んできた夜の女王をザラストロが倒すという結末は、沈黙  
の試練に際し『女王も女。浅はかな女心にすぎぬ』と断言するよう  
になったタミーノ、そして彼を導くザラストロの『総じて女には／  
道を踏み外さぬために／その心を導く男がなくてはならぬ』という  
女性蔑視の思想と、その勝利を意味する<sup>註38</sup>。それが、良妻賢母思想のも  
と、女子に常識や理解心を与えて矯正しようとする明治期女子教育

のあり方と響き合うものであることは言を俟たない。

「葉桜と魔笛」の妹は、当時の社会から求められる女子像に順応してやってきた自分たち姉妹をかえりみて、『お精巧すぎた』（二二二頁）と嘆いた。姉妹は自分の欲望に忠実になって青春を追い求めることの重要さに気づき、抱き合つて感情を横溢させたが、神秘的な口笛の音を聞くことで、そちらに全神経を集中させることになる。虚構のなかで形作られ共有された欲望は、口笛によつて鎮められ、姉が残りの人生を規範から逸脱して生きることはなかつた。

さきほど、口笛は父が家長・校長という役割から逸脱し、性愛礼賛の合図を送つたものであるという解釈を示したが、もう一段階、イメージは転換することになるだろう。架空の若者が吹くはずだった口笛を代わりに吹くことは、父も自身の日常から一歩踏み出し家族に心を寄せる『一世一代の狂言』（二二二頁）であつたかもしれない。しかし、その振る舞いそのものはパパゲーノでなく、神の名の下に女を支配するザラストロとオーバーラップする。父は娘たちが必要としたフィクションな恋物語を俯瞰する場所から姿を見せずに物語の行く末に介入し、嘘を真にするという大きな力を行使した。ゆえに、娘たちは神を感じし畏怖したのである。

ここからたどり着く結末の光景は、若い女がお利口さんであることをやめようとしても現実世界を『広い大きな世界』（二一八頁）に変える力は持てず、他方、父は厳格な教育者としての規範意識のみならず、隠れた愛情においてさえ娘たちを支配下に置くという悲劇である。その意味で、正／邪の二項対立を攪乱しながら男・父・神による支配の図式を堅持する歌劇「魔笛」の世界観と、小説「葉桜と魔笛」の世界観は通底しているといえよう。

## 五 まとめにかえて

歌劇「魔笛」を参照することは、小説「葉桜と魔笛」に語られた出来事の見え方に大きな変更をもたらすものではない。しかし、本稿第四章で示した両者の類似性のみならず、相違点によつて改めて気づかされることもある。例えば、パパゲーノのように欲するまま生きるための余地を残さない「葉桜と魔笛」は、「魔笛」よりもいっそう抑圧的な世界を描いているといえるのである。

個の逸脱が常にも増して許容されない戦時下、女は男のコントロール下で欲望と激情を鎮められながら生きていく。「葉桜と魔笛」の若い姉妹が、互いの嘘が露見してはじめて内心を探り合つた場面を改めて思い起こそう。二人は、別個であり対照的でもあつたはずの互いの心身がよく似た欠如感に苛まれており、時代・社会の縛りのなかで生きる若い女の苦痛をとおして結ばれていることに気づいた。性愛に満たされることを密かに欲していた者同士、言葉にならない感情の高まりのなかで身を寄せ合い、互いの存在を体感しようとしたのである。そのひと時は姉にとつて、『あたしの手が、指先が、髪が、可哀そう』（二二二）と痛哭する妹を——抑圧された欲望によつて引き裂かれた他者の心身を——抱きとめるだけでなく、相手と合わせ鏡になつた自分の心身を肯定し、抱きしめる経験でもあつたはずだ。それは、良妻賢母思想から外れるという点でも、感情を抑制しないという点でも、同時代の女子教育から逸脱するものだった。そんな経験を見通し肯定するかのよう<sup>1</sup>に登場し、その瞬間に途絶させたのが、おそらくは父によるものと思われる口笛である。父が奏でた口笛の音色は、歌劇「魔笛」に登場する性愛礼賛の歌のイメー

ジと、女を支配し抑圧する歌のイメージの両方を帯びる。愛情表現としての軍艦マーチというそもそもの発想のうちに不協和が孕まれていた口笛であるが、魔笛としての口笛は、己の欲するように生きることについて矛盾する二つのメッセージを発することで、その受信者を行動不能にした。その意味でまさに魔的な力を行使したといえよう。結果、姉はその時代・社会の女に求められる生き方を甘受し、老いてなお《あのころは、私自身も、ほんとに、少し、をかしかったのでございます》(三二頁)とかつての己のわずかな逸脱を恥じ続けたのである。

「口笛＝魔笛の主は神か父か」という彼女の疑問は、亡き人との関係性を見直し再構築しようとする思いから生じたものと解釈できる。当時の回想が幾度も繰り返されるのは、もはや正解を確定できない問いを主たる動力源としているからに他ならない。また本稿第四章で考察したように、神と父が同じ機能をもつことに注目すれば、父による《狂言》と神による《恩寵》は真に対立するものでなく、彼女の問いの二項対立は見せかけの対立ではないことになる。そんな空疎な問いが、彼女を自分自身と向き合うこと——かつて欲した自分や奪われてしまった自分、あるいは今ここにいる自分を語りの中心に据えること——から遠ざけさせているのではないか。最後には信仰と物欲を対置させることといい、老夫人の語りはどこかピントが外れた印象を与えるものとなっている。

小説「葉桜と魔笛」が侘しいモノローグで幕を下ろすことは、歌劇の歓喜に満ちたフィナーレと替わって対照的である。《年とつて来ると、物慾が起り、信仰も薄らいでまゐつて、いけないと存じます》(三二六頁)という、ネガティブな反省の弁に耳を傾けた読者に、歌劇

の観客が味わう心地よいカタルシスが訪れることはない。老夫人に語りかけられた者としてその半生に向き合うには、語られた物語のピントを手ずから合わせ直す必要がある。

戦時下に紡がれた過去の戦時下の経験をも、抑圧の跡が刻まれたモノローグとしていったん受け取り、後の世代、後の時代の目線をもって応答すること。そんな読者の役割によって、社会規範と時局に寄り添う本作の堅固なベクトルが確認され、そのベクトルが乱れ戦時下の日常が僅かに踏み越えられた光景に焦点を合わせることもまた可能となる。パパーノのように個として性愛に突き動かされる瞬間、秩序や良識よりも大事なものに気づく経験を、たとえ束の間であつてもかけがえのないものだと言断する者がいるとすれば、それは神＝父でなく私たち読者ということになるだろう。

#### 注

(1) 初出は『若草』小説欄で、後に『皮膚と心』(竹村書房、一九四〇年四月)等に収録された。本稿は『太宰治全集 3』(筑摩書房、一九九八年六月)所収の本文に拠り、小説タイトルも含め旧漢字は新漢字に改めている。

(2) 正解を確定するのではなく、生徒から多様な読みが出されることを求める幸田国広「掩蔽論——太宰治「葉桜と魔笛」教材論を軸に——」(『日文協国語教育』二三号、一九九一年六月)、とんでん返しの構造と表現技法に注目する根本啓二「『葉桜と魔笛』を読む」(『国語 教育と研究』四七号、二〇〇八年三月)ほか。

(3) 全三回に分け、校異、語釈、評解を行った三谷憲正「『葉桜と魔笛』

- 評釈(一)、『太宰治研究』一六輯、二〇〇八年六月)ほか。
- (4) 芥川龍之介「舞踏会」(『新潮』一九二〇年一月)、ジャネット・マックス「郭公」(『世界戯曲集 第一〇巻—アメリカ現代劇集』同全集刊行会、昭和三年七月、北村喜八訳)、山岸外史「人間キリスト記」(第一書房、一九三八年一月)、尾崎一雄「ささやかな事件」(一九二五年初出、『若草』一九三七年一〇月号再掲)との関わりがすでに指摘されている。
- (5) 北里信太郎「精神病理から診た太宰治 魔笛は告白する—太宰治・かたりの心理—」(『国文学 解釈と鑑賞』五二巻六号、一九八七年六月)、佐古純一郎「太宰治とキリスト教」(『太宰治研究』奥野健男編、一九七四年四月)ほか。
- (6) 廣瀬晋也「戦争というフレイム・芥川の菊と太宰の葉桜(芥川龍之介往還 I)」(『近代文学論集』二三号、一九九七年一月)
- (7) 佐々木啓一「太宰治 演技と空間」(洋々社、一九八九年五月)、大平剛「太宰治「葉桜と魔笛」論」(『帯広大谷短期大学紀要』四四号、二〇〇七年三月)。
- (8) 花崎育代「葉桜と魔笛」論—ロマネスクの外/追想の家族—」(『太宰治研究』四輯、一九九七年六月)
- (9) 木村小夜「太宰治『葉桜と魔笛』論」(『叙説』一七号、一九九〇年一月)
- (10) 井原あや「姉が編み上げたロマン—太宰治「葉桜と魔笛」を読む」(『相模国文』三五号、二〇〇七年三月)
- (11) 櫻田俊子「太宰治『葉桜と魔笛』論—自己充足としての創作と父への郷愁の物語」(『郷土作家研究』三五号、二〇一二年三月)
- (12) 山田佳奈「太宰治『葉桜と魔笛』の一考察—「老夫人」の宿痾—」(『武庫川国文』七八巻、二〇一四年一月)
- (13) 小倉智史「教材研究・太宰治『葉桜と魔笛』—「論証の厚み」のレトリック—」(『国語 教育と研究』五二号、二〇一三年三月)、河内重雄「太宰治のディコンストラクション—「葉桜と魔笛」における二つの文脈—」(『北九州市立大学文学部紀要』八六号、二〇一六年九月)。
- (14) 神田富士男「老夫人の(語り)に潜む物語の凄み—「葉桜と魔笛」論—」(『日本文学』六七号、二〇一八年八月)
- (15) 玉田琴乃「太宰治『葉桜と魔笛』論—姉妹の青春—」(『学習院大学国語国文学会誌』六五号、二〇一三年三月)
- (16) 廣瀬晋也「戦争というフレイム・芥川の菊と太宰の葉桜(芥川龍之介往還 I)」(前掲)
- (17) 「魔笛」の日本への移入については、『東京朝日新聞』と『読売新聞』の記事を調査したほか、『音楽年鑑』(西益雄編、太平洋書房、一九二七年一〇月)、『歌舞伎・新派・新国劇 上演年表』(小宮麒一編集発行、一九九四年五月)、『近代日本芸能年表 上』(倉田喜弘・林淑姫、ゆまに書房、二〇一三年七月)、伊藤直子「魔笛」の帝劇公演(1913)をめぐる—ドイツ・オペラ受容の側面—」(『研究紀要』Kunitachi College of Music Journal』四五集、二〇一一年三月)等を参照した。
- (18) 小林愛雄「—(劇評)— 帝国劇場の六月」(『演藝画報』第七年九号、一九一三年七月)
- (19) 吉井勇「長編『魔笛』作者の言葉」(『東京朝日新聞』一九一三年一月二二日、七面)
- (20) 伊藤義雄「モーツァルトの歌劇『魔笛』」(『月刊楽譜』一三巻五号、

一九三四年五月、一三頁、一六頁)

- (21) ここでは当時の日本国内の評価を取り上げたが、例えばドイツの哲学者ツイルヘルム・デイルタイの認識もこれと同様であった (『Von Deutschen Dichtung und Musik: aus Studien zur Geschichte des Deutschen Geistes』一九三三年／以下の引用は抄訳である『十八世紀の大音楽』山西英一訳、河出書房、一九四七年四月、一四六頁)。デイルタイは、パバゲーノとパバゲーナについて『いかにも彼ららしい可憐な魂の軽快さが、非常に素晴らしく表現されてゐる。』と特筆しつつ、作品全体の音楽的表現を絶賛した。一方、ストーリー展開については、『外的進行の平板さ、音楽を伴奏させる筋の変化の不安定さは、あまりにも甚だしく、そのため、演出にあたつて、完全に純粹に鑑賞することは不可能である。』との見解を示した。
- (22) 新江郁栄「モーツァルトのオペラ『魔笛』の台本と音楽に関する一考察——フリーメーソン思想とモーツァルトの理想——」(『藝術研究』一九九号、二〇〇六年七月)
- (23) 廣瀬晋也「戦争というフレーム・芥川の菊と太宰の葉桜(芥川龍之介往還 I)」(前掲)
- (24) 一月二七日と二八日の二日間にわたり開催され、『東京朝日新聞』(一九〇六年一月二七日、朝刊七面)は演目とモーツァルトを紹介する記事を掲載した。
- (25) 一九二五年四月三〇日に帝国劇場でオペラ歌手メイベル・ギャリソンが『魔笛』第一幕の夜の女王のアリアを独唱したことを始め、東京の演奏会や独唱会で『魔笛』の歌曲が取り上げられたことを伝える記事は大正期にも少なくない。また、昭和期に入るとラジオ番組組で放送された記録も残る。例えば、一九二九年四月二日にJOAK
- シンフォニーオーケストラによる歌劇『魔笛』序曲の放送、一九三一年七月二三日に關種子による夜の女王のアリア独唱の放送など。
- 「葉桜と魔笛」が発表された一九三九年六月には、ビクターのモーツァルト歌劇協会が発売したベルリン・フィルハーモニー演奏『魔笛』全曲レコードが『月刊楽譜』でレビューされるなど(今出川泉「モーツァルトの『魔笛』全曲」(月刊楽譜 二八巻六月号)、時代を追って『魔笛』の国内認知度は上がっていったことが伺える。
- なお、文学作品においては、一九二七年一〇月に『改造』に掲載された芥川龍之介による自伝的要素の濃い作品「或阿呆の一生」の四一章「病」で、カフェにいた主人公が「Magic Flute」のレコードを耳にする印象的な場面がある。また太宰の他作品に「魔笛」の名称は見えないものの、「女生徒」(一九三九年四月)の語り手はモーツァルトやバッハに熱中していると語り、「渡り鳥」(一九四八年四月)には日比谷公会堂の音楽会でモーツァルトを聴いたばかりの青年が登場する。
- (26) 書籍目録「日本近代文学館所蔵資料目録33 太宰治文庫目録 増補版」(公益財団法人日本近代文学館 二〇一七年四月、二四頁)
- (27) 『歌劇総譜全集』(CD)モーツァルト『魔笛』(プリモ楽譜出版社編集部、一九五六年二月、二〇四頁)。本稿で『魔笛』の日本語訳歌詞を引用する際は、管見の限り最も古い『魔笛』歌曲全訳であり、『本邦で最初の本格的なオペラ・ヴォーカルスコアの日本版』と銘打たれた本書に拠る。
- (28) 文部省「小学唱歌 第三編」(文部省音楽取調掛編、一八八四年三月、二六丁表、一番と二番の歌詞全体)
- (29) 花崎育代「葉桜と魔笛」論——ロマネスクの外／追想の家族——

(前掲)

(30) 日露戦争時の良妻賢母主義とそれを唱導する菊池大麓文部大臣の言説については、加藤千香子『近代日本の国民統合とジェンダー』（日本経済評論社、二〇一四年六月）を参照して調査した。

(31) 『菊池前文相演述九十九集』（菊池大麓述、田所美治編、大日本図書、一九〇三年一月、二〇九頁）。大日本婦人教育会における演説（一九〇二年一月一八日）の一部。

(32) 『菊池前文相演述九十九集』（前掲、七九頁、八〇頁、傍点ママ）。高等女学校校長会議における演説（一九〇二年五月一日）の一部。

(33) 『歌劇総譜全集（VOL.2）モーツァルト魔笛』（前掲、一八六頁）

(34) 廣瀬晋也「戦争というフレーム・芥川の菊と太宰の葉桜（芥川龍之介往還 I）」（前掲、六七頁）

(35) 第二幕第二八場で火の試練に向かう際、パミーナはタミーノに《この笛は風の夜、／雷鳴の轟く魔の刻に／令千年を経た樫の木を削り、／父がこさへたものでございます。／さあ笛を頼りに／苦難の道を歩みましょう。》（『歌劇総譜全集（VOL.2）モーツァルト魔笛』二〇七頁）と告げる。

(36) 『歌劇総譜全集（VOL.2）モーツァルト 魔笛』（前掲、一三二頁）

(37) 一八九八年九月一五日から二六日に高等商業学校講堂にて開催された全国尋常中学校長会議については、『教育時論』四八四号（一八九八年九月、四八五号（一八九八年一〇月）を参照。

(38) 『魔笛』第二幕第五場および第一幕第一八場（『歌劇総譜全集（VOL.2）モーツァルト 魔笛』前掲、一九七頁、一九二頁）を参照。後者の引用は、母である夜の女王を懐かしがるパミーナにザラストロがかけた言葉である。

(39)

口笛がもつ役割については大平論（前掲）が、美しい愛の象徴とする従来の読み方に対し、国家主義や家族主義に向けられた妹の敵意を封じ込める側面に注意を促した。また玉田論（前掲）も、口笛は姉妹の欲望を認めるようにも制止するようにもみえるという二面性を指摘した。

(40) 老夫人の語りによると姉妹は似ておらず、外出できる健康な者と病床で死を待つ者として対照的な日々を送っていた。

# 修士論文要目

長谷場悠真

岩谷時子論

本稿は、作詞家岩谷時子について一九六〇年代の活動を中心に論じたものである。岩谷時子は昭和期に活躍した作詞家であり、訳詞家、翻訳家、歌手越路吹雪のマネージャーとしても知られている。代表作として、作詞「君といつまでも」（加山雄三）、訳詞「愛の讃歌」（越路吹雪）、翻訳「レ・ミゼラブル」などがあり、日本を代表する作家と言えるが、彼女を対象とした研究はほとんど行われていない。膨大な作品群の中から、岩谷が最も作詞を行い、大衆にも受け入れられた一九六〇年代のものを中心に分析の対象とした。

第一章では、岩谷の経歴を詳述し、作詞家となる経緯や最も活躍した時期が一九六〇年代であることを明らかにした。つづく第二章では、「岩谷時子の描いた女性像——一九六〇年代を中心に——」（福岡大学日本語日本文学 第三十一号『二〇二二年二月』）で分析、比較対象とした作品や作詞家の選択基準についての問題点を挙げた。

その問題点を受け第三章では、当時の日本の流行歌産業での作詞家の位置関係を明らかにするため、代表的音楽イベントであった「NHK紅白歌合戦」と「日本レコード大賞」を材料に考察を行った。その結果、岩谷と同じく六〇年代に最も活躍し、かつ外国曲の訳詞をきっかけに流行歌の作詞家となつたなかにし礼を比較対象と

定めた。

第四章では、なかにし礼と共通して作品提供を行ったザ・ピーナッツと菅原洋一の楽曲を分析対象とし、なかにし礼の描く女性像は以前考察した「男の描く女」の系譜を継ぐ伝統的なものである一方、岩谷の描く女性像は「女自身が描く女」という、等身大で新しい姿であったという点を明らかにした。

さらに第五章では、六〇年代から七〇年代に掛けての日本の流行歌産業の動向と岩谷自身の生活に視点を移し、いかにして作詞の活動の幅を拡げ大衆に受け入れられていったか、また七〇年以降その活動が減少していった要因についての考察を行った。

このように、時代を一九六〇年代に絞り、当時の作詞家全体の位置関係を整理し、その中の岩谷時子の立ち位置と作風の特徴を比較分析した。結論として、六〇年代のカバー・ポップスの流行を機にフリーランスの作詞家として活躍を始めた岩谷は、男性作詞家の描く伝統的な女性像とは対照的な、等身大で新しい女性像を描き、その独特な作風が広く大衆に受け入れられた。その活躍は斬新な作風だけでなく、当時の音楽界の流行、そして当初より関係の深かった歌手越路吹雪の活動の変化といった外的なものにも支えられていたという点を明らかにした。

山崎ゆずか

泉鏡花『義血俠血』考

『義血俠血』は、明治二十七年に発表された泉鏡花の初期作品である。主人公の欣弥を立派な法曹にするため、女芸人・滝の白糸は献身的に援助を施すが、その過程で白糸は金策に窮し強盗殺人を犯す。法廷に検事代理となった欣弥が登場し、白糸に白白を求めると、結末部では恩人と二度と会えないことを憂いて自殺を図る。従来の研究には、欣弥の行動を分析するものが多く、欣弥の自殺は白糸からの愛に応えるものとして解釈されてきた。これまで白糸がヒロインとして受容されてきた原因の一つを、作品全体を通して彼女の心情が描かれていないことにあると考える。修士論文では、草稿『誓判事』および同時代評や鏡花の初期作品との比較を通して白糸像の再検討を行うとともに、作品の主題を「恋愛」ではなく「義侠」とする解釈を試みた。

草稿『誓判事』はすべて鏡花が構成・執筆したもので、師匠である尾崎紅葉の修正が大幅に加わったものが『義血俠血』である。内容面での大きな修正点は次の三点である。一点目は、登場人物の名前の変化。二点目は、男性主人公の職業の変化。三点目は結末部の変化である。『誓判事』の主人公・莊之助が被告に直接判決を下す判事（裁判長）の立場にあることから、法廷で陪席判事に白糸との私的な関係を非難される。莊之助は証拠品の包丁で自身の両眼を潰すことで白糸との関係性を否定する。一方で、欣弥は判決を下す立場にないため第三者からの指摘を受けることなく、眼を閉じることで私情を捨てて。加えて、『誓判事』には莊之助の死を知った白糸が死刑執行の日を指折り数えて待つ場面が描かれるのに対し、『義血俠血』は欣弥の死後の場面はない。

本研究では、両作品で白糸に対して繰り返し用いられる「俠」「女丈夫」という性質から彼女の行動原理を探ることに努めた。同時代の文学批評において、「俠」はごく普通に使われる言葉であり、当時の辞書を参照すると「信義を守るために自分を犠牲にすること」として説明されている。また、幕末から明治時代にかけて、実際に「女丈夫」と呼ばれる女性たちが輩出された史実がある。

はじめに鏡花の初期作品に登場する女性像を「俠」の有無を基準として分類した。「俠」を持たない女性に共通する点は、自力で逆境を乗り越える術を持たない点である。彼女たちの行動は「好きな人に会いたい」という思いに起因するが、彼女たちが意中の人に会うためには、必ず周囲の人の援助や犠牲がなければならぬ。援助がなければ、その時が来るのをただ待ただけである。しかし、「俠」を持つ女性は、目的を達成するためであれば自らの手を汚すことを厭わず、必ず任務を全うする。彼女たちには主君の命令や愛国心など、自らを犠牲にしても守るべきものがあり、それを信念としている。それゆえに、乱菊は主君のために意中の人を殺め（『乱菊』）、直子は国のために親子の縁を切り（『子備兵』）、お丹は作中で悪魔に例えられるほど敵を追い詰める（『貧民俱樂部』）。彼女たちは信念のためならば人を殺すことも辞さない。

従来、「欣弥への恋心による」とされてきた白糸の突飛な言動や強盗殺人は、彼女の「俠」によるものである。法曹となった欣弥を前にしてもなお否認し続けた白糸が、欣弥の論告を受けて白白するのは、「欣弥を立派な法曹にする」という務めを完遂したと実感したからであり、虚偽の答弁により誤った判断をさせることで「立派な法曹」でいらなくなることを恐れたからである。

# 博士論文要旨

パトリック・パーマー

## 日本語におけるイメージ・メタファー表現の研究

本論文は日本語におけるイメージ・メタファー表現についての研究である。イメージ・メタファー表現は、「白魚の指」や「蟬時雨」のような、視覚や聴覚などに基づいた比喻表現の一種である。本研究では、こうした視覚や聴覚に基づく比喻表現の認知的要因や直喩標識との関係を探求している。

第1章では、イメージ・メタファー表現の認知言語学における理論的位置付けを確認した。特に、言語の使用に喚起される心的イメージの性質がどのようにイメージ・メタファー表現を制約するかに注目した。

第2章では、視覚経験及び心的イメージが、どのようにイメージ・メタファー表現の理解に関わるかについて論じた。具体的には、視覚経験における物体の大きさの捨象、左右の向きの捨象、上下の向きの制約という3つの特徴は、イメージ・メタファー表現の解釈のあり方に反映されると主張した。

第3章では、コーパスデータを用いてイメージ・メタファー表現と「ヨウ」や「ミタイ」などの直喩標識との共起について調査を行った。その結果、イメージ・メタファー表現における構成語の使用頻度と直喩標識の有無は相関関係にあることが示唆された。

第4章では、移動を表すイメージ・メタファー表現の制約を探った。日英語のコーパス調査により、英語及び日本語の動的イメージ・メタファーの用例を抽出し調査を行った。その結果、動的イメージ・メタファー表現は、静的イメージ・メタファー表現とは異なり、喩えるもの（喩辞）と喩えられるもの（被喩辞）につながる心的イメージが、移動の上下の向きという点において制約されることが示唆された。

第5章では、接尾辞「状」と「ガタ」の意味拡張を分析した。両接尾辞は、ものの見た目をどう捉えるかを特定する役割があるため、心的イメージと緊密な関係にある。本分析を通して、両者の多義性の異同が、喚起されたメンタル・イメージの特性に起因する可能性を示した。

第6章では、主に日本語歴史コーパスから収集したデータを用いて、「なり」の名詞用法、接続詞用法、接尾辞用法に対する通時的な分析を行った。特に「接続詞用法」は、現代日本語において「状態維持」と「時間的近接」という用法があるが、それぞれの成立過程は先行研究において明らかではない。本調査を通して、「状態持続」の用法が先に成立し、もともと「なり」に続いていた助詞「で」「に」の消失により前件が後件に与える影響の有無に関して曖昧性が生まれ、そこから「時間的近接」の用法が成立したと推測した。

第7章では、イメージ・メタファー表現の談話における役割を明らかにするため、視覚障がい者と晴眼者との間の3つの会話データに基づいて談話分析を行った。その結果、晴眼者はイメージ・メタファー表現とオノマトペの使用により芸術作品の形状や有様を描写することが多いことを確認した。本分析を通して、イメージ・メタファー表現が談話上において話者間で意味が決定されていくものであり、対象物に対する理解を促すことが多いことも確認した。

◎二〇二三年度福岡大学日本語日本文学会(ハイブリッド開催)

二〇二四年一月六日(土) 福岡大学中央図書館一階多目的ホール

日本語日本文学会総会

研究発表

パトリック・パーマー

字形に基づいたイメージ・メタファー表現の考察

講演

大坪 亮介(私的)『太平記』研究のこれまでとこれから

畑中 佳恵 長崎イメージを追いかけて

——研究テーマとの出会いを中心に——

懇親会 陽だまり

◎二〇二三年度日本語日本文学科卒業論文発表会

二〇二四年一月三十一日(水) AB01教室

香月 美優 オノマトペの通時的研究

河野 友希 接尾辞の語基拡大と意味——接尾辞「め」について——

橋口 藍 紫の上における生霊化の可能性

——『源氏物語』の苦悩の表現——

村上 和優 平家物語諸本における重盛と維盛

國重 鈴 『春雨物語』について——「宮木が塚」を中心に——

谷崎 仁美 江戸川乱歩『押絵と旅する男』論

武田 彩希 夏目漱石「文鳥」論

中沢 智美 大宰治「ロマネスク」論

——「荒唐無稽」と「私小説」の二項対立を解  
体するテキスト

八尋 萌百 『露の笈』から『桜の森の満開の下』へ

——坂口安吾における伊勢物語の影響——

◎二〇二三年度卒業論文題目

衣畑ゼミ

山邊 樹里 原因推量ラムの疑問語の省略と係り結びとの呼応の変化

大水 陽暉 上五島方言の研究——江袋方言の可能形式の考察

末廣眞菜美 「やる」の歴史の変遷について

西原 佳那 宮崎方言の終助詞「ちゃわ」「ちゃが」「ちゃじ」の使  
い分けについて

久野 友徳 「アフ」の歴史の変遷

林 優那 副助詞「バカリ」の歴史の変遷

——慣用表現「ンバカリ」における打ち消しと完了

三浦 唯菜 「あはれ」の歴史的研究

香月 美優 オノマトペの通時的研究

江口ゼミ

森田 樹 宮崎方言の特徴——東諸郡国富町の方言について——

河野 友希 接尾辞の語基拡大と意味——接尾辞「め」について——

大江 彩香 医療福祉における言語コミュニケーションについて

——介護の被介護者としての意識と介護職員の声か  
けのことば遣いに着目して——

高橋 恰央 感情動詞「好いとう」について

——「好いとう」使用の実態——

高橋 恰央 感情動詞「好いとう」について

——「好いとう」使用の実態——

政池由紀子 佐賀東部の文法——可能表現について——  
樋口 港斗 「方言キヤラ」について

須藤ゼミ

貝原 史夏 『我が身にたどる姫君』の女帝と前齋宮

——女房の存在を通して——

小坂 佑典 『玉水物語』狐論——狐と人間の関係から——

橋口 藍 紫の上における生霊化の可能性

——『源氏物語』の苦悩の表現——

辛島 成美 『夜の寝覚』の姉妹

臼杵 志織 『蜻蛉日記』の表現——道綱母の苦悩をめぐって——

簗田 桃佳 『源氏物語』における手紙の表現と方法

——光源氏と六条御息所の関係から——

山田明日香 『源氏物語』の史実と虚構

——桐壺帝治世の政治的側面——

里元 佑衣 『源氏物語』花散里論——源氏との関係をめぐって——

河野 与 『和泉式部日記』における端役の表現と機能

大坪ゼミ

松藤 美蘭 和歌からうかがえる七夕

中島 玄貴 『とはすがたり』における作者後深草院二条と父雅忠

村上 和優 平家物語の諸本における重盛と維盛

高橋ゼミ

古野 由葵 上田秋成『春雨物語』——「目ひとつの神」について——

國重 鈴 『春雨物語』について——「宮木が塚」を中心に——

岩本 梨央 『南総里見八犬伝』考——大の正体——

平山菜未希 『東海道四谷怪談』論——お岩の未練——

中野ゼミ

田中凌太郎 小林多喜二「蟹工船」論

——リーマンショック下の「蟹工船」受容

柴田 祥徳 太宰治「皮膚と心」論

平島 実桜 吉屋信子「花物語」論

吉武由璃紗 夏目漱石「こころ」論

浦川 育美 宮沢賢治「貝の火」論

後藤 壮作 井伏鱒二「鯉」論

磯村 健生 森鷗外「山椒大夫」論

橘 晴生 宮沢賢治「銀河鉄道の夜」論

中沢 智美 太宰治「ロマネスク」論

——「荒唐無稽」と「私小説」の二項対立を解体するテクスト

畑中ゼミ

山中 涼平 葉山嘉樹「淫売婦」論——プロレタリア文学の小説性——

権藤 宏典 小川洋子「博士の愛した数式」論

——登場人物間の愛情表現の描写を中心に——

畠中 紀穂 堀辰雄「燃ゆる頬」論——性的な描写を中心に——

馬場 和奏 夢野久作「少女地獄」論——作中に登場する少女の嘘——

坂井 桃花 江戸川乱歩「孤島の鬼」論

——タイトルに込められた意味について——

下山 翔 内田百閒作品における声・音の考察

山崎 華 梶井基次郎「冬の蠅」論——円環性をめぐって——

武田 彩希 夏目漱石「文鳥」論  
時廣野々花 横光利一「花園の思想」論

永井ゼミ

角田 麻衣 『銀河鉄道の夜』における「ほんたうのさいはひ」  
宇都宮義裕 「半七捕物帳」

北平 陽 ——『江戸のおもかげ』と『現代人に伝える方法』の考察  
太宰治 『ヴェイヨンの妻』論

谷崎 仁美 江戸川乱歩「押絵と旅する男」論

真子 由衣 有島武郎「一房の葡萄」論

平田 素子 夏目漱石「心」論

越智 祥子 谷崎潤一郎「蘆刈」論

林ゼミ

山下 優菜 太宰治『さりざりす』論

八尋 萌百 『露の答』から『桜の森の満開の下』へ

中村 愛美 ——坂口安吾における伊勢物語の影響——  
梶井基次郎『城のある町にて』論

波多野瑛梨 ——漱石「非人情」の美学の影響をめぐって——  
田山花袋『蒲団』論

尾川 凧亮 ——外国文学への言及の仕方をもぐって——  
三島由紀夫『潮騒』論

嶺 杏菜 泉鏡花『夜叉ヶ池』論

桑山 怜也 横光利一『機械』論

広中 音羽 宮沢賢治『なめとこ山の熊』論

◎二〇二三年度博士論文題目  
パトリック・パーマー

日本語におけるイメージ・メタファー表現の研究

◎二〇二三年度修士論文題目

長谷場悠真 岩谷時子論

山崎ゆずか 『義血侠血』考

◎二〇二四年度担当授業科目

〈専門教育科目〉

第一年次

日本語日本文学基礎演習Ⅰ(Aクラス)

日本語日本文学基礎演習Ⅱ(Bクラス)

日本語日本文学基礎演習Ⅲ(Cクラス)

日本語日本文学基礎演習Ⅳ(Dクラス)

古典文学講読Ⅰ

日本語学概論Ⅰ

日本語学概論Ⅱ

日本文学概論Ⅰ

日本文学概論Ⅱ

日本文学史Ⅰ

日本文学史Ⅱ

比較文学概論

近代文学及び比較文学講読Ⅰ

地域語研究

大坪 亮介他

畑中 佳恵他

山縣 浩他

衣畑 智秀他

大坪 亮介

江口 正

衣畑 智秀

永井 太郎

畑中 佳恵・中野 和典

衣畑 智秀他

大坪 亮介他

林 信蔵

(非常勤講師) 竜口佐知子

(非常勤講師) 坪内佐智世

地域文化研究

芸能研究Ⅰ・Ⅱ

第二年次

漢文学講読Ⅰ

漢文学講読Ⅱ

古代語調査研究法

近代語調査研究法

現代語調査研究法

古典文学調査研究法Ⅰ

古典文学調査研究法Ⅱ

近代文学調査研究法Ⅰ

近代文学調査研究法Ⅱ

近代文学調査研究法Ⅲ

古典文学及び比較文学調査研究法

近代文学及び比較文学調査研究法

古典文学講読Ⅱ

古典文学講読Ⅲ

日本語教育法Ⅰ・Ⅱ

日本語史Ⅰ

日本語史Ⅱ

日本語表現法Ⅰ・Ⅱ

近代文学及び比較文学講読Ⅱ

近代文学及び比較文学講読Ⅲ

第三・四年次

古代語演習 a b

(非常勤講師)

永井 太郎

大木 桃子

須藤 圭

高橋 昌彦

衣畑 智秀

山縣 浩

江口 正

大坪 亮介

高橋 昌彦

中野 和典

畑中 佳恵

永井 太郎

須藤 圭

林 信蔵

高橋 昌彦

須藤 圭

江口 正

衣畑 智秀

山縣 浩

山縣 浩

中野 和典

畑中 佳恵

衣畑 智秀

近代語演習 a b

現代語演習 a b

古典文学演習Ⅰ a b

古典文学演習Ⅱ a b

近代文学演習Ⅰ a b

近代文学演習Ⅱ a b

近代文学演習Ⅲ a b

古典文学及び比較文学演習 a b

近代文学及び比較文学演習 a b

社会言語学特講

心理言語学特講

日本語学特講Ⅰ a・Ⅱ a

日本語学特講Ⅲ a・Ⅳ a

日本語学特講Ⅴ a・Ⅵ a

日本語学特講Ⅶ a・Ⅷ a

日本語学特講Ⅷ a・Ⅷ a

日本語学特講Ⅷ a・Ⅷ a

日本語学特講Ⅷ a・Ⅷ a

日本語学特講Ⅷ a・Ⅷ a

比較文学特講Ⅲ a

比較文学特講Ⅳ a

比較文学特講Ⅳ a

日本語教育法Ⅲ・Ⅳ

第四年次

卒業論文及び卒業論文指導

山縣 浩

江口 正

大坪 亮介

高橋 昌彦

中野 和典

畑中 佳恵

永井 太郎

須藤 圭

林 信蔵

坪内佐智世

(非常勤講師) 今村 亜子

(非常勤講師) 衣畑 智秀

山縣 浩

江口 正

大坪 亮介

高橋 昌彦

畑中 佳恵

中野 和典

永井 太郎

林 信蔵

(非常勤講師) 安河内敬太

須藤 圭

江口 正

衣畑 智秀・山縣 浩

江口 正・須藤 圭  
大坪 亮介・高橋 昌彦  
中野 和典・畑中 佳恵  
永井 太郎・林 信蔵  
日本語教授法演習Ⅰ・Ⅱ  
(教職課程科目)  
(非常勤講師) 清水りえ子

国語科教育法Ⅰ 須藤 圭

国語科教育法Ⅱ 中野 和典

国語科教育法Ⅲ・Ⅳ 小津和広昭

教育実習事前・事後指導「国語」  
(共通教育科目) 中野 和典

日本文学A (日記文学を読む) 須藤 圭

日本文学B (王朝物語を読む) 須藤 圭

日本文学B (『徒然草』の世界) 高橋 昌彦

日本文学A (鬼とは何か) 高橋 昌彦

日本文学B (天狗とは何か) 高橋 昌彦

日本文学A (明治から昭和初期の日本文学) 中野 和典

日本文学B (昭和初期以降の日本文学) 中野 和典

日本文学A (近現代文学の精読と分析) 畑中 佳恵

日本文学B (島崎藤村『破戒』) 畑中 佳恵

日本文学A (幻想文学の理論と諸問題) 永井 太郎

日本文学B (幻想文学の構造と諸問題) 永井 太郎

日本文学A (宮沢賢治「銀河鉄道の夜」を読む) 永井 太郎

日本文学A (今昔物語集を読む…当時の恋愛と家族関係を中心に)  
(非常勤講師) 竜口佐知子

(非常勤講師) 大木 桃子

日本文学B (今昔物語集を読む…芥川龍之介の小説との関係を中心に)  
(非常勤講師) 大木 桃子

日本文学A「BB」(近代日本の短編小説を読む(宮沢賢治、芥川龍之介、井伏鱒二ほか))  
(非常勤講師) 野田 康文

日本文学A「BB」(近代日本の長編小説を読む(谷崎潤一郎「痴人の愛」))  
(非常勤講師) 野田 康文

日本文学B「BB」(近代日本の長編小説を読む(谷崎潤一郎「痴人の愛」))  
(非常勤講師) 野田 康文

日本文学B「BB」(近代日本の長編小説を読む(谷崎潤一郎「痴人の愛」))  
(非常勤講師) 野田 康文

日本文学A「教養ゼミ」(ミヤークツ入門)  
(非常勤講師) 野田 康文

日本文学A「教養ゼミ」(ミヤークツ入門)  
(非常勤講師) 野田 康文

日本文学A「教養ゼミ」(徒然草 輪読)  
(非常勤講師) 野田 康文

日本文学A「教養ゼミ」(近現代文学の精読と分析)  
(非常勤講師) 野田 康文

日本文学B「教養ゼミ」(日本近現代の短編小説を読む)  
(非常勤講師) 野田 康文

日本文学A「エミール・ゾラ『制作』と19世紀フランスの都市文化・芸術)  
(非常勤講師) 野田 康文

西洋文学B (フランス・オペラにおける文学と音楽の融合)  
(非常勤講師) 野田 康文

西洋文学A (カミュ『異邦人』を読む)  
(非常勤講師) 野田 康文

西洋文学A「BB」(カミュ『異邦人』を読む)  
(非常勤講師) 野田 康文

西洋文学B (モーパッサン『脂肪のかたまり』を読む)  
(非常勤講師) 野田 康文

西洋文学B「BB」(モーパッサン『脂肪のかたまり』を読む)  
(非常勤講師) 野田 康文

西洋文学A「BB」(モーパッサン『脂肪のかたまり』を読む)  
(非常勤講師) 野田 康文

西洋文学B「BB」(モーパッサン『脂肪のかたまり』を読む)  
(非常勤講師) 野田 康文

西洋文学A「BB」(モーパッサン『脂肪のかたまり』を読む)  
(非常勤講師) 野田 康文

西洋文学B「BB」(モーパッサン『脂肪のかたまり』を読む)  
(非常勤講師) 野田 康文

◎二〇二四年度大学院講義科目(開講分のみ)

博士課程前期

日本語学特講I a・I b 衣畑 智秀

日本語学特講Ⅱ a・Ⅱ b	山縣 浩
日本語学特講Ⅲ a・Ⅲ b	江口 正
日本語学演習Ⅲ	江口 正
日本文学特講Ⅰ a・Ⅰ b	須藤 圭
日本文学特講Ⅲ a・Ⅲ b	高橋 昌彦
日本文学特講Ⅳ a・Ⅳ b	永井 太郎
日本文学特講Ⅵ a・Ⅵ b	中野 和典
日本文学特講Ⅶ a・Ⅶ b	林 信蔵
日本文学演習Ⅲ	高橋 昌彦
日本文学演習Ⅳ	永井 太郎
日本文学演習Ⅵ	中野 和典
博士課程後期	
日本文学特別研究Ⅰ	高橋 昌彦

前号目次

三嶋讓先生を悼む 大人になるとのこと	永井太郎
——大江健三郎「飼育」の《僕》の加害性——	
宮沢賢治の「理想」について ——「デクノボー」とグスコープドリ・ゴーシュ——	畑中佳恵 竜口佐知子
『ねじまき鳥クロニクル』論 ——「容れ物」と「内容物」の関係、想像と共感の姿勢について——	長瀬大和
佐賀怪猫伝の源流	高橋昌彦
戸沢正令『更科日記略註』にみる注釈態度	野口智代
帰国後の龍山徳見とその周辺 ——『黄龍十世録』『小仏事』を中心に——	大坪亮介
修士論文要旨 彙報	
前号目次・前々号目次	
「福岡大学日本語日本文学」投稿規程 編集後記	
山田美妙「兜菊」の文体——体言止めの実態——	山県浩

前々号目次

『太平記』光厳法皇行脚記事における和歌利用 ——御津の浜での光厳詠を中心に——	大坪亮介
消息往来——廣瀬淡窓と青山延光の場合	高橋昌彦
両義性の意義——村上春樹「鏡」論——	中野和典
《虚》をつなぐ——青来有一『爆心』連作の冒頭表現をめぐる小論——	畑中佳恵
彙報	
前号目次・前々号目次	
「福岡大学日本語日本文学」投稿規程 編集後記	

## 「福岡大学日本語日本文学」投稿規程

### 一 投稿資格

- ・ 単著論文は福岡大学日本語日本文学会会員に限る。
  - ・ 共著論文の場合、会員外の者も共著者に含めることができる。
- ### 一 制限字数

- ・ 単著論文は四〇〇字詰め原稿用紙三〇～四〇枚を基準とし、最大五〇枚程度まで許容する。
  - ・ 共著論文は共著者の数や誌面のバランス等を考慮し、そのつど判断する。
  - ・ 資料紹介、翻刻など、一括掲載が望ましい場合は、四〇〇字詰め原稿用紙五〇枚を超過しても許容する。
- ### 一 査読

- ・ 在学生の投稿論文は、指導担当教員が査読し、掲載の基準に満たない場合は、加筆・修正の指導を行う。
- ・ 卒業生の投稿論文は、在学中の指導教員、もしくは現職教員の中で最も専門領域に近い教員が査読を行う。
- ・ 現職教員や元教員の投稿論文は、編集担当教員、もしくは最も専門領域に近い教員が査読を行う。
- ・ いずれの場合も、会員外の専門家に査読を依頼することができる。

### 一 公開

- ・ 掲載された論文等は、原則として電子化してインターネット等を介し公開する。

平成二九年四月二一日 福岡大学日本語日本文学会役員会了承  
令和四年九月一六日 福岡大学日本語日本文学会役員会了承

### 執筆者紹介

永井 太郎 本学教員  
吉浦 律成 本学卒業生  
畑中 佳恵 本学教員  
河野 友希 本学卒業生  
山県 浩 本学教員  
衣畑 智秀 本学教員

### 編集後記

▽「福岡大学日本語日本文学」第三四号をお届けします。  
▽本号には、本学教員の論文四本と卒業生の論文二本を掲載しております。  
▽前号に続き、卒業論文をブラッシュアップした論文が複数投稿されました。社会人として活躍しながら学びを深め、研究成果を発信しようとする卒業生の姿勢を誇らしく思います。在学中から卒業後も指導にあられた先生方、また査読を厳正に実施してくださった先生方、ご協力誠にありがとうございました。  
▽投稿論文のうち掲載に至らなかったものもありますが、大事に育て磨きをかけて、再び投稿されることを期待しています。

▽本年度をもって、山縣浩先生と高橋昌彦先生がご退職なさいます。本学科をまっすぐ支える二本の大黒柱のような両先生のこれまでのご功勞に、心底より感謝申しあげます。本誌をつうじて学科の活況をご覧いただくためにも、皆さま奮ってご投稿ください。

▽本号の編集は畑中が担当いたしました。不備等ございましたら、お知らせください。  
(畑中)

### 福岡大学日本語日本文学 第三四号

二〇二五年 一月一〇日印刷  
二〇二五年 一月一九日発行

編集者 福岡大学日本語日本文学会  
発行者 代表者 永井 太郎

印刷所 城 島 印 刷 株 式 会 社

福岡市中央区白金二丁目九番六号

発行所 福岡大学日本語日本文学会

〒八一四一〇一八〇

福岡市城南区七隈八丁目一九番一号  
福岡大学人文学部日本語日文学科内

## 参考文献

- 宇野和 (2015) 「Twitter における「新しいミ形」」『国文』第123号、p106～94、お茶の水女子大学  
国語国文学会
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 国立国語研究所 (1972) 『国立国語研究所報告44 形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 杉岡洋子 (2005) 「名詞化接辞の機能と意味」『現代形態論の潮流』(大石強ほか編) p.75～p.94、  
くろしお出版
- 鈴木一彦、林巨樹 (1973) 『品詞別日本文法講座4 形容詞・形容動詞』明治書院
- 水野みのり (2017) 「ネット集団語における接尾辞「ーみ」の語基拡張」『思言』第13号、p.167～  
174 東京外国語大学地域文化研究科・外国語学部記述言語学研究室
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 山岡政紀、牧原功、小野正樹 (2018) 『新版 日本語用語論入門——コミュニケーション理論から見た日本語——』明治書院
- ・辞書・辞典類  
『日本国語大辞典』JapanKnowledge Lib (オンラインデータベース) 小学館  
<https://japanknowledge.com> (最終閲覧日: 12月15日)
- 日本語教育学会『日本語教育事典』(1982) 大衆館書店
- ・用例出典  
『NON-NO 12月号』(2023) 集英社  
『ニコラ 11月号』(2023) 新潮社
- ・検索ツール  
X「高度な検索」: <https://twitter.com/search-advanced?lang=ja> (最終閲覧日: 2023年12月19日)  
「朝日新聞クロスサーチ」<https://xsearch.asahi.com> (最終閲覧日: 12月15日)  
「少納言」(KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」)<https://shonagon.ninjal.ac.jp> (最終  
閲覧日: 2023年12月10日)

語基となる形容詞においても拡大が進んでおり、また、従来は語基とすることのなかった他の品詞にも拡大していることが判明した。そして、機能においても、従来の「-め」の機能では説明のできない用例が登場し、従来の機能の特性を利用し、配慮表現としての一面を獲得したのではないかということが考察できた。

## 注

- (1) 『NON-NO 12月号 (2023)』 p.14
- (2) 『NON-NO 12月号 (2023)』 p.52
- (3) 『ニコラ 11月号 (2023)』 p.16
- (4) 『NON-NO 12月号 (2023)』 p.39
- (5) 『NON-NO 12月号 (2023)』 p.30
- (6) 「-め」は形態素の1つであり、語ではない。そのため、派生語を作り出す際には基体となる既存の語が必要である。「大きめ」であれば、形容詞の「大きい」が基体である。「語基」とは語の基となるもののことであり、「大きめ」の「大き」の部分か語基に当たる。
- (7) 西尾 (1972) 『国立国語研究所報告44 形容詞の意味用法の記述的研究』ではものの属性を表す形容詞 (大きい等) と人の属性を表す形容詞 (優しい等) の属性形容詞をどちらも客観的な形容詞として示していたが、森田 (1989) には「客観的にコントロールできる状態の」とついているため、おそらく**ものの属性を表す形容詞**のことだけを言っているものと考えられる。
- (8) 「-め」は二音節の基体を除き、語の語幹 (活用しても変化しない部分) に接続する。漢字で表記できる部分は確実に語幹、もしくは語幹の一部であるため、語幹を見誤らないためにも初めは漢字表記を確認した。
- (9) 「少納言」には検索対象として「Yahoo! 知恵袋」と「Yahoo! ブログ」がある。しかし、この2つは誰でも書き込むことができ、また、校閲等がないため、今回は検索対象から外すこととする。また、「韻文」も文字数等の制約がある特殊な条件下での使用となるため、除外する。
- (10) 「おとなしめ」はシク活用形容詞を語基とするが、朝日新聞上では99件のヒットがあった。人の属性として「従順、温和である。穏やかである。落ち着いている。」(『日本国語大辞典』) という意味でとることができる。しかし、朝日新聞上の1990年代の例では、
  - (1) (前略) 宇都宮市内の各店のセールはややおとなしめだった。(朝日新聞地域面、朝刊、栃木「高齢者増えても商戦は控えめで 宇都宮」1990.09.16)
 のように、「華々しくないこと」「派手でないこと」を表すための例として使用されているため、人の属性の意味ではなく、ものの属性の意味で使用されている。
- (11) 「-め」単体での検索が難しく、「の」「な」「に」「で」「だ」を補っての検索が必要なものは調査②には適さないため、調査対象からは外している。
- (12) 新しい「-め」438語を対象に調べた。検索の妨げとなる語があり、正確な用例数を把握することが困難なものが13語あったため、それらの語は除いている。
- (13) やばいめ1例
- (14) おそらく「心地よい風」と打とうとしての誤字。
- (15) 山岡政紀、牧原功、小野正樹 (2018) より
- (16) 山岡政紀、牧原功、小野正樹 (2018) より

がらも、決して、「大きい」には重なることはないことを表しているのではないだろうか。つまりは、「-め」の対象となるものは語基となる語に性質が寄っているだけで、語基となる語の性質そのものではない、ということである。

先ほどの用例(20)、(21)に戻ると、(20)は明らかに「不味い」場面で「不味め」、(21)は明らかに嬉しい場面で「嬉しめ」が使用されている。説明では「遠回しな表現」という言葉を使用したが、これらは、従来の「-め」の機能の「-め」の対象となるものは語基となる語の性質に寄っているだけで、語基となる語の性質そのものではない」という特性を利用し、あえて「不味め」、「嬉しめ」と使うことによって、「不味い」、「嬉しい」という断言を避けた、ということが考えられる。

### 7.2.2. 配慮表現としての「-め」

前の節で「-め」の付く語は「語基となる語の性質そのものではない」ということを説明した。そして、従来の「-め」の機能では説明のできないものとして、断定する方が自然な場面で「-め」が使用されており、話者自身があえて断定を避けるようにして使用している例を確認した。では、なぜ断定を避けるのか、ということについて、用例を見ながら考えていきたい。

- (23) 今日のテレビがつまらなめなのは受験生を配慮してのことか (2011.01.14)
- (24) 落ち着きたくて入ったカフェや喫茶店に、うるさめの人たちが座ってしまった時の気持ちたるや (2021.12.24)
- (25) 結構可愛めのお弁当ができた…と思うのだが、休ませるか迷ってる (絵文字) 昨日幼稚園でお腹痛くて不機嫌だったって聞いちゃったらさ…。 (2023.12.07)
- (26) ブラックパンサー見てきたけど思ってたよりちょっとつまらなめでした (いや、普通に面白いんだけど) (2018.03.01)

(23)～(26)は、断定する方が自然な場面で「-め」が使用されている例文である。談話においては、聴者に対する意識から配慮表現として文意を変化させない言葉を付け足すことがある。「お言葉に甘えて<sup>(15)</sup>」や「協力はちょっとできかねます<sup>(16)</sup>」などが配慮表現の例として挙げられる。Xは文字ツールではあるが、自身の言葉をリアルタイムで発信し、受け手が不特定多数であるという性質を持っている。(23)、(24)の直接的なワードを使用すると攻撃的になってしまう場面で「-め」を使用して緩和を図っており、皮肉にも取れるような表現になっている。また、(25)、(26)は自慢や否定的な意見を断定せずに緩和したような表現になっている。このように、「-め」の断定しないという特性を用いて、言外の配慮を表しているのではないかということが考えられる。用例を見ていくと、従来の「-め」の機能で説明のできない部分は、配慮表現として使用されている「-め」ではないかということが考察できた。

## 8 おわりに

本稿は「-め」の語基が拡大しているのか、また、「-め」が従来にはない新しい機能を獲得しているのかについて調査、考察を行った。結果として、「-め」の語基は元々

というように言葉を足していかなければならない。しかし、「ーめ」を付けることによって簡単にそのような意を添えることができる。そのため、このような意を添加したい場合に、従来の「ーめ」の接続の制限を緩めることで様々な語に使用が広がっているのではないかと考える。また、第6章の調査で判明した従来とは違う「ーめ」が語基となる語を見ていくと、その語が状態や性質の判断が難しい語であっても使用できるようになっていることが分かる。

(19) 今日は強めに見せたくてわざと真逆の深い色で大人めの服とメイクで行ったけど  
(2023.06.25)

(19)の「ーめ」の対象となる語の「大人」は、それ自体を決定付けるものは非常に曖昧であり、どのような状態であれば、「大人」という性質に近づいているのかななどを視覚等から判断できるものではない。しかし、話者の頭の中にある「大人」像を対象として、それに寄っているということを、「ーめ」を付けて、表すことができる。

## 7.2 新しい「ーめ」の機能

これまで、従来の「ーめ」の機能で説明できる新しい「ーめ」の用例について説明をした。しかし、新しい「ーめ」の用例の中には、従来の「ーめ」では説明のできない用例も存在する。この節では、説明のできない用例にはどのようなものがあるのか、また、それらの用例にはどのような機能がありそうかについて考えていく。

(20) さっき焼いた牛ハラミ超が付くほど美味しくない。(中略) こんな不味めのお肉があるんかって言うくらい美味しくなかった。(2021.10.01)

(21) 記録はおいといて…久しぶりの優勝(絵文字)控えめに言って嬉しめ(絵文字)  
(2023.06.09)

(20)の用例では「超が付くほど美味しくない」と書いているにもかかわらず、「不味いお肉」ではなく、「不味めのお肉」と遠回しな表現になっている。また、(21)も話者にとって優勝は喜ばしいことであるはずが、「嬉しい」という言葉は使わずに「控えめに言って嬉しめ」と「控えめ」という言葉も加え、「嬉しさ」を抑えた表現を使用している。これらの用例は従来の「ーめ」の機能では説明がつかない。

### 7.2.1. 従来の「ーめ」の機能の特性

新しい機能がどのようなものであるのかを考察する前に、従来の「ーめ」の機能の考察をさらに深め、その特性を考えていきたい。そのために、「ーめ」が使用できない場面に焦点を当ててみる。

(22) ?ゾウはアリよりもかなり大きめです。

(22)の例文は、「ーめ」の形を使うことに疑問を感じる例文である。疑問を感じるのは、「ゾウがアリよりも大きい」ことも分かりきっているからではないかと考える。おそらく、「ーめ」を付けて、「ーめ」の対象となるものが語基となる語の性質に寄っている」と示すことができる範囲には制限があり、その範囲を超えて「ーめ」の対象となるものに明らかに語基となる語の性質が認められる場合には「ーめ」は使用できなくなるものと考えられる。「大きめ」は「大きい」に性質が寄っているということを示しな

(16) はライブでどのような席が当たるのかについての投稿であった。「ライブで隣にいた人が少し変わった人だった(そういった席になりやすい)」ということ。「席運ありめ」という言葉で表現している。いずれの例も従来の「-め」の動詞例と同様に連用形形で「-め」に接続している。

#### 6.5.1. 考察

第4章の「a. 用法面」の【従来の「-め」】の規定には、「1、「-め」は形容詞の語幹、動詞の連用形に接続する」と「3、「-め」は形容動詞や副詞には接続しない」と記述されていた。しかし、調査②の調査結果を見ると、形容詞、動詞以外の形容動詞、副詞、名詞にも語基となる語があることが判明した。第5章の調査では形容詞においても語基の拡大が明らかとなった。さらに、この調査から動詞例にも従来の「-め」の語基とは違うものが現れているということが明らかになった。そのため、もともと語基とする品詞(形容詞、動詞)の中でも語基の拡大が起こっており、さらには品詞においても、今までは語基をとることのなかった品詞から語基となる語が出てきているということが言える。これらのことから、「-め」には語基となることのできる語が増える、用法が拡大しているということが言えるのではないかと考察できる。

## 7 新しい「-め」の機能

これまで、第5章、第6章では「-め」の用法拡大について議論してきた。この第8章では、「-め」の機能について検討を行う。従来の「-め」の機能は第4章の「b. 機能面」で確認したが、「比較対象である具体物や具体的な数値、もしくは話者の考える普通やいつもといった抽象的概念を基準として、そこから、「-め」の対象となるものが語基となる語の性質に寄っている、その語の性質の傾向を帯びている」という意を添加することである。新しい「-め」は従来の「-め」の機能をそのまま引き継ぐものと、従来の「-め」の機能の特性を利用し、新たな機能を持たせたものの2つに分かれるのではないかと考える。以下でそれぞれについて具体的な用例を出しながら説明を行う。

### 7.1 従来の「-め」の機能を引き継いだもの

(17) かなり欲しめだけど買うかって言われたら特に買わない (2023.10.26)

(18) 誕生日だったからちょっと良いめのご飯 (2023.10.30)

(17) の用例は話者は「かなり欲しい」ものがある。しかし、それは「買うほどの欲しさ」には到達していない。「欲しい」という気持ちに寄ってはいるが、「買うほどの欲しさ」には到達していないということを「欲しい」に「-め」を付けることで表している。(18) の用例は誕生日という特別な日に最高級ではないが、普段の食事(もしくは普段の夕食)よりも少しグレードの高い食事をするということ「良いめのご飯」と表現しているのではないかと考えられる。

(17) や (18) の用例は「-め」を使わずに表現しようとする、「かなり欲しいという方向に気持ちは寄っているけれども」や「普段のご飯よりも少し豪華で値段の高い」

◇ 形容詞 (295例)

やばめ/ヤバめ (75)<sup>(13)</sup>、悪め (47)、デカめ (20)、可愛め/かわいめ (15)、激しめ (14)、優しめ (13)、怖め (11)、忙しめ (11)、ゴツめ (7)、厳しめ (6)、ちっちゃめ (6)、幼め (5)、しょっぱめ (3)、柔め (3)、涼しめ (3)、うるさめ (3)、エモめ (3)、ちゃらめ/チャラめ (3)、グロめ (3)、かっこよめ/かっこいいめ (3)、ウザめ (3)、しんどめ (3)、易しめ (2)、温かめ (2)、珍しめ (2)、いいめ/良いめ (2)、酸っぱめ (2)、切なめ (2)、だるめ/ダルめ (2)、寂しめ、詳しめ、むずかしめ、暑め、淡め、おっさいめ、黄色め、気強め、無いめ、痛め、寒め、細かめ、鋭め、えぐめ、えらめ、ぶ厚め、嬉しめ、回りくどめ、酷め、切れ長め、眠め

◇ 形容動詞 (86例)

ガチめ/がちめ (26)、綺麗め/きれいめ/キレイめ (23)、簡単め (10)、シンプルめ (7)、静かめ (3)、地味め (3)、無理め (3)、ハードめ (3)、華奢め (2)、シリアスめ (2)、ダークめ (2) 慎重め、健全め、好きめ、清楚め、有名め、複雑め、最悪め、最高め、頑丈め、鮮やかめ、和風め、メジャーめ、ハスキーめ、ルーズめ、レアめ、セクシーめ、コンパクトめ、マイルドめ

(13) 寝起き最悪めだったけど、元気出た仕事頑張る (2023.06.30)

(14) 今朝はいい感じに心地よいか<sup>(14)</sup> 風もあって、窓際最高めです (2023.06.30)

(13) は「最も悪い」、(14) は「最も良い」ということを表す形容動詞が使用されており、「-め」の機能と反発しあうような性質を持つ語とも接続する例が見つかった。

◇ 副詞 (46例)

しっかりめ (9)、ゆっくりめ (7)、あっさりめ (7)、すっきりめ/スッキリめ (7)、しっとりめ (3)、ゆったりめ (2)、のんびりめ (2)、まったりめ (2)、パッチリめ、カッチリめ、ぐったりめ、ガッチリめ、ガッツリめ、キッチリめ、さっぱりめ、まったりめ、ヒリヒリめ、ムチムチめ、キリッとめ

◇ 形容動詞・名詞 (9例)

えっちめ/エッチめ (3)、リアルめ (2)、ポジティブめ、ナチュラルめ、アホめ、オーバーめ、小柄め

◇ 名詞 (14例)

上め (2)、大人め (2)、タイトめ (2)、アップめ (2)、ベージュめ、ゴールドめ、おねえさんめ、スランプめ、褐色め、プラスめ、(良さめ)

→例外 (1例)

(15) ほんの、少しだけ。肩幅減った気がする！ 他の女流さんより全然でかいけどね。後なんか姿勢良さめだったし。(2023.06.30)

形容詞「良い」に接続するのであれば、「良いめ」となるはずであるが、この用例は形容詞「良い」を一度、「-さ」で名詞化したものに「-め」を付けている例である。

◇ 動詞 (5例)

捨てめ、ありめ、砕けめ、絞りめ、伸ばしめ

(16) わりとそういう席運ありめだから集中力鍛えないと (2023.06.30)

詞の名詞修飾の形であり、「な」は形容動詞の連体形の活用語尾である。3つ目は、「あざとめポーズ」のように「-め」と被修飾名詞が複合しているものである。

・調査②へと繋げるためには、被修飾名詞にも共通のものがあることが望ましい。しかし、それぞれの被修飾名詞は語基である形容詞の意味によって現れるものが全く異なる。「あざとめ」であれば「ポーズ」、「汚め」であれば「おっさん / おじさん」といったように、それぞれで現れやすい被修飾名詞は全く違い、どの語にも共通して現れる被修飾名詞は存在しなかった。その中で用例は少数ではあるが、いくつかの語で共通する被修飾名詞が2つ見つかった。「危なめ」「しんどめ」「懐かしめ」「難しめ」「優しめ」「凛々しめ」の6語に共通して登場した「感じ」(8例)、「危なめ」「可愛め」「詳しめ」「懐かしめ」の4語に共通して登場した「やつ」(9例)である。

□で(46例)

・「で」は後接の語の品詞が共通していないため、調査②には適していないものと判断する。

□に(119例)

・「に」は「詳しくに解説しております」や「詳しくに書いています」のように、ほとんどの用例で後ろに動詞が来ている。名詞修飾と同様に、調査②へと繋げるためには、共通の動詞があることが望ましい。最も登場の多い動詞は「書く」であるが、その登場のほとんどは「詳しく」であり、複数の語には共通していない。その中でも、いくつかの語で共通して登場する動詞が2つ存在した。「あざとめ」「可愛め」「汚め」「しんどめ」「詳しめ」「優しめ」の6語で共通して登場した「なる」(8例)と、「可愛め」「汚め」「詳しく」「難しめ」「凛々しめ」の5語で共通して登場した「する」(9例)である。「する」は「する」で使われている例よりも、「して」や「しよう」、「した」等の用例が多かった。

#### 6.4 調査方法 (調査②)

調査①の結果、補足をもとに、調査②に使用できそうな助詞、述部は、名詞修飾の「のやつ」「なやつ」「の感じ」「な感じ」の4つ、「なの」「だった」「だから」「だけど」「です」、「に」に動詞を付けた形の「になる」「にし」の2つで計11個である。これに「め」をプラスしたワードを、検索ワードとする。これらを調査①と同様に、期間を2023年の6月30日までに設定して検索をし、「最新」から遡り100用例ずつを収集する。

#### 6.5 調査結果 (調査②)

調べた1100用例のうち、従来の「-め」を除いたものを以下で品詞ごとに「-め(用例数)」で記述している。用例数の記述がないものは1例のものである。品詞の分類に疑問が出たものは『日本国語大辞典』で検索をかけ、品詞を確認の上、分類した。『日本国語大辞典』の記述で「形容動詞」的な意味、「名詞」的な意味のどちらも持ち、用例からはどちらかが判断できないものについては「形容動詞・名詞」という分類を設け、分類している。調査によって判明した「-め」の語基となる品詞は形容詞、形容動詞、副詞、名詞、動詞の5つである。

するために、一定期間内で形容詞の新しい「-め」<sup>(11)</sup>を検索にかけ、用例の多い語を調査する。期間は2023年4月1日から2023年の6月30日までの3ヶ月間に設定し、3ヶ月間で100例以上の用例が見つかった語を本稿では使用頻度の高い語と判断する。そして、その中から活用形容詞5語とシク活用形容詞5語の計10語を選び出す。

選定した10語をX上で検索にかける。この際、調査に再現性を持たせるために、期間を2023年の6月30日までに設定して、X上の「最新」から遡り100用例ずつを収集する。そして、収集した用例の助詞、述部を記録、分類し、共起しやすい助詞、述部を明らかにする。

### 6.3 調査結果 (調査①)

X上で3ヶ月間に用例数が100例を超えた語は、72語あった<sup>(12)</sup>。その中から活用形容詞は「あざとめ」「危なめ」「可愛め」「汚め」「しんどめ」の5語、シク活用形容詞は「詳しめ」「懐かしめ」「難しめ」「優しめ」「凛々しめ」の5語を選定した。選定した10語をX上で検索し、収集した1000用例の助詞、述部の記録、分類した結果は以下の通りである。

表2 「-め」と共起する助詞、述部

		あざとめ	危なめ	可愛め	汚め	しんどめ	詳しめ	懐かしめ	難しめ	優しめ	凛々しめ	総計
名詞修飾	の	54	23	34	48	19	26	80	27	36	21	368
	な	0	34	11	16	12	6	10	12	6	18	125
	の	11	5	10	2	7	2	2	1	6	21	67
言い切り		4	11	6	13	30	2	6	11	5	14	102
なの		0	1	4	4	5	1	0	5	0	4	24
だ	だった	0	1	3	1	2	0	0	3	3	1	14
	だから	0	2	3	0	0	1	0	0	3	4	13
	だけど	2	1	3	3	4	0	0	3	2	1	19
	その他	0	2	2	1	1	1	0	2	4	3	16
です		1	4	1	1	10	4	0	11	1	4	37
で		7	2	9	2	3	2	0	6	11	4	46
に		19	4	11	3	2	53	0	6	19	2	119
その他		2	10	3	6	5	2	2	13	4	3	50
総計		100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	1000

調査により判明した「-め」と共起しやすい助詞、述部の中で、調査②のために補足が必要なものに関しては以下で説明をする。

□ 名詞修飾 (560例 の : 368、な : 125、の : 67)

・ X上の「-め」の名詞修飾には3つのパターンが存在した。1つ目は、「あざとめのポーズ」のように名詞の名詞修飾の形である。2つ目は、「あざとめなポーズ」のように形容動

聴いて落ち着かせる。(2023.10.19)

(11) 今日も朝からやや鼻水がズルズルです。目も痒め。(2023.11.28)

(12) とりあえず両足の小指ぶつけて、両手の親指に痛めの逆剥けできる呪いかけとくね (2023.11.30)

(9)～(12)のような用例も確認することができた。こちらも同様に従来の「-め」には確認することのできない語である。さらに、(9)、(10)は人の感情を表す形容詞であり、(11)、(12)は人の感覚を表す形容詞であり、どちらも主観で判断されるもので、客観的形容詞ではない。これらの例も従来の「-め」の規定では説明のつかない例になるのではないかと考える。

### 5.3.1. 考察

調査から X 上の「-め」は従来の「-め」と比べると、語基となれる形容詞の語数が増えているということが明らかになった。また、第4章で確認した「a. 用法面」の【従来の「-め」】の2、4の反例となる用例も多く発見されている。語数の増加に加え、従来の「-め」の規定では説明できない用例が多く存在することから、「-め」は形容詞において、語基の拡大が起こっていると言えるのではないかと考える。そのため、この調査で判明した「-め」の語基となれる形容詞から従来の「-め」を除いたものを本稿では形容詞の新しい「-め」として定義することとした。

## 6 品詞の拡大

第5章では形容詞における「-め」の語基の拡大についての調査を行った。本章では、従来の「-め」は形容詞の語幹、動詞の連用形に語基とするとされている「-め」がほかの品詞を語基とすることがないのかについての調査を行う。

### 6.1 調査方法

調査方法は水野(2017)を参考にする。水野(2017)では、「-み」の品詞の拡大の調査は大まかに2段階に分かれている。第1段階では、調査(本稿の第5章の調査)した形容詞の新しい「-み」から12語を無作為に選出し、「Twitter 検索」を行う。それぞれの語を50用例確認し、共起しやすい助詞、述部を判明させる。第2段階では、判明した「-み」と共起しやすい助詞、述部に「み」を足した形で検索を行い、形容詞以外の品詞が語基となっている用例がないかを確認する。水野(2017)の場合は、「みある」「みを感じる」「みがある」の3つのワードで検索を行っていた。

本稿では、調査①「「-め」と共起しやすい助詞、述部を調査する」と調査②「定めた検索ワードを用いて用例を集め、他の品詞を語基とするものがないかを調べる」を行う。

### 6.2 調査方法(調査①)

第5章で判明した形容詞の新しい「-め」から10語を選定し、X上で検索にかける。共起しやすい助詞、述部を調べるための検索ワードはできるだけ使用頻度の多いものに

動詞を語基とする例は存在するが、森田（1989）には、「数はいたって少ない」と記されており、実際に文献に記載されている例も非常に少ない。動詞を語基する例に関しては、『日本国語大辞典』、森田（1989）、『日本語教育事典』に3つの文献に例が挙げられている「ひかえめ」、「おさえめ」、「上がりめ」、「下がりめ」、「落ちめ」の5つを本稿では従来の「-め」として扱う。

### 5.3 調査結果

調査対象となる形容詞は698語であった。しかし、検索の妨げになる語が多く、用例の確認が困難である語（例：清め 動詞「清める」の連用形が名詞化したもの等）が27語あったため、これらの語は検索不能例として除外した。そのため、検索対象となる形容詞は671語である。この671語の形容詞の「-め」の形をX上で検索し、1例でも用例を確認できたものは「-め」の用例として記録する。結果を表にまとめると以下のようになった。

表1 形容詞のメ形のX上の有無

	ク活用	シク活用	総計
X上で用例があるもの	294	189	483
X上で用例のないもの	120	68	188
総計	414	257	671

X上で用例を確認することができた形容詞の「-め」の形は、形容詞671語中483語（約72%）である。従来の「-め」はク活用、シク活用合わせて45語であるため、「-め」の語基となる形容詞は単に数字だけ見ると増えていることが分かる。また、第5章の「a. 用法面」で、従来の「-め」はシク活用形容詞には接続しない、ということを確認していた。本稿で従来の「-め」と定めた語にもシク活用形容詞を語基とするものは45語中の1語しかなかった。しかし、調査結果を見ると、188語のシク活用形容詞の「-め」の形がX上では確認されている。また、より具体的に用例を見ていくと、

- (6) ちょっとそそっかしめのキャラとかかわいくないわけないよね (2022.02.05)  
 (7) 長男が元々だらしなめなんだけどその事を注意しても全然聞かなくて夫は最近怒鳴らなくなったんだけどいきなりブチギレ (2022.02.15)  
 (8) 今日のせんせー優しめの人でよかったー。(2019.01.31)

(6)～(8)のような用例を確認することができた。上記の用例は従来の「-め」に存在しない「-め」の形である。第4章の「a. 用法面」では「-め」は「客観的にコントロールできる状態の客観的形容詞に接続する」ということを確認している。人の属性を表す形容詞も客観的形容詞ではあるが、「客観的にコントロールできる状態の」形容詞ではない。そのため、従来の「-め」の規定では説明のつかない例と言えるのではないかと考える。また、

- (9) 楽しめの夢3連続で見たんだけど流星に忘れた。(2023.11.22)  
 (10) 悲しい時ってとことん悲しくなるのが自分なりの解決法だからあえて悲しめの曲

(篤い、熱い、暑い、厚い)のような同音異義の語でない限りは同一の語として扱い、どちらかの表記で用例が確認できれば、その語の「-め」の用例が確認できたものとする。すばしこい、すばしっこいなど表記に揺れがあるものについては、こちらも同一の語として扱い、漢字表記で用例を見つけることができない、もしくは元々ひらがなの表記のみの語についてはどちらかの表記で用例が確認できれば、その語の「-め」の用例が確認できたものとする。また、二音節形容詞（濃い、酸い等）は「形容詞の終止形+め」を検索ワードとする。

マ行五段活用動詞の仮定形、命令形（例：楽しむ 〈仮〉楽しめば、〈命〉楽しめ）とマ行下一段活用動詞の活用形（例：広める 広めない、広めます、広める、広めるとき、広めれば、広めよ）は「-め」の検索をする上で妨げとなる。そのため、検索する際には、動詞の例と区別するために「-め」に「の」「な」「で」「だ」「に」の順に後接し用例の有無を確かめる。また、上記以外でも検索の妨げになる語があるものについては同様の検索方法をとることとする。

## 5.2 従来の「-め」の具体的な語

宇野（2015）では従来の「-み」を規定するために『日本国語大辞典 第二版』に立項されているかを確認し、また、立項されていたものを「少納言 KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス』」で検索し、用例が出なければ衰退した語として除くという方法をとっていた。しかし、『日本国語大辞典』に「-め」の語は立項されていない。そのため、本稿では、「朝日新聞クロスサーチ」を使用し、調査でX上に存在した形容詞の「-め」の形（482語）が朝日新聞上に存在するのかどうかを確かめることとする。検索は「記事」を対象とし、「縮約版」は対象としていない。用例収集の際にはインタビューなどの会話文の中で使われているものは除いている。また、短歌、俳句等で使われているものも除いた。検索ワードは5.1.1.での規定と同様とする。

### 5.2.1. 従来の「-め」一覧

朝日新聞上で用例を確認できた「-め」を、先行研究の手順に基づき、「少納言 KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス』」（以下「少納言」）<sup>(9)</sup>で検索にかける。「少納言」で用例が0件であるもの、また、どちらでも用例が確認できても、「朝日新聞クロスサーチ」と「少納言」の用例が合わせて10件に達さないものは従来から使用されていると判断するには用例が不十分であると考え、こちらも従来の「-め」とは認めないと本稿では判断する。結果として、以下の45語が本稿での従来の「-め」であると判断した。

ク活用：明るめ、浅め、暖かめ、厚め、熱め、甘め、粗め、薄め、大きめ、多め、遅め、重め、堅め、硬め、辛め（からめ）、軽め、きつめ、暗め、濃いめ、渋め、少ない、狭め、高め、小さめ、近め、強め、遠め、長め、苦め、早め、速め、低め、広め、深め、太め、古め、細め、丸め、短め、安め、柔らかめ、ゆるめ、弱め、若め

シク活用：おとなしめ（大人しめ）<sup>(10)</sup>

して、そこから、「-め」の対象となる語（「大きめの鞆」であれば「鞆」のこと）が語基となる語の性質に寄っている、その語の性質の傾向を帯びる」という意を添加することではないかと考えられる。

これまでの要点を以下にまとめると、

- ・「-め」は形容詞や動詞を語基とするため、**語基となれる品詞には制限がある**。また、**語基となれる形容詞の性質にも制限がある**。
  - ・「-め」の機能は、語に「比較対象である具体物や具体的な数値、もしくは話者の考える普通やいつもといった抽象的概念を基準として、そこから、「-め」の対象となる語が語基となる語の性質に寄っている、その語の性質の傾向を帯びる」という意を添加することにある。
- という2点が挙げられる。

## 5 形容詞における語基拡大

この章から調査を進めていく。宇野（2015）の調査に参考に、形容詞において「-め」の語基の拡大が起きているのかを調査する。

### 5.1 調査方法

調査対象となる形容詞の選定には、宇野（2015）の調査で使用されていた『品詞別日本文法講座4 形容詞・形容動詞』の「古今形容詞一覧」を使用する。本稿では一覧の凡例③を参照して、近代語のみを対象とする。調査の流れは、初めに調査対象となる形容詞の「-め」の形をX上で検索し、用例があるかを確認する。1例でも用例のあるものは「-め」の例として記録する。次にX上で確認された用例と従来の「-め」の用例を比較し、語基となれる形容詞の数、性質に違いがあるのかを調べる。最後に調査をもとに「-め」の語基となれる形容詞が拡大している、つまり、形容詞において従来とは違う新しい「-め」の用法が生まれていると言えるのかについての考察を行う。

#### 5.1.1. 検索ワード

検索ワードは参考とした『品詞別日本文法講座4 形容詞・形容動詞』に漢字の指定があるものは、可能な限りその表記に従い、「漢字表記の形容詞語幹+め」を優先で検索するものとする<sup>(8)</sup>。難読漢字（例：然気無い〈さりげない〉等）はこちらで事前に別の漢字、もしくはひらがなに直してから検索する。また、漢字で用例が極端に少ない場合や見つけられなかった場合には、漢字の表記を一部ひらがなへ変換したもの（例：薄ら寒め→うすら寒め）やひらがな、カタカナ（例：気障っぼめ→きざっぼめ→キザっぼめ）での検索など可能性のある表記を一通り試すものとする。ひらがなのみの表記のものは「ひらがな表記の形容詞語幹+め」を検索ワードとする。

1つの漢字に複数の異義の読みがある（例：忙しい〈いそがしい、せわしい〉等）場合には、漢字ではどちらの語が使用されているかの判別が難しいため、ひらがなでの検索とする。1つの語に複数の漢字が当てられている場合（例：円い、丸い）は、あつい

- 2、「-め」はク活用の形容詞に接続し、シク活用の形容詞には接続しない。
- 3、「-め」は形容動詞や副詞には接続しない。
- 4、「-め」に接続する形容詞は、客観的にコントロールできる状態(ものの属性を表す)の客観的形容詞が多い。

従来の「-め」はこの1～4の要点に沿ったものである必要があると考える。

## b. 機能面

### ○「-め」の機能に関する文献記述

『日本国語大辞典』(JapanKnowledge Lib:「目」)

形容詞の語幹、動詞の連用形などに付いて、そのような度合い、加減、性質、傾向の意味を添える。

森田(1989)『基礎日本語辞典』

「め」は、「集合時間よりやや早めに駅へ行く」「少し小さめに刻む」「いくぶん柔らかめに煮る」「ちょっと濃いめに味付け」「成長期だから体より大きめの服を買った」「火を少し弱めにして、とろ火でゆっくり煮しめます」

の例に見られるように、対象や事柄との適合度が完全にぴったりとならぬように、“幾分ある傾向を帯びる、もしくは帯させる”。その結果、対象との適合度に余裕・許容の幅が生ずる。“幾分……だ”“やや……な状態”の意を添えることになる。僅かな傾向ゆえ、「やや」とか、「少し」「ちょっと」「幾分」「ほんの僅か」/「かなり」等の副詞を添えることが多い。(p.465)

多くも少なくもない。ちょうどよい状態(ゼロ)からはずれて、どちらかというやや多いほうに傾いた状態が「多め」である。中庸(ゼロ)ではなく、プラスかマイナスのどちらかへと幾分寄っているのである。そのため、「め」の付く形容詞は、「多い/少ない、大きい/小さい、長い/短い、高い/低い、強い/弱い、早い/遅い、太い/細い、きつい/ゆるい、熱い/ぬるい、厚い/薄い、濃い/薄い」のように、プラス、マイナスの対義関係にある語が多い。(p.1122～1123)

『日本語教育事典』

普通の程度よりも前項部分の性質、傾向、度合いを多く持つ意を表す。「どちらかと言えば……と言える程度」の意。(p.422)

森田(1989)で挙げられている用例、「集合時間よりやや早めに駅へ行く」は比較対象として具体的に集合時間という数字がある。対して「ちょっと濃いめに味付け」では具体的な比較対象はなく、おそらく話者の考える「普通やいつも」を比較対象とした上での「濃いめ」の判断なのではないかと考える。このように考えると、森田(1989)での中庸(ゼロ)は「比較対象としての具体物や具体的な数値」もしくは「話者の思う普通やいつもといった抽象的概念」のどちらでも良いということが分かる。

上記の文献の記述を見ていくと、従来の「-め」の機能は、語に「比較対象である具体物や具体的な数値、もしくは話者の考える普通やいつもといった抽象的概念を基準と

### 3.3 調査に使用する SNS

宇野 (2015)、水野 (2017) はどちらも共通して調査に Twitter を使用している。Twitter は SNS の 1 つであり、140 字の字数制限の中で、自身の伝えたいことを自由に記述し、世界に発信することができるツールである。先行研究では「Twitter」であるが、Twitter は 2023 年の 7 月に「X」へと名称を変更している。そのため、先行研究の調査の説明では「Twitter」、本稿の調査の説明では、「X」という名称を使用する。X は有料プランや投稿（ツイート→ポスト）等の名称変更以外に Twitter から大きく仕様変更はしていない。そのため、本稿では「Twitter」と「X」は同一のものとして扱っている。

検索には X の「高度な検索」を使用する。「高度な検索」とは、特定の文字列を検索することで、今まで投稿されたものの中から、その文字列を含んだ投稿を調べることができるものである。また、地域、アカウント、日付などを絞って検索をかけることや、文字列の完全一致等の検索方法も可能である。本稿の調査では「文字列の完全一致」と「日付（期間）指定」の機能を使用した。本稿で「X 上で検索」といった場合には、「文字列の完全一致での検索」を示している。検索をすると、「話題のツイート」「最新」「ユーザー」「メディア」を選択することができるが、本稿の調査では「最新」を選択している。X から収集した用例については、本稿で引用する際には文末に投稿年月日を付している。

## 4 従来の「-め」

新しい「-め」の調査を行うためには、従来の「-め」がどのようなものであるのかを定義付ける必要がある。そのため、この章では従来の「-め」を「用法」、「機能」の 2 つの面から検討していくこととする。

### a. 用法面

#### ○「-め」の用法に関する文献記述

『日本国語大辞典』（JapanKnowledge Lib：「目」）

形容詞の語幹、動詞の連用形などに付いて、そのような度合い、加減、性質、傾向の意味を添える。「細め」「長め」「控えめ」「おさえめ」など。現代では、形容詞の連体形に付けていう場合もある。「細いめ」「長いめ」など。

森田 (1989) 『基礎日本語辞典』

形容詞は、多く客観的にコントロールできる状態の客観的形容詞（ク活用）<sup>(7)</sup>の語幹に付く。シク活用には付かないようである（「恥ずかしめ」は意味が異なる）。形容動詞や副詞には付かないから、「静かめ」とか「じょうずめ」「ゆっくりめ」は誤用。 (p464～465)

上記の文献の記述をまとめると、以下ようになる。

#### 【従来の「-め」】

1、「-め」は形容詞の語幹、動詞の連用形に接続する。

・宇野 (2015)

宇野 (2015) では、本来、語の生産性が低いはずである「-み」が SNS 上ではさまざまな形容詞を語基としていることに着目し、Twitter 上で「-み」の語基となる形容詞の調査を行った。形容詞のリストを用意し、それらの形容詞を「-み」の形にしたものを Twitter 上で検索にかけ、語基となる形容詞の異なり語数と述べ語数を調査をした。結果として、「-み」の語基となる形容詞の範囲は拡大しており、また、使用頻度も年を追うごとに高まっていることから、「-み」が従来とは違う、新しい用法を獲得しているということが明らかになった。さらに、Twitter 上での「-み」の用法拡大と使用頻度の高まりがなぜ起こっているのかということ、集団語の観点から考察を行っている。「-み」の「語の使用者が“実際に”感じている感覚」を表すことのできる機能が、若者集団語では好まれない形容詞言い切りの断定を避け、さらに、「一個人の感覚」と示し、受け手を不快にさせない、という効果を持つのではないかということが述べられている。

・水野 (2017)

水野 (2017) は宇野 (2015) の研究の流れを引き継ぎ、「-み」の語基拡大について調査を行なった。水野 (2017) と宇野 (2015) の違う点は、宇野 (2015) では、「-み」が主に形容詞を語基とすることから、形容詞に重点をおいて調査を行っていたが、水野 (2017) では、これまでの先行研究に形容詞以外の品詞の語基についての言及がないことを指摘し、品詞における語基の拡大に着目したという点である。新しい「-み」と共起しやすい助詞と述部を調べ、その語を使い、検索を行うことによって、形容詞以外の品詞にも「-み」の語基となれるものがあることを明らかにした。

### 3.2 調査の流れ

本稿では宇野 (2015) と水野 (2017) の 2 つの先行研究の調査を参考にし、用法拡大や新たな機能についての調査を行っていく。調査は用法面と機能面の 2 つの視点から進めていく。

- **視点 1 (用法面)**：形容詞、また品詞において語基が拡大しているのか、また、拡大をしているとすれば、どのように拡大しているのか。

→視点 1 の調査で判明した結果や用例と従来の「-め」を比較し、従来の「-め」には当てはまらないものを新しい「-め」とする。

- **視点 2 (機能面)**：従来の「-め」の機能では説明できない用例がないか、あれば、新たにどのような機能を持つようになっているのかについて考察をする。

以下に調査、考察の視点と流れをまとめている。

であるのかについて、影山（1993）と杉岡（2005）の記述を確認していく。

・影山（1993）1.3 語形成の基本的概念（p.13）

伝統的な形態論では、**複合**（compounding）、**派生**（derivation）、および**屈折**（inflection）が語形成の3つの主要なタイプである。（中略）単一の形態素のみで成る語（ねこ、くるま、つくえ）を**単純語**と呼び、複数の形態素で構成される語を（すなわち、複合、派生、ないし屈折を受けた語）を**合成語**（complex words）と総称する。合成語を作る際に土台となり、独自の意味のまとまりを持つ要素を基体（base）と呼び、**基体**に付着することによって初めて機能する要素を**接辞**（affix）と呼ぶ。（中略）

次に、派生語というのは、「不健康」のような**接頭辞**（prefix）、あるいは「健康的」のような**接尾辞**（suffix）を伴うもので、これら接辞はそれ自体では独立せずなんらかの基体に付着する。

・杉岡（2005）

語形成における接辞の役割は、大きく分けて二つある。第一には文法的な機能で、屈折接辞は、時制（walk-ed）や数（book-s）といった統語的素性を標示することがその主たる役割である。さらに、派生接辞の一部が担う品詞の転換（A → N: kindness, V → N: teach-er）も接辞の文法的機能である。接辞の第二の役割は、派生語の意味を特徴づけるという意味的機能で、これはもっぱら派生接辞が担っている。例えば否定の接尾辞（un-happy）や可能をあらわす接尾辞（read-able）など、派生接辞はそれが付くベースの語の意味を変化させる。

影山（1993）と杉岡（2005）の記述をまとめると、

- ・接辞とは、語形成の際に派生語を作るものであり、中でも「健康的」の「的」のように基体の後ろに付くものは接尾辞と呼ぶ。
- ・接尾辞は単体では意味や機能を持たず、基体に付着して初めて意味や機能を持つ。
- ・接辞は文法的機能と意味的機能を持ち、派生接辞は文法的機能の1つとして、品詞の転換を行う。

となる。つまり、「-め」はそれ自体に意味は持たず、基体に付着することで機能を持つものであり、また、付着することで、「大きい靴」→「大きめの靴」（名詞修飾の形が違う）のように品詞を名詞に転換するという機能を持つ接尾辞であると言える。

### 3 先行研究と調査

この章では、「-め」について何を問題とし、どのように調査をするのかについて、似た性質を持ちながら、研究が多く進められた語である「-み」に触れながら示していく。

#### 3.1 接尾辞「-み」の先行研究

以下の2つの先行研究は、「-み」の用法拡大を明らかにする調査と機能の考察を行なったものである。

# 接尾辞の語基拡大と意味

## —— 接尾辞「め」について ——

河 野 友 希

### 1 はじめに

本稿では「大きめ」「甘め」「重め」などに使用されている「-め」について考察する。

- (1) 今日は黒い腕時計に合わせて、久しぶりに細めのデニムをはいてみた<sup>(1)</sup>
- (2) きれいめシルエットのアウトターは、少し大人に見せたいデートの日の強い味方!<sup>(2)</sup>
- (3) 基本黒多めでギャルめです。<sup>(3)</sup>
- (4) 淡いトーンのツイード素材と控えめな広がりが上品。<sup>(4)</sup>
- (5) 存在感と厚みのあるワンピースには、ピタめニットをレイヤードしてバランスよく着膨れを回避。<sup>(5)</sup>

(1)～(5)は、2023年に発刊されたファッション誌の「-め」の用例である。上記の例文では「-め」は形容詞、形容動詞、名詞、動詞と幅広い品詞に接続している。また、「ピタめ」といった聞き馴染みのない「-め」の用例も存在している。前に若者の間で「-み」が「可愛み」や「つらみ」、「眠み」といった新しい用法で使われていることが話題となっていた。

「-め」と「-み」は、「名詞化接尾辞である」、「主に形容詞を語基<sup>(6)</sup>とする」という2つの点で共通している。「-み」は本来、「重み」や「甘み」といった特定の語としか結びつかない接尾辞である。しかし、SNS上で「可愛み」や「眠み」といった新しい用法での「-み」が登場すると、急速に用法や使用頻度を増やしていった。「-み」は用法の拡大が話題に上り、研究が多くなされたが、「-め」は「-み」と似た性質を有していながらも、新しい用法に言及した研究を見つけることができなかった。上記の用例を見ると、「-め」にも何かしらの変化が起きていることは明らかである。また、「-み」と性質は似ていながらも、「重み」と「重め」では明らかに違いがあり、「-め」を調査することによって、「-み」では見られなかった用法拡大、機能拡大の動きを見ることができるのではないかと考えた。そのため、本稿では、「-み」の先行研究を参考にしながら、「-め」の用法拡大（主に語基の拡大）と機能拡大が起こっているのかを問題とし、調査を進めていくこととする。

### 2 「-め」とは

「-め」は接尾辞と呼ばれるものである。では、その「接尾辞」とはどのようなもの

(50)

別表-II A 金港堂版「いちご姫」表現；敬体内訳

品 詞	全 表 現	文 末						句 末				
		敬 体				非 敬 体	合 計	敬 体			非 敬 体	合 計
		デ ス	マセ ン デシ タ	マ ス	小 計			デ ス	マ ス	小 計		
動 詞	1,360	62	40	729	831	411	1,242	0	26	26	92	118
形容詞	147	14	0	0	14	124	138	0	0	0	9	9
形容動詞	35	8	0	1	9	25	34	0	0	0	1	1
名容詞	32	7	0	0	7	23	30	0	0	0	2	2
名 詞	771	148	0	1	149	567	716	2	0	2	53	55
代名詞	22	3	0	0	3	18	21	0	0	0	1	1
副 詞	49	2	0	0	2	43	45	0	0	0	4	4
感動詞	18	0	0	0	0	18	18	0	0	0	0	0
連体詞	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
合 計	2,435	244	40	731	1,015	1,230	2,245	2	26	28	162	190

別表-II B 金港堂版「いちご姫」表現；敬体×テンス内訳

	品 詞	合 計	敬 体				非 敬 体			
			ル	タ	そ の 他	小 計	ル	タ	そ の 他	小 計
			形	形		計	形	形		計
文 末	動 詞	1,242	17	814	0	831	152	60	199	411
	形容詞	138	4	10	0	14	57	9	58	124
	形容動詞	34	0	9	0	9	1	0	24	25
	名容詞	30	1	6	0	7	0	0	23	23
	名 詞	716	9	139	1	149	1	1	565	567
	代名詞	21	1	2	0	3	0	0	18	18
	副 詞	45	0	2	0	2	0	0	43	43
	感動詞	18	0	0	0	0	0	0	18	18
	連体詞	1	0	0	0	0	0	0	1	1
合 計	2,245	32	982	1	1,015	211	70	949	1,230	
句 末	動 詞	118	0	26	0	26	19	0	73	92
	形容詞	9	0	0	0	0	4	0	5	9
	形容動詞	1	0	0	0	0	0	0	1	1
	名容詞	2	0	0	0	0	0	0	2	2
	名 詞	55	0	2	0	2	0	0	53	53
	代名詞	1	0	0	0	0	0	0	1	1
	副 詞	4	0	0	0	0	0	0	4	4
	合 計	190	0	28	0	28	23	0	139	162

別表-I A 都の花版「いちご姫」表現；敬体内訳

品 詞	全 表 現	文 末						句 末				
		敬 体				非 敬 体	合 計	敬 体			非 敬 体	合 計
		デ ス	マセ ン デシ タ	マ ス	小 計			デ ス	マ ス	小 計		
動 詞	1,448	80	49	847	976	364	1,340	0	46	46	62	108
形容詞	139	19	0	0	19	115	134	0	0	0	5	5
形容動詞	35	12	0	2	14	21	35	0	0	0	0	0
名容詞	27	8	0	0	8	18	26	0	0	0	1	1
名 詞	710	169	0	1	170	485	655	4	0	4	51	55
代名詞	22	4	0	0	4	17	21	0	0	0	1	1
副 詞	44	4	0	0	4	35	39	0	0	0	5	5
感動詞	19	0	0	0	0	19	19	0	0	0	0	0
連体詞	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
合 計	2,445	296	49	850	1,195	1,075	2,270	4	46	50	125	175

別表-I B 都の花版「いちご姫」表現；敬体×テンス内訳

	品 詞	合 計	敬 体				非 敬 体			
			ル 形	タ 形	そ の 他	小 計	ル 形	タ 形	そ の 他	小 計
文 末	動 詞	1,340	52	916	8	976	122	52	190	364
	形容詞	134	6	11	2	19	52	11	52	115
	形容動詞	35	1	12	1	14	0	0	21	21
	名容詞	26	2	6	0	8	0	0	18	18
	名 詞	655	25	141	4	170	1	2	482	485
	代名詞	21	1	3	0	4	0	0	17	17
	副 詞	39	0	4	0	4	0	0	35	35
	感動詞	19	0	0	0	0	0	0	19	19
	連体詞	1	0	0	0	0	0	0	1	1
合 計	2,270	87	1,093	15	1,195	175	65	835	1,075	
句 末	動 詞	108	0	46	0	46	11	1	50	62
	形容詞	5	0	0	0	0	3	0	2	5
	形容動詞	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	名容詞	1	0	0	0	0	0	0	1	1
	名 詞	55	0	4	0	4	0	0	51	51
	代名詞	1	0	0	0	0	0	0	1	1
	副 詞	5	0	0	0	0	0	0	5	5
	合 計	175	0	50	0	50	14	1	110	125

都の花版：2,270例中850例37.4% 金港堂版：2,245例中731例32.6%

- (8) 都の花版の文末敬体の「その他」15例は、すべて「デショウ(カ)」「マショウ(カ)」である。これは意味を考えず「(よ)う」が下接すれば、一律に「その他」=ル形とタ形の対立がない分類としたためである(非敬体は動詞未然形+「(よ)う」の用例)。意志・勧誘ならともかく推量であればル形に分類できる。

ただ、金港堂版では、文末敬体の「その他」は、都の花版からそのまま引き継いだ1例だけである(1章[2]項・用例①「有るわけ<sup>あ</sup>で無いものでしやうか」第20)。これ以外の都の花版14例は、金港堂版で表現のなくなる2例を除くとすべて文末非敬体「その他」(体言止め・助詞止めなど)に改められる。

- (9) 後述の附属形式と同じく特定名詞も便宜的な名称である。山県(2024a)は「兜菊」の体言止めを論じたもので、金港堂版と比較する際、該当する4語が末尾に頻繁に現れるため、取り集めてまとめ、この名称で特立した。今後、「いちご姫」の体言止めを論じる場合には名詞述語を精査し、類出語を洗い出して特定名詞を見直す。
- (10) 山県(2022b)では、文中敬体の修辭的な用法である「中止法・反復前件」が都の花版・金港堂版とも後半の第22～38のまとまりに集中する旨を述べた(注(19)参照)。同じく体言止め類A類～D類の現れ方をまとまりごとに集計した。多くは全編にわたって現れるものの、D類連体形ナ止めには、次の如く偏りが見られる。

都の花版：文末は、第1～12のまとまりに用例の存しないまとまりが2カ所(第5・11)に散見されるだけで、ほぼすべてのまとまりにナ止めが連続する。しかし、第13～38のまとまりでは、第18に2例、第33に1例だけである。また形容動詞・名容詞の8例は第1～10のまとまりに限られる。句末にナ止めの用例は見られない。

金港堂版：文末は、第1～12のまとまりに例の存しないまとまりが3カ所(第5・8・11)に散見されるだけで、ほぼすべてのまとまりにナ止めが連続する。しかし、第13～38のまとまりでは、第18に1例、第33に1例だけである。また形容動詞・名容詞の8例は同じく第1～10に限られる。句末は、第20のまとまりに名容詞ナ止め1例が見られる(用例⑫)。

結局、文末の場合、両版とも連体形ナ止めは、第1～12のまとまりに都の花版27例中24例・金港堂版25例中23例が集中する。

当時の新しい表現形式である[～ガ・モノヽ、シカシ～]が第22～38のまとまりに見られず、一方、修辭的な「中止法・反復前件」が集中する。このことから、後半に大島氏の「文語調への逆行」「口語からの乖離」(大島(1984)14頁)が顕著でないかと考えた。しかし、このような前半への連体形ナ止めの集中は予想外である。或いは、連体形ナ止めの捉え方を改めるべきかもしれない。

【最終稿2024年9月9日】

都の花 全表現=2,445例 文=2,273例・句=172例

金港堂 全表現=2,435例 文=2,246例・句=189例

その後、用例を精査することによって、両版の文・句の用例数を訂正し、本稿で最終的な値を示す。

また同論注(5)で都の花版の表現数を「2,446」とした(453頁)。これは単なる誤記で、本稿の如く「2,445」が正しい。

また32章で述べる表現末尾のル形・タ形・「その他」の3分類も山県(2024a)(2024b)以降見直しに努めた。このため、これらの金港堂版の値は、前2稿と僅かに異なる。

- (4) 都の花版の表現が金港堂版で削除される66例は、38のまとまりで偏りが見られる。

第1～25のまとまりでは、途中1・2のまとまりで削除例が見られないことがある程度で、ほぼすべてで連続して削除される。それも第23は13例、第10は9例、第9は7例など、特定のまとまりに集中する。しかし、第26～38のまとまりでは、第33に僅か1例見られるだけで、他12のまとまりには削除例が見られない。

- (5) 都の花版の文末が金港堂版で文中となる85例のうち、表現に変更が見られる51例は、第1～30のまとまりに限られ、第31～38のまとまりには見られない。一方、補助符号だけの変更は、第2～38のまとまりほぼすべてに見られる。

注(4)の金港堂版での削除例と同じく38のまとまりに存する前半と後半の違いである。後述の注(8)と合わせると、1章[2]項の大島氏の引用、第29・30以降で「句読点の種類以外はほとんど変えられていない」の如く、特定のまとまりを境にしてその前後で対照的な様相を示す訳ではなさそうである。

- (6) 本稿では都の花版・金港堂版それぞれを独立したものと捉え、各々の文末・句末における敬体・非敬体のあり方を個別に数量化した。程度は異なるが、ここに示した如く金港堂版で文末・句末とも敬体の減少傾向は顕著である。しかし、表現を一对一で捉える次稿で全体的に捉えたと、対応する表現で都の花の非敬体が金港堂版で敬体に改められることがある。即ち、金港堂版で敬体化が全く見られない訳ではない。現時点では、次の用例[A]㉔を確認している。

1例は、山県(2022)注(2)で示した両版とも文中で、都の花の非敬体「此類で、」が金港堂版で敬体「此類で、」に改められる場合である。

㉔ a いちごの血気の勤王心の奴隷となつたのもまづ此類で、すなはち最初の養育と境遇とが盲の妄想を一種の信に象つた元でした。／ 都・第29

㉔ b いちごの血気の勤王心の奴隷となつたのもまづ此類です、すなはち最初の養育と境遇とが盲の妄想を一種の信に象つた元でした。／ 金・第29

もう1例は、都の花版の文中非敬体が金港堂版で文末敬体に改められる場合で、表-1の最下段「文中→文末」142例の1例である。

㉔ a そのま、何やらの神に封込められた鯨のやうに場處をも去らず坐つてしまつた、その坐つたの八想像をやしなふためでした。／ 都・第4

㉔ b そのま、何やらの神に封込められた鯨のやうに場處をも去らず坐りました。／ 金・第4

金港堂版での非敬体化の傾向が揺らぐ数ではない。しかし、著しい非敬体化の中での希有な例である。何らの意図に基づく結果であると考えられる。

- (7) 句末全体に対する「ます」の割合などは、次の如くである。

都の花版：175例中46例26.3% 金港堂版：190例中26例13.7%

文末全体に対する「ます」の割合などは、次の如くで、句末での減少幅が大きいことが知られる。

## ◇参考文献・引用文献

- 大島瑞穂 (1983) 「山田美妙研究 ―小説文体の変遷―」『国文』59  
 ――― (1984) 「山田美妙研究 ―『いちご姫』から常体文体へ―」『東京学芸大学附属高等学校研究紀要』21
- 小野正弘 (2004) 「デス・マス体の文章 ―山田美妙―」『国語論究 第11集・言文一致運動』明治書院
- 木川あづさ (2010) 「尾崎紅葉『金色夜叉』を中心とした文語体作品の文体について ―文末表現を手がかりに―」『実践国文学』77
- 木谷喜美枝 (1969) 「山田美妙に於ける言文一致」『国文目白』8
- 十川信介校訂 (2011) 『岩波文庫 いちご姫・蝴蝶他二篇 解説』岩波書店
- 中里理子 (2002) 「尾崎紅葉の言文一致文 ―「多情多恨」を中心に―」『上越教育大学研究紀要』21-2
- 服部 隆 (2011) 「二葉亭四迷『あひゝき』初訳・改訳における文章展開 ―接 (Clause) を用いた文体分析の試み (三) ―」『上智大学国文学科紀要』28
- 山県 浩 (2018) 「山田美妙『いちご姫』敬体文末の特徴」『福岡大学日本語日本文学』27  
 ――― (2022) 「山田美妙『いちご姫』の文中敬体 (上) (下) ―都の花版から金港堂版への改稿の実態―」『福岡大学人文論叢』54-2・3  
 ――― (2024a) 「山田美妙『兜菊』の文体 ―体言止めの実態―」『福岡大学日本語日本文学』33  
 ――― (2024b) 「山田美妙『兜菊』の文体 ―最後の敬体小説として―」『福岡大学人文論叢』55-4
- 『山田美妙集』編集委員会 (2012) 『山田美妙集 第2巻 小説 (二) 改題』臨川書店

## 注

- (1) 山県 (2024b) では、動詞を中心とする用例に基づき、「兜菊」で顕著な [敬体 = タ形・非敬体 = ル形] という傾向を前提にして、叙述スタイルの違いが敬体と非敬体に関係しているのではないかと述べた。
- 即ち、敬体タ形は「物語として本来のあり様、昔あったことを語り手が聞き手に語って聞かせる働きを一般的に持つ」、非敬体ル形は「過去の事柄を振り返って語る物語の中で叙述を今現在の出来事として述べ立てる働きを一般的に持つ」(1015頁)とした。
- ただ、これは敬体であることとタ形であることが一体化して、敬体の絞り込まれた「兜菊」での捉え方である。「いちご姫」の考察では、これを踏まえつつも別の捉え方がないかを考え、個々の用例を検討する必要がある。
- (2) 山県 (2018) では、都の花版の白胡麻点につき、金港堂版の句点に対応する場合は文末、金港堂版の読点に対応する場合は文中とした。しかし、本稿では、都の花版の白胡麻点は、先の実験 (3) の如く段落末尾に来る場合を除き、対応如何に関わらずすべて文中とした。このため、対象とする表現数が100例以上減じた。これは、山県 (2018) では敬体での両版の対応を重視したためである。その後は改め、山県 (2018) 以外ではすべて本稿で示した原則で統一した。
- (3) 山県 (2022) 3章 [2] 項では対象とする各単位の用例数を次の如く記した (430頁)。

例えば、山県（2024a）で述べた如く「兜菊」は体言止め類の割合が文末で高い一方、句末で割合が低い。都の花版と金港堂版を比較すると、金港堂版での割合は文末で微増、句末で微減し、「兜菊」のあり様に向かっているようにも見える。しかし、金港堂版の体言止め類の値は文末・句末とも「兜菊」のそれに遠く及ばない。

体言止め類の分類で中核となる名詞・代名詞による体言止めが7割以上を占める点で3資料は共通する。しかし、都の花版・金港堂版は、附属形式の語幹止めが約1割程度を占める点で共通する。金港堂版でこれが減じ、「兜菊」で1割を占める形容語サ止めが増加する兆候は認められない。

附属形式、それと連続的な特定名詞がともに多く、一定の割合を有することも都の花版と金港堂版に共通する。同時にこれは「兜菊」と異なる「いちご姫」の文体的特徴である。

体言止めでないものの、「いちご姫」両版に特徴的な形容詞連用形、名詞＋格助詞・副助詞は、後続の述語を省略しただけの表現である。その多さは、表現末尾を類型化させている附属形式・特定名詞と同じく、「兜菊」に比べて「いちご姫」の表現末尾を修辭的に工夫の足りない、整理されていないものと感じさせる。

[3]「いちご姫」の都の花版から金港堂版への改稿の特徴は、大島氏によって「デシタ」「マシタ」の削除、体言止めなどの増加による敬体の絞り込みであることが明らかにされた。

しかし、詳細は十分でない。この点に関して本稿では文末・句末、テンス・品詞などの観点から非敬体化のあり様を記述し、両版を比較した。更に大島氏が増加するとされる特殊形のうち、体言止めについて検討を行い、「兜菊」との違いから特に金港堂版「いちご姫」の特徴を示した。

今後は、本稿でも一部は取り上げたものの、数量化した全体相では見落としてしまう都の花版と金港堂版の一致・不一致の実態につき、表現を一对一で対比させ、表現に即して捉え、非敬体化・敬体維持の言語的条件・文脈的条件はどのようなものかなどを明らかにする。その上で、可能であれば、美妙の区別意識の下、何を意図して都の花版の敬体を金港堂版で非敬体に改めたのか、また都の花版の敬体を金港堂版で敬体のまま維持したのかなどに言及したい。

同じく詳細が不明なままである前半と後半の改稿状況の違いは、注で触れるに留まった。併せて種々調査・考察を進め、別に稿を設けたい。

## 5. 別表の説明

論末に付した別表-I・IIの詳細は、下記の如くである。

別表-I A・II A 「いちご姫」都の花版・金港堂版の、各文末・句末における敬体・非敬体のあり様につき、末尾を構成する文節の品詞ごとに用例数を示したもの

別表-I B・II B 「いちご姫」都の花版・金港堂版の、各文末・句末における敬体・非敬体、テンス形式につき、末尾を構成する文節の品詞ごとに用例数を示したもの

討すると、同じ「いちご姫」ながら都の花版と金港堂版に差が見られた。それは金港堂版が「兜菊」のあり様に文体的に近接する方向性の現れである。勿論、都の花版と金港堂版に差が見られず、両版と「兜菊」に差が存する、言わば「いちご姫」に固有な側面も認められた。

[21] 都の花版と金港堂版に一定の差が存し、金港堂版が「兜菊」寄りである事象は、文体で基本となる敬体・非敬体のあり方である。

「兜菊」は最後の敬体作品として「敬体の表現は極限まで絞り込まれている」(山県(2024b) 1013頁) 点を最大の文体的特徴とする。この点で金港堂版での改稿で「兜菊」への方向性が顕著なのは、金港堂版における非敬体化の程度の著しさである。

文末全体では都の花版から金港堂版で8%近く敬体の割合が減少し、金港堂版の値は「兜菊」と3%程度の差しかなくなる。句末全体は更に著しく、句末敬体の存しない「兜菊」に向け、金港堂版で都の花版の約半分の割合になる。

文末における「です」「ます」の用法は、都の花版で13種見られるが、金港堂版で6種が消滅する。更に「兜菊」では金港堂版の終止形「デス」「マス」を含む用法5種及び両版に存した「ませんでした」が見られなくなり、敬体は「デシタ」「マシタ」に限定される。

以上の如く、金港堂版を中間形態にして量と内容の両面で都の花版から「兜菊」に向けて敬体が絞り込まれる。

このような敬体の絞り込みは、体言止め類で言及した特定名詞・附属形式でも確認できる。これらは「兜菊」で用例数が多くないため、両版と「兜菊」の差は明瞭でないところが存するものの、都の花版と金港堂版を比べると、明からに金港堂版で体言・語幹止めが増加し、「です」下接が減少する。

敬体の割合だけでなく、用例数でも差が認められる。「兜菊」に用例の存しない句末敬体は、都の花版50例、金港堂版28例で、全表現に対して2.0%・1.1%の如くともに小さい値ながら、減少する。これも3資料間で進行する非敬体化の一例である。

以上の如く、非敬体化=敬体の絞り込みの点で都の花版と金港堂版に明確な差が認められ、金港堂版は、都の花版から「兜菊」への変更の中間段階にある。またこの謂いにおいて都の花版は、金港堂版から「兜菊」への変更の前段階にある。

テンスでは、文末敬体において都の花版から金港堂版にかけてル形・「その他」が減少し、タ形が増加する。これは「兜菊」において文末敬体はタ形に限られる兆候である。この点でも金港堂版は中間段階にある。しかし、非敬体では文末・句末ともに都の花版時点ですでに圧倒的な「その他」、例外的なタ形という状態で「兜菊」のあり様が認められる。

[22] 敬体・非敬体やテンスなど、言わば、基本的な文体の枠組み(典型的な文体)において都の花版・金港堂版に差が見られ、金港堂版は「兜菊」寄りのあり様を示した。

しかし、本稿で扱った体言止めなど、各作品らしさ、言わば個性的な文体を構成する表現は、「兜菊」と別作品である「いちご姫」の文章らしさのためか、都の花版と金港堂版に差が殆ど見られない。前項の諸現象とは対照的に両版と「兜菊」の差が大きい。

如く形容語にも両版に6例ずつ見られる（都：形容動詞4例・名詞4例、金：形容動詞3例・名詞5例）。

3資料ともに多い用法でないため、体言止め全体に占める割合は、殆ど変わらない（都の花版522例中27例5.2%、金港堂版621例中26例4.2%、cf. 兜菊236例中11例4.7%）。

両版は、連体形ナ止めどうして対応することが殆どである。例外となるのは、次の2例である。用例⑬は都の花版の後続の体言「事で」が省略されたため、金港堂版でナ止めになった場合、用例⑭は都の花版で「ことを言うので」などが省略された文中のナ止めが、金港堂版でいちごの思いを説明する後続の一節が省略されたため、句末のナ止めとなった場合である。いずれもナ止めの表現は、用例⑬ではより含みのある表現、用例⑭ではより詠嘆的になり、次の問いかけ「いかな～」に感情が途切れることなく続く。

- ⑬ a それに窟子<sup>うろこ</sup>ハ中の<sup>なか</sup>警固<sup>けいこ</sup>役！あの顔<sup>かほ</sup>で浅黄<sup>あさぎ</sup>の素袍<sup>すほう</sup>でも着<sup>き</sup>たなら<sup>さぞ</sup>無<sup>み</sup>かしそれも見<sup>み</sup>栄<sup>え</sup>が有<sup>あ</sup>りさうな<sup>こと</sup>事で…／都・第6
- ⑬ b それに窟子<sup>うろこ</sup>ハ中の<sup>なか</sup>警固<sup>けいこ</sup>役、あの顔<sup>かほ</sup>で浅黄<sup>あさぎ</sup>の素袍<sup>すほう</sup>でも着<sup>き</sup>たなら<sup>さぞ</sup>無<sup>み</sup>かしそれも見<sup>み</sup>栄<sup>え</sup>は有<sup>あ</sup>りさうな。／金・第6
- ⑭ a 猶胸<sup>なほむね</sup>にハ一<sup>いち</sup>々<sup>たゞ</sup>こたへる<sup>こと</sup>言葉<sup>ことば</sup>のはしへ、<sup>さすが</sup>ことに「流石<sup>りゅうせき</sup>の譯<sup>わけ</sup>もある」とは<sup>めんえう</sup>面妖<sup>めんえう</sup>な—<sup>な</sup>さア<sup>さ</sup>聞<sup>き</sup>き正<sup>ただ</sup>しくなりました。／「いかな譯<sup>わけ</sup>でおじやる？」都・第20
- ⑭ b 猶胸<sup>なほむね</sup>には一<sup>いち</sup>々<sup>たゞ</sup>こたへる<sup>こと</sup>言葉<sup>ことば</sup>のはしへ、<sup>さすが</sup>ことに「流石<sup>りゅうせき</sup>の譯<sup>わけ</sup>もある」とは<sup>めんえう</sup>面妖<sup>めんえう</sup>な—<sup>な</sup>／「いかな譯<sup>わけ</sup>でおぢやる？」金・第20

#### 4. おわりに

[1] 本稿は、文中敬体を扱った山県（2022a）（2022b）と併せ、表現末尾を対象とすることによって美妙が金港堂版「いちご姫」で最終的に目指した敬体の言文一致体とはどのような文章であったかを捉える研究の第一段階に位置する。

具体的には、雑誌に掲載された初出の都の花版「いちご姫」、改稿されて刊行された金港堂版「いちご姫」それぞれの表現末尾のあり様を捉え、両版を比較して、金港堂版の文体を都の花版との対比によって数量的な観点から捉えることを目的とした。このように数量的に全体相を捉え、比較する点で第一段階に位置する。

この場合、山県（2024a）（2024b）において最後の敬体作品「兜菊」の文体的特徴を金港堂版との比較に基づいて捉えたことを受け、金港堂版から「兜菊」にかけての様々な絞り込みが都の花版と金港堂版の間にも見られるのか、見られる場合、どのようなものかなどを通して金港堂版の性格付けを行った。

[2] 金港堂版と「兜菊」は、細部において違いが見られるものの、文体としての枠組みでは同じ敬体後期作品として共通することが多い。

また山県（2024a）で傾向①～⑦としてまとめ、本稿で1章[3]項に示した金港堂版と「兜菊」に共通する傾向は、都の花版でも概ね認められた。

このように基本となる文体の枠組みにおいて3資料が共通性を有する一方、詳細に検

cf.兜 菊 (24例) :  $\phi = 13$ 例54.2%、「です」下接 = 2例8.3% …

用例数の少ない「兜菊」は対象外にすべきかもしれないが、割合では3資料間で語幹止めが増加し、「です」下接が減少するなど、敬体の絞り込みが認められる。また金港堂版はやや都の花版寄りながらも都の花版と「兜菊」の中間に位置する。

表現全体に占める割合は、都の花版2,445例中151例6.2%、金港堂版2,435例中144例5.9%、「兜菊」762例中24例3.1%の如く両版と「兜菊」の差がやや大きい。附属形式と先の特定名詞を合わせた用例数が表現全体に占める割合は、都の花版2,445例中316例12.9%、金港堂版2,435例中330例13.6%、「兜菊」762例中43例5.6%となる。両版で全表現の1割少々ながら、「兜菊」に対しては倍の値である。この点で特定名詞・附属形式は「兜菊」に対して「いちご姫」らしい文体を形作る。

[52] 附属形式の持つ表現性につき、一部の例に基づいて考察する。

用例⑨⑩は、連続した場面で、いちご姫が屋敷の庭にいたところ、人の声がするので、外に出ると、知り合いの葵典侍が雑兵たちに拉致されかかっている。用例⑨は声に引き寄せられ、用例⑩は拉致される気配に耳をそばだてる。用例⑨⑩aの都の花版は、最初に「見たいばかりでした」といちごの心理を説明し、次に激しい動作を「蹴散らす聲ばかり」と附属形式の語幹止めにして緊張感を出そうとする。

一方、用例⑨⑩bの金港堂版は、最初に「見たいばかり」の如き非敬体化による附属形式の語幹止めによって思いの発露にして、次に「蹴散らす音」と体言止めにして緊張感を高める。更に用例⑨で「あらびさせましやうに」→「あらびやうに」、用例⑩で「目を凝らしました。しかし、たゞ〜」→「目を凝らす、が、たゞ〜」という非敬体化が加わり、よりスピーディーな展開になって一連の出来事が目の前で起こっているように感じられる。この用例⑨⑩での都の花版と金港堂版の対応からは、附属形式や敬体は、説明的な表現として末尾を持って回った、重い感じにするため、写実的な動きの描写や主観の表出にそぐわない表現であると言える。

⑨ a その聲のする方へと行きました。行つたのは別の子細でも無く、小君が話した辻君でも有るか、それが見たいばかりでした。まだ熱を冷まさぬ草の息、あ、絹の頬をあらびさせましやうに。／都・第5

⑨ b その聲のする方へと行きました。行つたのは別の子細でも無く、小君が話した辻君でも有るか、たゞそれが見たいばかり。まだ熱を冷まさぬ草の息、あ、絹の頬もあらびやうに。／金・第5

⑩ a 「心づよい女、まだ腕くか。」／人殺か、腕くかとは。いちごは猶耳を立て、目を凝らしました。しかし、たゞ草を蹴散らす聲ばかり。／「丹波、足を。」都・第5

⑩ b 「心づよい女、まだ腕くか!」／人殺か、腕くかとは。いちごは猶耳を立て、目を凝らす、が、たゞ草を蹴散らす音。／「丹波、足を。」金・第5

[6] D類連体形ナ止めを体言止めとすることには異論があるかもしれないが、準体法の文末用法と捉えると一種の体言止めである。<sup>(10)</sup>

前項の附属形式(やう・さう)では「〜な」に波下線を施して示した。他に表-2の

な名付けながら、具体的な形式を示して実態を提示することによってレットルだけの一人歩きを防ぐ。

**C類**は、金港堂版で用例数が多く、「兜菊」との違いの一つであった。体言止め全体に占める割合は、都の花版（522例中55例）・金港堂版（621例中65例）の如くともに10.5%である。「兜菊」は13例5.5%に過ぎない（表-2参照）。体言止め類の枠組みにおける両版と「兜菊」の違いの一つである。

[51] 附属形式11種は、具体的には次の如くである（ $\phi$ は語幹止め、※を付した値は句末の用例数を示す）。

都の花版は11種151例、金港堂版は11種144例である（「兜菊」は6種24例）。

◇都の花版

や う=55例： $\phi$  (14) (1)<sup>\*</sup>・でした (22)・な (14)・です (1)・だ (1)・に (1)・で (1)

ばかり=30例： $\phi$  (16)・でした (10)・か (2)・です (1)・で (1)

ほ ど=16例：でした (15)・で (1)

だ け=11例： $\phi$  (3) (2)<sup>\*</sup>・でした (4)・に (1)・か (1)

わ け=7例： $\phi$  (6)・です (2)

さ う=15例： $\phi$  (5)・な (5)・でした (2)・に (1)・で (1)・なものを (1)

た め=6例： $\phi$  (3)・でした (2)・です (1)

ま ま=3例： $\phi$  (2)・でした (1)

くらい=4例： $\phi$  (1)・でした (2)・に (1)

つもり=3例： $\phi$  (1)<sup>\*</sup>・でした (1)・で (1)<sup>\*</sup>

は ず=1例： $\phi$  (1)

◇金港堂版

や う=52例： $\phi$  (15) (1)<sup>\*</sup>・でした (21)・な (12)・だ (1)・に (1)・で (1)

ばかり=26例： $\phi$  (16) (1)<sup>\*</sup>・でした (7)・で (1)・か (1)

ほ ど=14例： $\phi$  (1)・でした (13)

だ け=12例： $\phi$  (6) (2)<sup>\*</sup>・でした (2)・に (1)・か (1)

わ け=9例： $\phi$  (9)

さ う=15例： $\phi$  (5) (1)<sup>\*</sup>・な (5)・でした (2)・に (1)・なものを (1)

た め=5例： $\phi$  (3)・でした (2)

ま ま=3例： $\phi$  (3)

くらい=4例： $\phi$  (1)・でした (2)・に (1)

つもり=3例： $\phi$  (1)<sup>\*</sup>・でした (1)・で (1)<sup>\*</sup>

は ず=1例： $\phi$  (1)

これら11種の附属形式の用法のうち、**C類**となる語幹止め（ $\phi$ ）の他、「です」下接例をまとめると、次の如くである。

都の花版（151例）： $\phi$  = 55例36.4%、「です」下接 = 62例41.1% …

金港堂版（144例）： $\phi$  = 66例45.8%、「です」下接 = 50例34.7% …

cf.兜 菊 (19例)；名詞止め11例57.9%・「です」下接6例31.6% …

ただ、金港堂版から「兜菊」にかけての絞り込みは徹底さを欠く。「兜菊」でこれら特定名詞が少ないことが関係するのかもしれない。

[4] B類は、形容語(形容詞・形容動詞・名容詞)が関わる体言止めで、B1類はこの語幹に接辞「さ」が下接した表現、B2類は語幹止めの表現である。

「兜菊」はB1類がA類の次に多いことが特徴で、C類が次に多い金港堂版とは枠組みの点での違いの一つとなる。

都の花版は金港堂版と殆ど変わらず、体言止め全体(522例)に占める割合は、B1類20例3.8%、B2類24例4.6%、計44例8.4%である(表-2参照；金港堂版621例；B1類24例3.9%、B2類31例5.0%、計55例8.9% cf.「兜菊」236例；B1類25例10.6%、B2類14例5.9%、計39例16.5%)。ただ、都の花版から金港堂版にかけ、「兜菊」を目指して大幅に増加する訳ではない。

なお、B1類のうち、サ止めは、文末全体に対して都の花版2,270例中19例0.8%、金港堂版2,245例中23例1.0%である。木川(2010)に尾崎紅葉の雅俗折衷体4作品「伽羅枕」「三人妻」「男ごゝろ」「心の闇」における「形容詞・形容動詞+さ」の用例数が見られる。全文数に占める割合は0.9%~2.2%(同79頁)で、両版と同程度である。

値は示されないが、中里氏に「三人妻」では、「おもしろさ」「うれしさ」「手ごわさ」など、形容詞を名詞化したものが目立ち、用言の終止形ではなく体言止めにして余情をもたせるという旧文体が色濃い(中里(2002)766頁)との指摘がある。「いちご姫」両版は言文一致体ながら、サ止めに関して古風な面を有することになる。ただ、「兜菊」は文末532例中24例4.5%の如く更にサ止めが多い(B1類25例中1例はミ止め)。

なお、都の花版のサ止め・「さ+です」は金港堂版でサ止めで対応することが一般的である。しかし、用例⑧は、例外的な対応である。金港堂版で都の花版にない「むさくろしい」という形容詞が加えられ、前文が「見ぐるしさ」とサ止めであるにも関わらず、付加した形容詞をまたサ止めにする。没落して貧しい暮らし向きを一家の屋敷の様子を通してより直接的に表現するための改稿であろう。「～と思はずむさくろしい。」とせず、サ止めを繰り返したのは、第2の冒頭第1・2文としてより印象付けようとする意図があったと考えられる。この結果、用例⑧bは金港堂版24例のサ止めで唯一の連続使用となる。

⑧ a もとより作りは書院。しかしその見ぐるしさ。禁裡に比べて矢張りと悟るものゝ、ただ聞いて、たゞ見てこれが何うして公卿——公卿も公卿、辨どのとまで言はれる人の——書院と思はれまじやう。／ 都・第2

⑧ b もとより作りは書院。しかしその見ぐるしさ。禁裡に比べて矢張りと悟るものゝ、ただ聞いて、たゞ見てこれが何うして公卿——公卿も公卿、辨どのとまで言はれる人の——書院と思はれぬむさくろしさ。／ 金・第2

[5] C類は、山県(2024a)(2024b)以来の本稿固有の体言止めで、そもそも附属形式を立てること自体に問題があるかもしれない。

更に[31]項に示した特定名詞と連続的で違いを明確にしていない。しかし、便宜的

それでも都の花版の10%半ばの値は、美妙の敬体前期4作品（小野（2004）171頁：5.4%～11.8%）を上回り、紅葉の雅俗折衷体作品（木川（2010）79頁：「三人妻」16.4%・「心の闇」14.6%）に等しい（山県（2024a）4章〔4〕項参照）。

[31] 山県（2024a）では、表現末尾に頻出するため、「体」「事」「もの」「様子」の4語を特定名詞と称して取り出し、その全体相を示した。これらは、「兜菊」に少なく、金港堂版に多く、その体言止めの特徴となっていた。<sup>(9)</sup>

都の花版も金港堂版と同じく用例数が多い（表-3参照）。即ち、都の花版では4語162例で、全表現の名詞711例に対して22.8%を占める。これは、金港堂版186例24.1%に近く、「兜菊」19例8.0%の倍以上である。

例えば、「体」で検討すると、両版が体言止めどうしで対応する場合が多い。しかし、都の花版の「名詞+です」が金港堂版で「です」の省略される場合の他、用例⑦の如く金港堂版で別表現に改め、新たに「体」の体言止めにする例も見られる。文中に「體」があつて繰り返しになるものの、金港堂版では厭わず非敬体化が進められている。

- ⑦ a 姫はまだ物思ものおもひにとぞゝれて居る體ていで、鞆まやは手に持つて居ながら指ゆびの使つかひ方が平常つねでは有りません。／ 都・第2
- ⑦ b 姫はまだ物思ものおもふにとぞゝれて居る體ていで、鞆まやは手に持つて居ながら指ゆびの使つかひ方が平常つねでは無い体。／ 金・第2

用例⑦は該当しないが、これら4語でも体言止めと「です」下接の現れ方に差が認められ、次の如く金港堂版で非敬体化が進行する。

都の花版（162例）：名詞止め83例51.2%・「です」下接53例32.7% …

金港堂版（186例）：名詞止め109例58.6%・「です」下接45例24.2% …

表-3 特定名詞；内訳

		体	事	もの	様子	合計
都の花版	名詞止め	13 (2)	35	22	13 (1)	83 (3)
	デシタ・デス等	6 (2)	35 (1)	11	1	53 (3)
	ダ・ダラウ	0	2	0	0	2
	デ	1	2	0	0	3
	助詞類	0	14	7	0	21
	計	20 (4)	88 (1)	40	14 (1)	162 (6)
金港堂版	名詞止め	17 (2)	44	32	16 (1)	109 (3)
	デシタ・デス等	5 (2)	33	6	1	45 (2)
	デアラウ	0	0	1	0	1
	ダ・ダラウ	0	2	0	0	2
	デ	1	1	0	0	2
	助詞類	0	16	11	0	27
計	23 (4)	96	50	17 (1)	186 (5)	
兜菊	名詞止め	6 (2)	2	0	3	11 (2)
	デシタ	0	2	2	2	6
	ヂャ	0	1	0	0	1
	ダラウ	0	0	1	0	1
	計	6 (2)	5	3	5	19 (2)

※（ ）内は、内数で句末の用例数を示す。

形式は、モダリティの形式や名詞述語と一部で重なるところがある。しかし、厳密なものではなく「兜菊」「いちご姫」で多用される形式に基づいて便宜的に定めた。多く形式名詞・副助詞などの語幹が「です・だ・な」などを伴って末尾の述語を構成する。この点で形容動詞・名容詞と同じような働きをする。D類は、連体形準体法の末尾用法で、質的に体言止めである。

[2] 体言止め類は、非敬体「その他」にしか見られない。そこで、文末非敬体・句末非敬体別に「その他」全体に対してこれら体言止め類が占める割合などを示すと、次の如くである。

都の花版：文末835例中478例57.2%・句末110例中44例40.0%

金港堂版：文末949例中574例60.5%・句末139例中47例33.8%

cf.兜 菊：文末237例中202例85.2%・句末192例中34例17.7%

割合の点で「兜菊」は文末で最も高く、句末で最も低く、対照的である。都の花版に対して金港堂版は文末で微増、句末で微減である。「兜菊」のあり様に向かっているように見える。ただ、このように金港堂版は「兜菊」寄りながら、割合の差は大きく、都の花版に近い。

[21] 品詞ごとに体言止め類の割合を比較すると、金港堂版と「兜菊」は、文末の動詞・形容詞で差が大きく、「兜菊」の方で高かった（山県（2024a）4章 [31] 項参照）。

都の花版と金港堂版は、文末の場合、差があっても全体の用例数の少ない形容動詞で、7%程度都の花版の方が高いだけである。特定の品詞で差が特に大きくなることはない。句末の場合、用例数の多い動詞・名詞に限ると、名詞で約5%都の花版が高い程度である。

[22] 体言止め類5種では、金港堂版・「兜菊」ともA類名詞止めが全体の7割以上と圧倒的に多いものの、これに継ぐのは、それぞれ1割程度で金港堂版はC類、「兜菊」はB1類と異なる。

都の花版は、金港堂版と同傾向である。それぞれ体言止め類全体に対して最も多いA類は396例75.9%（金475例76.5%、cf. 兜173例73.3%）、次のC類は55例10.5%（金65例10.5%、cf. 兜13例5.5%）の如くほぼ同じ割合である。「兜菊」に多いB1類は20例3.8%に留まり、金港堂版と変わらない（24例3.9%）。金港堂版からすると、都の花版に対して「兜菊」に特徴的なB1類が増加し、C類が減少する訳ではない。

以上の如く、体言止め類の基本的なあり方は、都の花版と金港堂版に差は存しない。両版と「兜菊」の差の方が圧倒的に大きい。

[3] A類は名詞・代名詞による止めで、一般的な体言止めである。3資料とも「その他」全体に対して75%内外の割合を占め、体言止め類の中核をなす。

1章 [3] 項で金港堂版・「兜菊」に共通する傾向⑦として「名詞止めに限定すると、その割合は美妙の敬体前期の言文一致体作品や二葉亭四迷・尾崎紅葉の言文一致体作品に比べて高い」と述べた。都の花版の全文末（2,270例）に対してA類の文末例（358例）の占める割合は15.8%である。「兜菊」の26.7%に及ばないものの、金港堂版の19.5%をやや下回る程度である。

[52] 句末非敬体は、用例がともに動詞・名詞に偏るなど、両版に用法上の大きな違いは見出せない。

名詞は、文末と同じく体言止めが多数を占める一方、助詞止めが一定数見られる。動詞は、句末として次の会話文に流れ込むため、連用形中止や接続助詞の下接が9割以上を占める。この動詞の用法の偏りは「兜菊」でも認められる。

なお、形容詞で、用例④の如き連用形止めが都の花版1例から金港堂版4例に増加するのが目を引く。1例はそのまま都の花版から金港堂版に引き継がれたもので、他3例は用例⑥の如く都の花版の文末述語が省略された結果、連用形が句末化したものである。非敬体化とともに切れ目なく会話文に流れ込む。

⑥ a 事実<sup>じつさう</sup>左様<sup>さよう</sup>で無<sup>な</sup>くて疑<sup>うたが</sup>はれてはほとんど言<sup>いひわけ</sup>譯<sup>わけ</sup>をするのも馬鹿<sup>ばか</sup>々々<sup>々々</sup>しく思<sup>おも</sup>はれま  
した。／「どうと申<sup>まう</sup>して」。 都・第10

⑥ b 事実<sup>じつさう</sup>左様<sup>さよう</sup>で無<sup>な</sup>くて疑<sup>うたが</sup>はれてはほとんど言<sup>いひわけ</sup>譯<sup>わけ</sup>をするのも馬鹿<sup>ばか</sup>々々<sup>々々</sup>しく、／「ど  
うと申<sup>まう</sup>して」。 金・第10

### 33. 体言止めの全体相

[1]「その他」で大きな割合を占める体言止めの詳細は、山県（2024a）で「兜菊」との比較の中で金港堂版のあり様を述べた。本稿では、それを踏まえ、都の花版と金港堂版を比べ、体言止めの全体相から金港堂版の性格付けを行う。

なお、本稿で対象とする体言止めは、次の如く山県（2024a）と同じで、これは一般的なものより幅広い諸形式からなる。このため、「体言止め類」と称する（表-2参照）。

A類：名詞・代名詞による止め

B1類：形容詞・形容動詞・名容詞の語幹に「さ」「み」などの接辞の接続した形式による止め

B2類：形容動詞・名容詞の語幹による止め

C類：用言などに本稿でいう附属形式（「やう（だ）・ばかり（だ）・ほど（だ）・だけ（だ）・わけ（だ）・さう（だ）」など）が接続し、「です・だ・な」などの語尾の省略された、これらの語幹による止め

D類：形容動詞・名容詞・附属形式の連体形「な」による止め

A類は名詞止めで、それにB類を加えたものが一般的な体言止めである。C類の附属

表-2 非敬体・体言止め類；内訳

	都の花版			金港堂版			兜菊		
	文 末	句 末	計	文 末	句 末	計	文 末	句 末	計
A類：名詞・代名詞止め	358	38	396	438	37	475	142	31	173
B1類：形容語+接辞	19	1	20	23	1	24	25	0	25
B2類：形容語語幹止め	23	1	24	29	2	31	13	1	14
C類：附属形式語幹止め	51	4	55	59	6	65	12	1	13
D類：連体形ナ止め	27	0	27	25	1	26	10	1	11
(形容語/附属形式)	(8/19)	(0/0)	(8/19)	(8/17)	(1/0)	(9/17)	(1/9)	(0/1)	(1/10)
合 計	478	44	522	574	47	621	202	34	236

副 詞 = 43例：副詞 (43)

感動詞 = 18例：感動詞 (18)

連体詞 = 1 例：連体詞 (1)

(2) 句末非敬体「その他」(全139例)

動 詞 = 73例：て (38)・連用形 (25)・ながら (3)・ば (2)・附属形式語幹  
(4)・附属形式連用形 (1)

形容詞 = 5 例：連用形 (4)・語幹+さ (1)

形容動詞 = 1 例：語幹 (1)

名詞 = 2 例：語幹 (1)・連体形 (1)

名 詞 = 53例：名詞 (37)・が (7)・で (3)・は (2)・に (2)・附属形式語  
幹 (1)…

代名詞 = 1 例：附属形式語幹 (1)

副 詞 = 4 例：副詞 (4)

[51] 文末非敬体では、下線を施した体言止め類が両版とも動詞を除く品詞で殆どを占める。この点で両版に違いは見られない。

また山県 (2024b) 42章 [32] 項で述べた如く都の花版でも動詞に意志を表す「(よ)う」が接続する例が多く、形容詞連用形の類 (用例④)、名詞に助詞「が・は・に・で」などが接続する類 (用例⑤) も少なくない。

「(よ)う」の多さは、「いちご姫」に特徴的な「語り手と人物とが一体となって語る「文法」」(十川 (2011) 471頁) に従った結果である。形容詞連用形、名詞+格助詞・副助詞の多さは、後接する述語を省略した話し言葉的な表現を目指した結果であろう。しかし、言文一致体とは言え、書き言葉として落ち着きの悪い、雑な表現である。

④ <sup>いま</sup>今ハ<sup>ざふひやう</sup>雑兵のきまり<sup>しよん</sup>わ<sup>ら</sup>るさ!<sup>おび</sup>初心<sup>と</sup>に笑<sup>おも</sup>つて帯<sup>と</sup>を手<sup>ないしん</sup>にも取<sup>うす</sup>れず——<sup>み</sup>内心ハ薄気味<sup>わ</sup>わるく。 都・第5 【金港堂版・同一表現】

⑤ a それで、花<sup>はな</sup>かとあや<sup>かを</sup>またれて、香<sup>か</sup>りをも吹<sup>ふ</sup>くかとあや<sup>くち</sup>まれるその口<sup>くち</sup>からあの言<sup>こと</sup>葉<sup>ば</sup>が。柳<sup>やなぎ</sup>をはづか<sup>なび</sup>しめてさ<sup>おも</sup>はれば靡<sup>み</sup>くかと思<sup>りくつ</sup>はれるその身<sup>み</sup>からあの理窟<sup>りくつ</sup>が。

都・第1

⑤ b それで、花<sup>はな</sup>かとあや<sup>かを</sup>またれて、香<sup>か</sup>りをも吹<sup>ふ</sup>くかとあや<sup>くち</sup>まれるその口<sup>くち</sup>からあの言<sup>こと</sup>葉<sup>ば</sup>。柳<sup>やなぎ</sup>をはづか<sup>なび</sup>しめてさ<sup>おも</sup>はれば靡<sup>み</sup>くかと思<sup>りくつ</sup>はれるその身<sup>み</sup>からあの理窟<sup>りくつ</sup>。 金・第1

用例④は「感じる」「思う」など、用例⑤は「出る」などの述語の省略であろう。前者の場合、「兜菊」なら前文「わるさ」のサ止めに関係なく韻を踏むかように「内心の薄気味わるさ」と記されよう。後者の場合、金港堂版では一工夫が施されて「が」が省略され、体言止めに改められる。これは体言止めの多さを特徴とする「兜菊」に向けた改稿例とも言える。ただ、都の花版の「名詞+が」25例の内、金港堂版で格助詞「が」が省かれるのは、用例⑤bの2例だけである。他23例は金港堂版でも「名詞+が」のままである。

動 詞 = 189例：(よ)う (62)・附属形式語幹 (35)・て (17)・命令形 (17)・附属形式連体形 (11)・たら (6)・か (3) …

形容詞 = 52例：語幹 + さ (18)・連用形 (15)・附属形式連体形 (7)・附属形式語幹 (6)・附属形式連用形 (2) …

形容動詞 = 21例：語幹 (13)・連体形 (4)・連用形 (2)・語幹 + さ (1)・附属形式語幹 (1)

名 容 詞 = 18例：語幹 (10)・連体形 (4)・附属形式語幹 (1)・附属形式連体形 (1)・附属形式連用形 (1)・では (1)

名 詞 = 483例：名詞 (350)・か (26)・が<sup>s</sup> (25)・は (11)・に (11)・で (8)・附属形式語幹 (7)・へ (5)・を (5)・かしらん (5)・も (5) …

代名詞 = 17例：代名詞 (8)・か (2)・が<sup>s</sup> (2)・は (1)・へ (1)・附属形式連用形 (1)・まで (1)・より (1)

副 詞 = 35例：副詞 (35)

感動詞 = 19例：感動詞 (18)・附属形式語幹 (1)

連体詞 = 1例：連体詞 (1)

(2) 句末非敬体「その他」(全110例)

動 詞 = 50例：て (28)・連用形 (15)・ながら (3)・ば (1)・附属形式語幹 (2)・附属形式連用形 (1)

形容詞 = 2例：連用形 (1)・語幹 + さ (1)

名 容 詞 = 1例：語幹 (1)

名 詞 = 51例：名詞 (38)・が (7)・で (2)・は (2)・に (1)・附属形式語幹 (1) …

代名詞 = 1例：附属形式語幹 (1)

副 詞 = 5例：副詞 (5)

◇金港堂版

(1) 文末非敬体「その他」(全949例)

動 詞 = 199例：(よ)う (61)・附属形式語幹 (42)・て (33)・命令形 (18)・附属形式連体形 (11)・たら (6) …

形容詞 = 58例：語幹 + さ (22)・連用形 (15)・附属形式語幹 (8)・附属形式連体形 (5)・(よ)う (3)・附属形式連用形 (2) …

形容動詞 = 24例：語幹 (15)・連体形 (3)・連用形 (3)・語幹 + さ (1)・か (1)・附属形式語幹 (1)

名 容 詞 = 23例：語幹 (14)・連体形 (5)・附属形式語幹 (1)・附属形式連体形 (1)・附属形式連用形 (1)・では (1)

名 詞 = 565例：名詞 (430)・か (30)・が<sup>s</sup> (23)・は (12)・で (10)・に (8)・附属形式語幹 (6)・かしらん (5)・へ (4) …

代名詞 = 18例：代名詞 (8)・か (2)・が<sup>s</sup> (2)・は (1)・へ (1)・附属形式語幹 (1)・附属形式連用形 (1)・～まで (1)・～より (1)

らぬ」。「～ 都・第10

金港堂版では、引用した会話文（「膾に～」）直前の地文3文と引用中の地文（「でも澄ました～」 「帰らせる道とは～」の2文）が削除され、会話文だけで話が進む。このように表現が削除されたため、金港堂版には句末非敬体タ形が存しない。

もう1つの例外である「兜菊」の1例は、山県（2024b）41章 [42] 項で用例④として示した心中文である。従って、句末非敬体タ形は「いちご姫」「兜菊」いずれにおいて通常の地文の例ではなく、例外的な存在である。

[4] 敬体・非敬体では、1章 [3] 項の傾向③「文末述語のあり様が [敬体＝動作性述語、非敬体＝状態性述語] である」が都の花版でも認められるため、文末において敬体は主として動詞が担い、非敬体は動詞以外、主に名詞が担うなど、品詞による偏りが認められる。

一方、テンスでは、特定の品詞でル形が多い、タ形が多いなどの偏りは認められない。しかし、非敬体で8・9割を占める「その他」は、文末の場合、著しく名詞に偏る。文末非敬体「その他」全体に占める名詞の割合は、次の如く都の花版・金港堂版とも約6割を占める。

◇都の花版・文末非敬体「その他」（835例）

名詞482例57.7%・動詞190例22.7%・形容詞52例6.2% …

◇金港堂版・文末非敬体「その他」（949例）

名詞565例59.5%・動詞199例21.0%・形容詞58例6.1% …

別の観点として、文末非敬体で品詞ごとに「その他」の占める割合を見ると、名詞は、都の花版485例中482例99.4%、金港堂版567例中565例99.6%の如く、名詞の殆どすべてが「その他」である。ただ、このような文末非敬体における「その他」の割合の高さは、動詞・形容詞を除く各品詞で見られ、名詞は用例数が多いだけに際立つ。

一方、句末非敬体では、名詞への著しい偏りは見られず、「その他」全体に対して都の花版で動詞・名詞がほぼ同数（110例中50例・51例）、金港堂版で動詞の方が20例多い（139例中73例・53例）。

なお、1章 [2] 項で金港堂版と「兜菊」における「その他」のあり様として傾向⑤「文末は名詞、句末は動詞が多い」と記した。文末は都の花版でも名詞が多く一致する。しかし、句末は異なる。都の花版で動詞と名詞に差はない。また「兜菊」の句末敬体「その他」の内訳は、動詞141例・名詞40例で、金港堂版以上に動詞が多い。このように句末非敬体「その他」の内訳として3資料間で徐々に動詞の占める割合が高くなる（句末非敬体「その他」全体に占める動詞・名詞の割合；都45.5%・46.4%、金52.5%・37.1%、兜73.4%・20.8%）。

[5] 「その他」で多くを占める体言止めの詳細は次章で述べるとして、文末敬体の「その他」は注（8）で述べたので、文末・句末の非敬体の全体相を示すと、下記の如くである（下線部の用法は33章で「体言止め類」として扱う）。

◇都の花版

（1）文末非敬体「その他」（全835例）

金港堂版；ル形32例3.2%・タ形982例96.7%・「その他」1例0.1%

「その他」は、敬体では上の如く例外的で、金港堂版はほぼ皆無である。<sup>(8)</sup>しかし、「兜菊」にはル形・「その他」が見られず、文末敬体はタ形だけである。金港堂版は、都の花版に比べると、ル形・「その他」が若干減少し、タ形だけの「兜菊」の文末敬体に近づいている。

[22] 文末非敬体は、両版（都1,075例・金1,230例）に加え、「兜菊」（306例）の全体に占める3分類の割合などを示すと、次の如くである。

都の花版；ル形175例16.3%・タ形65例6.0%・「その他」835例77.7%

金港堂版；ル形211例17.2%・タ形70例5.7%・「その他」949例77.2%

cf.兜菊；ル形53例17.3%・タ形16例5.2%・「その他」237例77.5%

割合の点で3資料に差は殆ど認められない。いずれも「その他」は約8割を占め、ル形は2割近く、タ形は1割を切る。文末非敬体では金港堂版を待つまでもなく、都の花版に敬体後期作品の最終段階のあり方が認められる。

[3] 句末における敬体の割合は金港堂版で半減するものの、テンスでは句末の敬体・非敬体とも両版に違いは見られない。

句末敬体は用例数の違いだけで、先の(21)の如く両版ともタ形しか見られない。

句末非敬体は、両版（都125例・金162例）に加え、「兜菊」（230例）の全体に占める3分類の割合などを示すと、次の如くである。

都の花版；ル形14例11.2%・タ形1例0.8%・「その他」110例88.0%

金港堂版；ル形23例14.2%・タ形0例0.0%・「その他」139例85.8%

cf.兜菊；ル形37例16.1%・タ形1例0.4%・「その他」192例83.5%

全体の用例数が多くないため、数例の違いが割合の差に反映する。それでも3資料を比べると、割合の上でル形が徐々に増加し、「その他」が徐々に減少する。しかし、基本的な枠組みは、[22] 項の文末非敬体の3分類の比率から「その他」がやや増加したあり様、即ち、「その他」が圧倒的、ル形が1・2割、タ形は例外となる点で3資料が共通する。

結局、非敬体は文末・句末問わず都の花版時点から「兜菊」と基本的に同じ枠組みになっている。句末における違いは、句末敬体が「いちご姫」両版に見られ、「兜菊」に用例が見られない点だけである。

[31] 都の花版に1例見られる句末非敬体タ形は、用例③で、自身の屋敷に押しかけてきたいちごを窟子が帰らせようとするものの、帰ろうとせず押し問答をする場面である。

いちごの心理でないが、語り手が登場人物の心中に分け入って一体化し、詠嘆する。木谷氏の「作中人物の心理を外面から写していたのが、いつの間にかその人物の気持ちになりきってしまった」（木谷（1969）48頁）例と言える。通常の地文（事柄の説明、登場人物の動作・状態の描写、情景の描写など）とは言いがたい。

③ 「膾になつても帰りませぬ。帰らせうと思しめすなら帰らせる道を御履みやれ。」  
 /でも澄ました、いやふてべしい。帰らせる道とは聞かずとも知れた事。それが否なればこそ曠患の奴としばらく為つたものを… / 「道を履むいはれはおじや

されていないなど、都の花版と金港堂版で共通するところも存する。これらの点で金港堂版は「兜菊」寄りながら、それほどまで徹底して敬体が集約された訳ではない。

### 32. テンスの全体相

[1] 敬体後期作品における「です」「ます」の用法の特徴は、敬体前期作品に比べて「デシタ」「マシタ」などのタ形が著しく多い、即ち、用法が絞込まれている点である。

そこで、文末・句末の敬体・非敬体ごとに都の花版・金港堂版におけるテンスのあり様を全体的に捉え、比較する（論末別表-I B・II B参照）。この場合、文末の敬体の場合と非敬体の場合、句末の敬体の場合と非敬体の場合、都合4種で捉える。

詳細は後述するとして、都の花版・金港堂版とも文体としての基本的なあり方は、下記(11)～(22)の如く一致する。即ち、文末・句末ともに敬体はタ形、非敬体は「その他」が大多数を占める。非敬体での「その他」の多さは、1章[3]項で④とした金港堂版と「兜菊」で共通する傾向でもあった。

なお、「その他」とは、「デショウ」「マショウ」など、ル形とタ形の対立のしようのない形式で、多くは「特殊形（体言止め、助詞止め、連用形中止法など）」（大島（1984）12頁）である。その中でも体言止めが中心をなす（詳細は33章参照）。

(11) 文末敬体＝タ形が圧倒的で両版とも9割以上を占める一方、「その他」は稀である。

(12) 文末非敬体＝「その他」が圧倒的で両版とも約8割を占め、ル形が2割を切り、タ形は1割以下と例外的である。

(21) 句末敬体＝両版ともタ形だけである。

(22) 句末非敬体＝「その他」が圧倒的で両版とも8割を少し切り、ル形が1割少々で、タ形は皆無に等しい。

「兜菊」に句末敬体の例は存しない。更に文末敬体はタ形のみ、非敬体は文末・句末問わず「その他」が圧倒的である。「いちご姫」両版と同じ文体としての枠組みを持つものの、一部はそれらを徹底させている。

「兜菊」で用例の存しない句末敬体は、両版とも4種の中で最も用例数が少ない。文末は敬体・非敬体を問わず1,000例、句末非敬体は100例を超える。しかし、句末敬体は都の花版50例、金港堂版28例に過ぎない。この両版での句末敬体の用例数の少なさ、更に金港堂版での減少（表現全体に占める割合：都50例2.0%→金28例1.1%）は「兜菊」のあり様への兆候、即ち、枠組みレベルでの非敬体化の進行である。

[2] 文末では金港堂版での改稿に際して敬体でタ形がやや増加するなど、「兜菊」のあり様に向けての集約が認められる。

しかし、文末非敬体で両版に大きな違いは見られない。「兜菊」も同じあり様であるため、枠組みでは都の花版時点ですでに「兜菊」に至っている。

[21] 文末敬体全体（都1,195例・金1,015例）に占める3分類（ル形・タ形・「その他」）の割合などは、次の如くである。

都の花版；ル形87例7.3%・タ形1,093例91.5%・「その他」15例1.2%

句末敬体は、全体に対して都の花版50例28.6%から金港堂版28例14.7%の如く、文末敬体を大きく上回る減少幅で、ほぼ半減する。これは、句末敬体が皆無であった「兜菊」のあり様へ向けての急激な減少である。

敬体は、両版とも動詞・名詞にしか見られない。文末でも両品詞に敬体が多かったものの、他の品詞にも見られた点から結果的に文末より更に品詞的に限定される。但し、この場合、名詞の敬体は都の花版4例、金港堂版2例に過ぎない（句末の名詞全体に対して都7.3%・金3.6%の敬体率）。このため、相対的に動詞での減少幅が大きく、句末の動詞全体に対して108例中46例42.6%から118例中26例22.0%の如く敬体率が半減する（cf. 文末の敬体率；都72.9%・金66.9%）。これは、同時に句末での「ます」の減少を意味する（用例②参照）。<sup>(7)</sup>

② a <sup>ひめ</sup> 姫はますへ <sup>かた</sup> 語りす、みました。 — / 「<sup>ぜん</sup> 禪とやらを <sup>をさ</sup> 修める人として ~ 都・第10

② b <sup>ひめ</sup> 姫はますへ <sup>かた</sup> 語りす、む。 — / 「<sup>ぜん</sup> 禪とやらを <sup>をさ</sup> 修める人として ~ 金・第10

用例② a と同じく「マシタ」で会話文に流れ込む都の花版の句末（全46例）の内、用例② b の如く非敬体ル形に改められ、展開の速さが出るのは2例である。金港堂版で非敬体化する例の過半数は、テ中止・連用形中止に改められる。これらは「語りす、む」と言い切る場合に比べると、後続の会話文との一体感が増す。

また用例② a の如く句末敬体「です」「ます」は、すべてタ形である。他の用法はなく、文末敬体のあり様を更に徹底させている。このように敬体がタ形に限られるのは「兜菊」の文末敬体と同じである。

◇都の花版（50例）

【1】です系 = 4例；デシタ（4） 【2】ます系 = 46例；マシタ（46）

◇金港堂版（28例）

【1】です系 = 2例；デシタ（2） 【2】ます系 = 26例；マシタ（26）

[4] 表現末尾における敬体・非敬体のあり方に係る都の花版から金港堂版への改稿は、緩やかな敬体の減少と用法の絞り込みを特徴とする。

この改稿の方向性は、最後の敬体作品である「兜菊」のあり様を目指したものである。

文末の場合、敬体全体の割合では、金港堂版は「兜菊」とほぼ同じで4割少々である。この点で敬体としての枠組みは、金港堂版時点ですでに「兜菊」のあり様に至っている。しかし、細かな点、例えば、金港堂版では、<sup>①</sup>動詞・名詞以外の品詞で少なからず敬体が見られる、<sup>②</sup>「です」「ます」の用法は「デシタ」「マシタ」だけに集約されていない、<sup>③</sup>「ませんでした」が存するなど、一定の多様性が認められ、「兜菊」と異なる。

句末の場合、敬体全体の割合は文末以上に非敬体化が進んで金港堂版での減少幅が大きい。また都の花版時点で敬体は動詞・名詞のタ形に限定されている。このとき、句末敬体の名詞は両版で底を打っているため、動詞での非敬体化が金港堂版で著しく進む。

山県（2024b）で確認した〈金港堂版→兜菊〉の変化は、前兆として〈都の花版→金港堂版〉の改稿でも同様の方向性が認められる。ただ、同じ「いちご姫」として、ともに文末は「デシタ」「マシタ」以外の用法が少なからず見られる、句末から敬体が一掃

敬体前期作品に比べると、文末で「です」下接の非動作性述語において非敬体化が顕著で、更に3資料間で非敬体化が徐々に進行する。

また1章[3]項で述べた金港堂版と「兜菊」で共通する傾向③「文末述語のあり様が[敬体=動作性述語、非敬体=状態性述語]である」は、[2]項の敬体率が動詞と形容詞・形容動詞・名詞で逆になることを併せると、都の花版でも認められることは明らかである。

[22] 文末での敬体3種の用法は、下記の如くで、金港堂版で絞り込みが進む。

◇都の花版(全1,195例)

【1】です系=296例

デス(55)・デスカ(1)・デシタ(229)・デシタラウ(3)・デシャウ(4)・デシャウカ(4)

【2】ませんでした系=49例

【3】ます系=850例

マス(3)・マセン(28)・マシタ(806)・マシタラウ(6)・マシャウ(4)・マシャウカ(2)・マシャウニ(1)

◇金港堂版(全1,015例)

【1】です系=244例

デス(26)・デシタ(217)・デシャウカ(1)

【2】ませんでした系=40例

【3】ます系=731例

マス(1)・マセン(5)・マシタ(724)・マシタラウ(1)

「です」は「デシタ」、「ます」は「マシタ」が圧倒的で、両者を合わせると、文末敬体に占める割合は、都の花版で1,039例86.9%、金港堂版で941例92.7%である。このように「デシタ」「マシタ」の割合が金港堂版で増加するのは、都の花版の「です」「ます」の用法13種のうち、下線を施した6種が金港堂版で見られなくなることが大きい(用例①参照)。ただ、都の花版にしても敬体前期4作品の「です」「ます」の多彩な用法と比べると、すでに絞り込まれている(小野(2004)「表2 です・ます別文末関与」173頁)。

① a が、それにしる主水助もんとのすけが留守るすに来たと何うしてき「窟子ハ」思おもひ付つきましよう。

都・第25

① b が、それにしる主水助もんとのすけが留守るすに来たと何うしてき「窟子ハ」思おもひ付つかうもの。

金・第25

都の花版は、登場人物の思いを傍から語り手が推測して説明する表現、金港堂版は、語り手が登場人物に寄り添い、その思いを共有して語るような表現である。登場人物の直接的な心理描写でないものの、表面的な捉え方が内的に少し深められる。

「兜菊」では「ませんでした」が見られず、「です」「ます」は「デシタ」58例・「マシタ」168例の如くタ形に限定される。金港堂版に対して「ませんでした」の他に「です」「ます」の用法5種が使われなくなる。更なる敬体の集約が進められている。

[3] 都の花・金港堂両版の句末敬体のあり様につき、同じく品詞別に検討する。

容動詞で35例中14例40.0%から34例中9例26.5%と減少幅が大きい。しかし、形容動詞は両版とも用例数が34・5例と少ないことを考慮すべきである。用例数の多い動詞・形容詞・名詞は、次の如くで、減少幅は小さく、5%内外に留まる。また金港堂版と「兜菊」の差は、形容詞でやや大きいくらいである。

動 詞：都1,340例中976例72.8% → 金1,242例中831例66.9%

cf. 兜270例中178例65.9%

形容詞：都134例中19例14.2% → 金138例中14例10.1%

cf. 兜33例中1例3.0%

名 詞：都655例中170例26.0% → 金716例中149例20.8%

cf. 兜198例中46例23.2%

従って、金港堂版での改稿において敬体が特定の品詞で著しく減少する訳でなく、品詞差なく平均して同じような割合で非敬体化が進んでいる。

[21]「です」「ます」「ませんでした」ごとの減少幅は次の如くで、都の花版と金港堂版の差は僅かである。

「兜菊」に見られない「ませんでした」を「です」系として扱うと、都の花版と金港堂版の差より金港堂版と「兜菊」の差の方が僅かに大きく、3資料間で「です」系が僅かずつ減少し、「ます」が僅かずつ増加するように見える（いずれも文末敬体全体に占める割合）。

で す；都296例24.8% → 金244例24.0% cf. 兜58例25.7%

ませんでした；都49例4.1% → 金40例3.9% cf. 兜0例0%

ま す；都850例71.1% → 金731例72.0% cf. 兜168例74.3%

なお、「です」と「ます」の用例数の割合は、両版とも[1対3]で、「兜菊」も同様である(58例・168例)。しかし、小野(2004)に依ると、敬体前期4作品「空行く月」「情詩人」「花ぐるま」「蝴蝶」は[1対2](同172頁)で、敬体後期作品で相対的に「です」が少ない。

事実、品詞ごとに敬体の割合を見ると、先の如く敬体の方が多いのは、「ます」下接が一般的な動詞だけである。動詞の敬体率は、[2]項に示した如く3資料で徐々に減少するものの、「兜菊」でも動詞の3分の2(65.9%)は敬体である。つまり、3資料とも動詞敬体が文末敬体の約8割を担う(都976例81.7%[内、動詞+ます70.9%]、金831例81.9%[内、動詞+ます71.8%]、兜178例78.8%[内、動詞+ます74.3%])。一方、動詞以外、即ち、基本的に「です」が下接する品詞は、先に示した形容詞・名詞に限らず、別表-I A・II Aの如く他の品詞でも非敬体の方が多い。

「兜菊」の文末敬体は、動詞・名詞に用例が集中し、他は形容詞・代名詞に1例ずつの敬体(「です」下接)に過ぎない。どの品詞でも都の花版に対して文末敬体が減少する金港堂版ながら、動詞・名詞以外、即ち、形容詞・形容動詞・名詞・代名詞・副詞で敬体が都合35例(内「です」下接34例)見られるなど(都49例 内「です」下接47例)、「兜菊」のあり様には程遠い。

「です」「ます」の比率の違いが示す如く、「いちご姫」「兜菊」など、敬体後期作品は、

文末の場合、都の花版で敬体ながら金港堂版で敬体を維持した例と非敬体化した例は、それぞれ何例か、両者にどのような言語的・文脈的な違いが認められるかなどを検討する。

一方で、都の花版で文末ながら、句末化・文中化するだけでなく、該当の表現が削除される場合が66例も見られる。<sup>(4)</sup> これらは、大雑把には『山田美妙集』編集委員会編(2012)の改題【初出との主な異同】で「美妙は単行本化にあたって冗漫な表現を簡略化した」と、白ゴマ点や変体仮名を少なくするなど、最大限簡みやすくする工夫をこらしている」(423頁)の如く説明される諸例である。

都の花版の文中が金港堂版で文末になることが142例と少なくない。これは、注(2)で述べた都の花版の白胡麻点金港堂版の句点に置き換えられている場合(142例中119例、他に[読点→句点]22例など)である。この142例のうち133例は表現に変更がなく、補助符号の違いだけである。逆に都の花版の文末が金港堂版で文中になる85例は、表現に変更が生じることが51例と多く、補助符号だけの違いは34例と限られる。<sup>(5)</sup>

表-1 表現対応

都の花版 [2,445]	金港堂版 [2,435]	
		文末
文末 2,270	句末	25
	文中	85
	表現なし	66
句末 175	文末	9
	句末	165
	表現なし	1
文中	文末	142

### 31. 敬体の全体相

[1] 表現末尾における都の花版・金港堂版の敬体・非敬体のあり方を全体的に捉え、比較する(論末別表-I A・II A参照)。

この場合、敬体は、これまでの拙稿と同じく「です」「ます」「ませんでした」の3種で考える。表現全体に対する敬体の割合は、都の花版で2,445例中1,245例50.9%、金港堂版で2,435例中1,043例42.8%と減少する。文末・句末ごとでも下記の如く減少傾向は変わらない。

#### ◇都の花版

文末敬体=2,270例中1,195例52.6%、句末敬体=175例中50例28.6%

#### ◇金港堂版

文末敬体=2,245例中1,015例45.2%、句末敬体=190例中28例14.7%

金港堂版で文末・句末とも敬体の割合が低くなる。文末では都の花版で敬体が過半数を占めていたものの、金港堂版では逆転して非敬体の方が多くなる。ただ、減少幅は、句末の方で大きく、金港堂版で割合がほぼ半減する。<sup>(6)</sup> 「兜菊」で句末はすべて非敬体であった。文末を上回る金港堂版の句末での減少幅は「兜菊」のあり様への急傾斜の現れである。

なお、「兜菊」の敬体は、表現全体で762例中226例29.7%と低い。これは非敬体しかない句末の用例数が230例と多いためである。文末に限ると、532例中226例42.5%で、金港堂版の値とほぼ同じである。

[2] 都の花・金港堂両版の文末敬体のあり様につき、品詞別に検討する。

文末敬体の割合は、金港堂版で7.4%減少した。品詞ごとに減少幅を算出すると、形

象とすることによって、「いちご姫」の文体を全体的に捉えることができる。

この場合、表現全体で、また文・句それぞれで末尾の文節が具体的にどのような形式・用法となっているかなどを検討し、比較する。

ただ、後述の如く、両版の表現を一对一で対応させると、都の花版で文末の文節が金港堂版で文中であったり、都の花版で文中の文節が金港堂版で文末であったりすることが少なくない。<sup>(2)</sup> 従って、文末・句末以外に文中に言及することがある。

ちなみに、本稿で対象とする文中とは、原則的に直後に読点「、」・白胡麻点「。」・ dashes 「——」が来て、言い切りの述語形式であるか否かにかかわらず、その次で改行されないで、地文が続く場合である。

### 3. 考 察

[1] 本稿は、美妙の後期敬体作品の一つ「いちご姫」の表現末尾の全体相につき、雑誌掲載で初出の都の花版と改稿を経て刊行された金港堂版を比較し、金港堂版の文体を都の花版、更に最後の敬体作品「兜菊」との対比によって性格付けることを目的とする。

このことは、文中敬体を対象とした山県(2022)と併せ、美妙が金港堂版「いちご姫」で最終的に目指した敬体の言文一致体とはどのような文章であるのかを明らかにする研究の一斑を担う。

表現の一对一の対応による比較は続稿に譲り、山県(2024a)(2024b)と同じく言語学的な観点から表現末尾の文節を整理・数量化して全体相を捉える。

ただ、従来の研究によって改稿の方向性として敬体が絞り込まれる傾向が明らかになっている。このため、表現末尾のあり様として、敬体の表現はどのように限定されているのか、非敬体で多数を占める体言止め類はどのように拡張しているのかなどに注目する。

このような比較に際して都の花版の敬体が金港堂版でどのように改められているかが一義的に問題になる。しかし、都の花版の非敬体を等閑視することはできない。大島氏の「敬体は情景描写、常体は心理描写という使い分け」は、都の花版でどの程度厳密なものであったのか、先の用例②③の如き金港堂版で非敬体化した例を別の観点から捉え直すためにも別の稿をいずれ設けたい。

なお、先の大島(1984)の如く「いちご姫」両版とも全38のまとまりに前半・後半の違いが存する。しかし、本稿でこの内部差は注で触れるにとどめ、用例は一括して扱う。

[2] 対象とする表現は、都の花版2,445例・金港堂版2,435例で、改稿に伴う減少は僅か10例に留まる。それぞれの内訳は、次の如くで、文末と句末で事情がやや異なる。<sup>(3)</sup>

都の花版；文=2,270例・句=175例      金港堂版；文=2,245例・句=190例

金港堂版で文末が少なくなり、句末が多くなる。ただ、表現ごとに対応関係を調査すると、複雑で、文末・句末だけで収まらない(次頁表-1参照)。

都の花版の文末で金港堂版でも文末であるのは、2,270例中2,094例92.2%、同様に句末どうして対応するのは、175例中165例94.3%の如く、殆どは同じ表現単位である。続稿で一对一の対応を検討するは、基本的にこの組み合わせである。具体的には、ともに

都の花版と金港堂版を比較する際はこれらの傾向がどのように見られるかに注視する。

## 2. 調査対象

[1] 「いちご姫」(都の花版・金港堂版)及び「兜菊」の本文は、それぞれ次の複製本による。

都の花版・兜菊＝不二出版(1984～85)『都の花』

金港堂版＝国文学研究資料館(2007)『リプリント日本近代文学103』平凡社

その他、『山田美妙集』編集委員会編(2012)『山田美妙集 第2・3巻』臨川書店に加え、「いちご姫」は十川信介校訂(2011)『岩波文庫 いちご姫・蝴蝶他二篇』岩波書店によっても本文を確認した。

対象とするのは、各作品本文のカギ括弧「」で示される会話文を除く地文の表現すべてである。

なお、引用は、原文通りに記すことを心掛けた。但し、漢字字体を現行のものに改めることがある。また改行箇所には「／」を施した。

[2] 本稿で対象とする「末尾」は、原則的に次の(1)～(4)のいずれかを満たすものである。

これは、山県(2022)2章[2]項・山県(2024b)3章[2]項の原則(1)～(4)とほぼ同様である。また対象とする言語単位として「文」「句」を設け、両者の総称を「表現」と呼ぶことも同様である(それぞれの用例は、前2稿を参照のこと)。

(1) 句点「。」・感嘆符「!」・疑問符「?」・リーダー「…」が直後に来る場合は、(直後のカギ括弧の有無に関わらず)文の末尾とする。

(2) 読点「、」・白胡麻点「。」・ダーシ「—」が直後に来て、その次に(改行の有無に関わらず)カギ括弧＝会話文の来る場合は、句の末尾とする。

(3) 読点「、」・白胡麻点「。」・ダーシ「—」が直後に来て改行され(段落末尾)、次の行にカギ括弧の来ない場合は、文の末尾とする。

(4) 言い切りの述語形式ながら、(1)(2)の諸符号がない場合、『山田美妙集』などを参照し、解釈によって文末・句末または文中を定める。

従って、表現末尾の文節が言い切りの述語形式(活用語の終止形・命令形や終助詞などの下接)であっても、その後の補助符号の種類とカギ括弧＝会話文の有無によって、文末・句末及び文中いずれかを定める。

本稿で句末と称する単位は、従来の研究で多く文中とされる。しかし、服部氏と同じ立場で、「地の文が言い差しのまま会話に流れ込む場合は、便宜的に〈中略〉[会話文の前]文が切れているものと認定」(服部(2011)3頁)して文中としない。しかし、氏は「述部の品詞性・時制を検討する際には、この種の会話文に流れ込む文末を総文末数から除いて、比率を求めた」(同3頁)の如く別扱いする。性格的に文末と同じに扱えないところが存する。このため、句末という単位を設けた。

[3] 本稿は、以上の如く、地文を大きく文と句に二分し、それらを表現と総称して対

一方で、語り手が登場人物に寄り添って事柄を把握し、それを説明する表現を非敬体化することによって登場人物が自身の心のあり様を直接的に言い表すような表現となる例も見られる（用例③参照）。

- ③ a 躍る胸をこゝぞと一心籠めて静める、その間どうして居るかと主水助をちらちら睨めばいつも―その度わが眼も先方の目と鉢合はせ。が、變、どうも悟られたらしいです。 都・第21
- ③ b 躍る胸をこゝぞと一心籠めて静める、その間どうして居るかと主水助をちらちら睨めばいつも―その度わが眼も先方の目と鉢合はせ。が、變、どうも悟られたらしい。 金・第21

用例②③のbは、ともに金港堂版で非敬体である。用例②は、客観的に登場人物の動作を描いた表現で、用例③bの如く心理的な表現にすることはできない。即ち、続稿における課題の一つとなるが、敬体が改められた場合と維持された場合、それぞれどのような条件によるのか、踏み込んで言えば、どのような美妙の区別意識が存し、何を意図して都の花版の敬体を金港堂版で非敬体に改めたのか、また都の花版の敬体を金港堂版で敬体のまま維持したのかなどを検討する必要がある。<sup>(1)</sup>

また大島氏の「文語調への逆行」「口語からの乖離」などは、重要な指摘である。今後、様々な言語現象についてその程度などを明らかにする必要がある。

その他、氏の示された内部差も「いちご姫」における重要な課題である。ただ、本稿では注で触れるにとどめる。

[3] 山県（2024a）（2024b）では、「兜菊」の文体的特徴について、連載中に刊行された金港堂版との比較によって捉えただけで、都の花版は扱わなかった。

本稿は、それを補う側面を持つ。即ち、前2稿で確認した〈金港堂版→兜菊〉の変化相は〈都の花版→金港堂版〉の延長線上にあるのかを検証することによっても金港堂版を性格付ける。

金港堂版と「兜菊」は、敬体の絞り込みに差が見られる一方、文体としての枠組みの点で同じ敬体後期作品として共通することが多い。

共通する全体的な傾向として山県（2024a）6章[2]項では、次の4点を挙げた。

- ①全体に対する敬体の割合が40%少々である。
- ②「デス」と「マス」の比率が[1対3]である。
- ③文末述語のあり様が[敬体=動作性述語、非敬体=状態性述語]である。
- ④ル形・タ形以外の分類として「その他」が非敬体の80%前後を占める。

傾向④の「その他」は、大島（1984）の「特殊形（体言止め、助詞止め、連用形中止法など）」（12頁）が中心となる。この「その他」のあり様で金港堂版と「兜菊」は、次の如き傾向⑤～⑦で共通する。

- ⑤文末は名詞、句末は動詞が多い。
- ⑥文末では体言止め類が過半数を占める。
- ⑦名詞止めに限定すると、その割合は美妙の敬体前期の言文一致体作品や二葉亭四迷・尾崎紅葉の言文一致体作品に比べて高い。

を検討することによって金港堂版の性格付けを行う。従って、表現末尾を捉える言語的な観点は、山県(2024a)(2024b)と同じく敬体・非敬体以外にテンス(ル形・タ形及び「その他」の3分類)を中心とする用法と表現末尾の文節を構成する品詞(自立語)である。

[2]「いちご姫」の都の花版から金港堂版への改稿に関しては大島(1983)(1984)が詳しく、本稿はこれらに多大な恩恵を受けた。

大島(1984)は、大島(1983)を受け、最終的に以下の如くまとめる([ ]内及び下線は山県が補った、以下すべての引用においても同様)。

[助動詞を減らす]変化箇所は前半に集中しており、第二十九、三十(「都の花」第三十四号、明治二十三年三月)頃から、最終回の第三十八(第三十九号、同五月)までの部分は、句読点の種類(、。、)以外はほとんど変えられていない。つまり、後半の文章に統一して、前半の文章が直されているといえるのである。単行本の文章は、文中の「でした」「ました」は削除され、「ましたが」等の逆接は必ずといってよほど「～ものの」にとってかえられ、文末の「ました」「でした」は減らすといった、かなり意識的で規則的な手の入れ方がみられる。(中略)助動詞を減らすということは、特殊形[体言止め、助詞止め、連用形中止法など]の増加や一文の文長が延びる傾向とともに、常体の文末表現の増加も生じることと表裏一体の関係にあることも見のがせない。(中略)書き換えの方法としては、以上にみられたように極めて機械的な決まりきったパターンであり、「ものの」という接続助詞や体言止めなどの調子のよい表現への統一は、洗練であるかもしれないが、口語文体発展の立場からみれば、むしろ文語調への逆行であり、口語からの乖離でもある。大島(1984)13～14頁

改稿のあり様は、「デシタ」「マシタ」の削除、体言止めなどの増加が顕著であるとまとめられよう。しかし、前半・後半で改稿の程度が異なるものの、金港堂版で敬体が文末・文中とも皆無になる訳ではない。都の花版の「デシタ」「マシタ」などが削除される場合と維持される場合に分かれる。例えば、用例①は、42章[2]項で触れる「その他」の文末敬体の例で、都の花版に15例存するものの、他は金港堂版ですべて非敬体化されるため、唯一維持される敬体例である。

- ① このころは、ちやとさころ<sup>あるひ</sup>ふうおほ<sup>いま</sup>の茶ちやの招待せうたいハ何か思おもはくなの有るわけなで無ないものでしやうか。／都・第20【金港堂版・同一表現】

その一方で、「敬体は情景描写、常体は心理描写という使い分け」(大島(1984)12頁)にもかかわらず、大島氏の示される第5・9・11の非敬体化された用例は、登場人物の動作を描写した表現である(用例②参照)。

- ② a 「和主おのしは誰か。名なも名な唱ならずなに人ひとに物言ものいふ作法さほうがおりきうしよやるか」。／灸處ひとの一ひとり鐘かね、左京さきやうもつつきまりました。都・第9
- ② b 「和主おのしは誰か。名なも名な唱ならずなに人ひとに物言ものいふ作法さほうがおりきうしよやるか?」。／灸處ひとの一ひとり鐘かね、左京さきやうもつつきまる。金・第9

# 山田美妙「いちご姫」 都の花版・金港堂版の表現末尾の全体相

山 県 浩

## 1. はじめに

[1] 本稿は、山田美妙「いちご姫」に係る文体研究の一つとして、その文中敬体を論じた前稿・山県（2022）を受け、『都の花』4-19～8-39（1889年7月～90年5月）に連載後、金港堂から刊行された際（1892年2月）、表現末尾がどのように改められたかを明らかにしようとするものである。

言文一致に関する研究は一般に文末表現を対象とする。この点で前稿は特異であった。本稿は、このような前稿と併せ、表現末尾を対象とすることによって美妙が金港堂版「いちご姫」で最終的に目指した敬体の言文一致体とはどのような文章であったかを全体的に捉えることを目的とする。

山県（2018）では、両版の文末敬体に限って各々のあり様を記述し、違いの顕著な用法について報告した。しかし、文末敬体の割合は、後述の如く都の花版で約50%、金港堂版で40%半ばに過ぎない。即ち、「いちご姫」は、非敬体のあり様も検討しなければ、文体の全体相を捉えたことにならない。

本稿は、そのための第一段階に位置する。最終的には、都の花版の一つひとつの表現末尾が金港堂版でどのように対応しているのか、即ち、改められずそのまま継承されているのか、それは敬体または非敬体いずれか、改められた場合、どのような表現が改められているのか、その言語的条件・文脈的条件はどのようなものかなどが検討されねばならない。この積み重ねによって都の花版から金港堂版への改稿の全体相が明らかにでき、「いちご姫」において美妙が最終的に目指した敬体の言文一致体がどのような特徴を有するのかが捉えられる。

本稿は、両版の表現を一对一で突き合わせる前段階として、都の花版・金港堂版のそれぞれの表現末尾の文節を数量的に捉え、両版を比較して、金港堂版の文体を都の花版との対比によって性格付ける。

[11] 山県（2024a）（2024b）では、最後の敬体作品「兜菊」（『都の花』71～90・1891年11月～92年9月）の文体的特徴について、連載中に刊行された金港堂版との比較に基づいて捉えた。その結果、文体としての枠組みの点で同じ敬体後期作品として共通することが多いものの、敬体のあり様は極限まで絞り込まれている旨を明らかにした。

そこで、本稿は、これらを受け、金港堂版から「兜菊」にかけて見られた様々な絞り込みが都の花版と金港堂版の間に見られるのか、見られる場合、どのようなものかなど

語の研究』6(4): 1-15.

近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』ひつじ書房.

志波彩子 (2016) 「近代日本語の間接疑問構文とその周辺—従属カ節を持つ構文のネットワーク—」『国立国語研究所論集』10: 193-220.

志波彩子 (2018) 「近代日本語における依存構文の発達—構文はどのように発生・発達・定着するのか—」, 『国立国語研究所論集』16: 51-76.

高宮幸乃 (2004) 「ヤラウによる間接疑問文の成立—不定詞疑問を中心に—」『三重大学日本語学文学』15: 17-31.

高宮幸乃 (2005) 「格助詞を伴わないカの間接疑問文について」『三重大学日本語学文学』16: 15-27.

高山善行 (2021) 『日本語文法史の視界』ひつじ書房.

辻本桜介 (2022) 「中古語における間接疑問文相当の引用句」『日本語の研究』18(1): 70-77.

藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』和泉書院.

#### 謝辞

志波彩子氏には草稿に貴重な助言をいただき、議論を改善することができました。記して感謝申し上げます。

- 云人毛) 君にはまさじ」(万葉 2628) のような例は上代から一貫して見られる。
- (21) なお、この格助詞がヤラ疑問節について覚一本平家物語の一文は、覚一本と同じ語り系古本の百二十句本になく、よって、それと対応するとされる天草版にも該当箇所がない。
- (22) 前方共起を語彙素「か」とし、キーを品詞の小分類「助詞-格助詞」として検索したものから間接疑問文を目で見て分類した。なお、志波 (2018) にも『日本語歴史コーパス』を用い、雑誌『太陽』を中心とした、間接疑問節に格助詞・係助詞がついた用例数が示されている。併せて参照されたい。
- (23) ここでの「言う」は伝達動詞に分類しているように、「伝える」という意味の「言う」である。単に発話を意味する「言う」は (4) が示すように、疑問節選択述語ではない。
- (24) なお、近松浄瑠璃は疑問節選択述語の異なり語数も大きく、そのような表現の幅が、目的性従属疑問文の出現の背景にあるとも考えられる。

### 参考文献

- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Karttunen, Lauri (1977) Syntax and semantics of questions. *Linguistics and philosophy* 1: 3-44.
- Kinuhata, Tomohide (2012) Historical development from subjective to objective meaning: Evidence from the Japanese question particle *ka*. *Journal of Pragmatics* 44(6-7): 798-814.
- R Core Team (2019) *R: A Language and Environment for Statistical Computing*, R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria, URL: <https://www.R-project.org/>.
- Shimoyama, Junko (2006) Indeterminate phrase quantification in Japanese. *Natural Language Semantics* 14: 139-173.
- Tomioka, Satoshi and Jooyoung Kim (2016) A new embedding strategy: Purposeful questions in Japanese and Korean. *Proceedings of WAFL 11*.
- 江口正 (1998) 「引用節・間接疑問節と内容名詞句の共起関係について」『愛知県立大学外国語学部紀要 (言語・文学編)』30: 325-344.
- 江口正 (2022) 「間接疑問節と結びつく述語について」同研究会 (編) 『中部日本・日本語学研究論集』, 35-54 頁, 和泉書院.
- 衣畑智秀 (2014) 「日本語疑問文の歴史変化—上代から中世—」青木博史・小柳智一・高山善行 (編) 『日本語文法史研究 2』, 61-80 頁, ひつじ書房.
- 衣畑智秀 (2021) 「間接疑問文発達の一過程—日本語史を中心に—」筑紫日本語研究会 (編) 『筑紫語学論叢 III』, 258-275 頁, 風間書房.
- 衣畑智秀 (2022) 「日本語疑問文の歴史変化—近世以降の疑問詞疑問文を中心に—」『日本語の研究』18(1): 1-18.
- 衣畑智秀 (2024) 「天草版平家物語の疑問詞疑問文—翻訳、文体、歴史の交渉—」『国語と国文学』101(10): 34-47.
- 衣畑智秀・岩田美穂 (2010) 「名詞句位置の力の歴史—選言・不定用法を中心に—」『日本

虎明本狂言集については、以下の表 3、4 に合わせて集狂言類・萬葉類を除いてある。また、以下の全ての表で、衣畑 (2022) 同様、洒落本については当該方言以外の話者の用例を除いている。

- (10) ヤラがトと融合し、トヤラと見なされるものは「直接疑問文」の用例数から除外している。
- (11) トカ、カヤのように、カがトヤヤと融合した形は「疑問節-述語」連鎖が見られないため、「直接疑問文」の数値から除いた。また、詠嘆と思われるものは除いたが、中には判断に迷う例もあったため、「直接疑問文」の数値はあくまで「疑問節-述語」連鎖の大凡の割合を示すための参考数値と考えてもらいたい。
- (12) 用例の解釈上、カによる「疑問節-述語」連鎖と認定するかどうかで悩んだものとして、「何かは知らず、わつと叫ぶを、胸倉つかみ」(近松・心中重井筒) のような「何かは」という形がある。これは新編全集では「何かわからないが、「わつ」と叫ぶのを」と間接疑問文のように訳されているが、むしろ、胸ぐらを掴まれた子供が「訳 (= 仔細) がわからずわつと叫ぶ」という意味で解釈したほうが良いと思われる。だとすると、仔細を意味する「何彼」から由来する可能性がある。このような例は、近松に 2 例、上方洒落本と江戸洒落本に 1 例ずつ見えたが、用例数からは省いた。
- (13) 江戸洒落本以降にカが増えるのは時代に加え地域差 (上方か江戸か) も関係していると思われる。ヤラによる間接疑問文が虎明本狂言集で一旦減り、近松で再び用いられているのは、ゾの用例数が近松浄瑠璃から減ったの (cf. 表 2) を補うために一時的にヤラが用いられたためであろう。
- (14) ただし、どれも有意確率は 10% 以上で無相関検定では有意とはならない (R 言語 (R Core Team 2019) の ppcor パッケージで関数 pcor を使用)。この原因としてはまずサンプル数が 6 (自由度 3) と少ないこと、そして、近松浄瑠璃では 0 とヤラに同等の用例数が見られることが考えられる。前者についてはサンプル数を増やす必要がある。後者については、近松浄瑠璃でも 0 とヤラがお互い少ない用例で全体を補っているように見えるが、それを偏相関係数では表現できていないという問題がある。いずれも本稿の範囲を越えるので今後の課題とし、表 6 はあくまで参考に留める。
- (15) 衣畑 (2021) でも、肯否疑問節・疑問詞疑問節への両用化を、間接疑問標識の発達過程を示すものとしたが、そこでは、琉球宮古語の *gara* の用法にしか根拠を求めることができなかった (当該論文 4 節)。ここでは衣畑 (2021) で示すことができなかったカの「直接疑問文」の調査結果を示し、日本語におけるカの歴史変化からも、肯否疑問節・疑問詞疑問節への両用化が間接疑問標識の発達を示すものであることを主張する。
- (16) 表 8 の疑問詞疑問節の用例数は、衣畑 (2022: 表 6) と同一作品のものは一致することが期待されるが、検索方法の違い (注 (6) 参照) などから、多少用例数に出入りがある。
- (17) 同様の傾向は高宮 (2005) の調査でも見られる。虎寛本狂言集で肯否疑問節と疑問詞疑問節が同数となり、人情本では疑問詞疑問節の例の方が多いという。
- (18) 虎明本狂言集の 0% からの倍率は計算できないため、全てに 0.001 (0.1%) を加算して計算。
- (19) R の glm 関数を用いてロジスティック回帰分析を行った。各資料群の言語反映年代については、衣畑 (2022: 表 5) に従い、虎明: 1600、近松: 1712、上方酒: 1791、江戸酒: 1787、人情: 1838 とした。「疑問節-述語」連鎖と「直接疑問文」の違いをわかりやすく視覚化するため、地域差は説明変数に入れなかった。
- (20) たとえば (20c) 「どなたが伝授された」も存ぜぬならば、「誰が伝授したこと」も知らない」で疑問詞を認可すると同じ仕組みで認可していると考え。より具体的には、疑問詞を元に作られた代替集合をモガが全称量化することで、疑問詞を認可していると説明できる (詳しくは Shimoyama 2006)。なお、このようなもの取る節内に疑問詞が現れる「誰といふ」も (孰

(30)	51-近松 1710_16001, 15150	
(31)	a. 52-洒落 1776_01006, 32630	b. 40-虎明 1642_03024, 2140
(32)	51-近松 1722_21003, 25580	
(33)	51-近松 1704_06003, 43590	
(34)	51-近松 1707_01002, 40940	
(36)	51-近松 1722_21002, 33370	

---

## 注

- (1) トによる引用句が動詞の項ではなく、動詞句に係る付加句であることは、江口 (1998)、藤田 (2000: 2 章 4 節) 等で議論されている。
- (2) 実際、辻本 (2022) によって肯否疑問文がトによって埋め込まれたとされるものは、間接疑問文と解釈するのがよいか判断に迷う例ばかりである。たとえば (1b) は「世にあるかないかを知らない人」のように疑問節を述語「知る」の内容節と取るよりも、「世にあるだろうかいやないだろうと、行方も知らなかった人」のように「知らず」への修飾句と解釈した方が自然に思える。(6a) も同様に解釈できることに加え、他の可能性として「世に人がいるのも知らず」といった事実節の埋め込みに、主節主語の視点から疑問の係り助詞やが(直接話法的に)入り込んだようにも見える。いずれにしろ、トによって埋め込まれた肯否疑問文は直接疑問文の用法を脱しきっていないと思われる。
- (3) ただし、引用を表すトの用法も、寛一本平家物語に見られるものは必ずしも「通常の疑問文」を埋め込んでいるとは言えない。たとえば i) のようにトによる引用節の中に係り助詞は用いられず、疑問詞があっても述語は終止形となる。このような変化については、本稿の範囲を越えるため、ここでは追及しない。
- i) 容顔まことに美麗なりければ、いづくに刀を立つべしともおぼえず。
- (4) ただし、高宮 (2004: 注 4) には「いかが思しけん、(著者は) 知らずかし。」という源氏物語・竹河からの例が挙がっている。
- (5) どのようなものを「疑問節-述語」連鎖と見なすか(から除外するか)については注 (12) 及び補説を参照されたい。
- (6) 用例収集は史記抄を除き、『日本語歴史コーパス』を用い、疑問詞疑問文(節)、肯否疑問文(節)に分けて行った。疑問詞疑問文(節)では、品詞の小分類を「代名詞」「形状詞-一般」「連体詞」「副詞」「名詞-数詞」として検索したものの中から疑問詞のみを抽出し、さらに目で見えて疑問文(節)を抜き出したものである。その後、その疑問詞疑問文(節)を使われるボタン(カ係り、ヤラ、 $\emptyset$ など)ごとに整理した。肯否疑問文(節)はそれぞれの助詞を語彙素で指定し検索した。ヤラは係助詞「や」で登録されているものもあるが、目で見えてヤラの数値に入れた。ヤラと文末のカについては、疑問詞をもとに集めたものと語彙素をもとに集めたものを照合し、最終的に後者をもとにデータを作成した。なお、一文中に複数の疑問詞が現れる多重疑問文(節)の例や、疑問文が並列され、選言関係にあるもの「汝知れりや、忘れりや」(寛一平家・巻 3)、単純な繰り返し「人やある、人やある」は、1 例として数えている。
- (7) 全 5 冊からなる『史記桃源抄の研究』(日本学術振興会)の第 1 冊のみを調査して 55 例が見つり、そこから推定した数値。以下表 2 の用例数と、表 5 のカ文末の「直接疑問文」の用例数も同様。
- (8) なお、史記抄には肯否疑問文にもカによる係り結びが見られるが(衣畑 2014: 3 節)、管見の限り「疑問節-述語」連鎖は見られなかった。
- (9) 「直接疑問文」の用例は、衣畑 (2022: 表 4) に同じ出典があるものは同数である。ただし、

カニ、ナンテ)等も持たないため、間接感嘆文とは考えにくい。調査対象の範囲では、(35)のような間接感嘆文は確認できなかった。

最後に、次の例は、一見、カによる疑問節が「聞く」という述語に選択されているように見えるが、「ここにゐるか」という台詞を聞き捨てる、という意味である。

- (36) [ヤアお千世ここにゐるか]を聞き捨てる、物をも言はず、つつと入り障子をはたと引き立てたり。(近松・心中宵庚申)

間接疑問文は疑問節の意味的な内容を述語が選択するものなので、表面的な発話を選択しているこの例は除外した。

### 調査資料

『史記桃源抄の研究』(日本学術振興会)以外は、国立国語研究所『日本語歴史コーパス』(<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/>)に基づく。天草版平家物語から人情本までの疑問詞疑問文(節)の用例は、衣畑(2022)・衣畑(2024)で作成したデータ(バージョン2018.3, 2020.3)を使用した。その他(覚一本平家物語、肯否疑問文の例、明治・大正編:注(6)を参照)は、バージョン2023.3による。

番号	『日本語歴史コーパス』位置情報	
(5)	a. 20-源氏 1010_00001, 111370	b. 20-源氏 1010_00013, 111870
	c. 20-源氏 1010_00047, 304930	
(8)	a. 30-平家 1250_01002, 13380	b. 30-平家 1250_04005, 23420
(9)	40-天平 1592_04026, 5080	
(12)	30-平家 1250_01003, 2080	
(13)	a. 40-虎明 1642_02006, 51480	b. 40-虎明 1642_01024, 3590
	c. 51-近松 1715_19001, 49450	d. 52-洒落 1757_01029, 26870
(14)	30-平家 1250_04006, 23440	
(15)	b. 40-虎明 1642_05014, 7330	c. 51-近松 1710_16002, 9180
(16)	b. 51-近松 1722_21003, 31630	c. 52-洒落 1776_01006, 52900
(17)	a. 51-近松 1707_01002, 24570	b. 52-洒落 1779_01025, 99110
	c. 53-人情 1833_04003, 59360	
(18)	a. 51-近松 1704_06002, 57420	b. 52-洒落 1775_01010, 63450
	c. 53-人情 1836_01001, 25260	
(20)	a. 40-虎明 1642_01015, 5840	b. 40-虎明 1642_04024, 2080
	c. 51-近松 1717_24001, 29480	d. 52-洒落 1800_01017, 146290
(21)	a. 30-平家 1250_06012, 17650	b. 40-天平 1592_03001, 13020
(22)	a. 51-近松 1720_20001, 38310	b. 53-人情 1821_08001, 64730
	c. 53-人情 1864_03001, 50540	
(23)	a. 30-平家 1250_05011, 28050	
(25)	a. 51-近松 1715_19002, 35730	b. 52-洒落 1776_01006, 32590
	c. 52-洒落 1822_01062, 162940	
(27)	a. 60C 口語 1871_02102, 30200	b. 60M 明六 1874_23001, 25560
	c. 60N 武蔵 1898_11006, 2350	

認可できると考え、疑問節選択述語と認定した。実際、表 12 の「名詞」の中の「御存じ、覚え、返事、占い」等は、「動詞」の「存ずる、覚える、返事する、占う」に対応する。

(31) a. [お客のお出るかお出んか]の灰占(上方酒・無論里問答)

b. 是へ参て、[よひ事かあしひ事か]、うらなふてみてもらはふ(虎明・菌)  
 なお、「依存」だけは動詞が見られず、名詞のものしか確認できなかった(志波(2018)によると、明治・大正期には動詞の例も見られる)。

(32) [母殺すか、女房去るか]それからは、そちの勝手次第(近松・心中宵庚申)  
 以上に基づき、本稿では「疑問節-述語」連鎖の認定を行なった。

一方、以下の構文は節末にあるカの埋め込みに関係するが、本稿では「疑問節-述語」連鎖の用例として扱わなかった。

まず一つは、Tomioka and Kim (2016) で報告された「目的性従属疑問文」と呼ばれるものである。この構文では主節の述語が疑問節を選択するのではなく、疑問節の解答を得るための行為を主節で述べるという関係によって、疑問節が主節と関連を持つようになる。たとえば(33)では「嘘か真か」という疑問節を「見る」という述語が選択しているわけではない。「見る」の目的語は指示語コレの内容、つまり、「左の肋に刀を突き立て」自死しようとしていることである。この場合、「左の肋に刀を突き立てるのを見る」ことで、疑問節「死ぬ覚悟があるかないか」に対する解答を得られるという関係になっている。

(33) 人を斬れば、死ぬるは覚悟。[嘘か真か]、これ見よと左の肋<sup>あばら</sup>に刀を突き立てえいやつと引き回し、(近松・薩摩歌)

目的性従属疑問文は、江口(2022)でも指摘されるように、潜伏疑問名詞句に置き換えられず、格助詞を付けることもできない。よって、疑問節が動詞の項として埋め込まれる過程を調べる本調査の対象外としたが、この種の構文も近世には出現し、間接疑問文を生み出すコンテキストの一つであった可能性は考えられる。その観点から、「目的性従属疑問文」についても用例を収集したが、カ文末の場合、虎明本狂言集に 6 例、近松浄瑠璃に 11 例見られる一方、江戸語の洒落本や人情本には見られないなど、調査文献による偏りが大きく(24)、経年的な増加は見られなかった。

次に、ある種の述語が、先行する疑問節に関連しているように見える、以下のような例も対象から除外した。「口惜し(残念だ)」は叙実述語で疑問節を取らないためであり、これに先行するカは、ここでは詠嘆のカであると解釈される。

(34) 恋する者の因果で、傍輩の機嫌取り追従したが身の仇となつたるか、口惜しや。  
 (近松・五十年忌歌念仏)

なお、志波(2016)によると、明治期には、(35)のように、叙実述語がカによる感嘆文を項として取る「間接感嘆文」が見られるようになるという。

(35) 山は依然として太古、水は依然として不朽、それに対して、[人間は僅か六千年の短き間にいかにその自然の面影を失いつつあるか]をつくづく嘆ぜずにはいられなかった。(蒲田・重右衛門の最後、志波 2016: p. 208)

しかし、(34)は、間接感嘆文のように格助詞を伴っておらず、感嘆文に特徴的な疑問詞(イ

節末にカを持つパタンで徐々に発達し、近世後期から近代にかけて完成へと向かうため、中世の抄物資料に見られる間接疑問文との間に懸隔を想定せざるをえない。そのため、本稿では間接疑問文は中世半ばと近世に、位相の異なる2つの共同体で二段階に分かれて発達したという仮説を提示した。この仮説の検証には、近世期における文語文や講義文体の更なる調査も必要になるが、本稿の範囲を越えるため、今後の課題としたい。

### 補説：「疑問節-述語」連鎖の認定について

本稿では、「疑問節-述語」連鎖、すなわち疑問節とそれを選択する述語の連続に注目して、間接疑問文の成立過程について考察した。「疑問節-述語」連鎖のうち、どのような文を疑問節とみなすかについては、表1にそのパタンをまとめ、それぞれのパタンについて3節で詳しく見た。一方、疑問節を選択する述語については、疑問節がその述語の項となるように格助詞ガ・ヲ・ニを補えるかを判断の第一の根拠にしている。この判断は現代日本語話者である調査者の視点から行なっているため、必ずしも各時代の話者の直感を反映しているとは限らない。しかし、疑問節を埋め込むことのできる述語は、ある程度、通言語的に共通するものがある。ここでは、節末にカがあるもの(カ文末)を例として、「疑問節-述語」連鎖と認定した用例の疑問節選択述語を Karttunen (1977: 1.3 節)の動詞分類に従って表12に列挙し、この認定に信頼できる意味的基盤があることを例証する。なお、Karttunen (1977)の「意見動詞 (opinion verbs)」は用例が見られず、「知識保持動詞 (verbs of retaining knowledge)」と「知識獲得動詞 (verbs of acquiring knowledge)」は「知識」として一つにまとめた。語形の表記は『日本語歴史コーパス』の語彙素を参考にしたが、品詞の分類は用例の形態的特徴に基づいて行なった。

表12 カ節を選択する疑問節選択述語

	動詞	形容詞	名詞
知識	知る(存ずる)、心得る、覚える、分かる、忘れる、合点が行く、思い寄る	覚束無い、詳らか、不審、心許ない	御存じ、覚え
伝達	言う(仰る、抜かす) <sup>(23)</sup> 、返事する、語って聞かせる(話して聞かせる)		返事
決定	弁ずる、心定める、埒明ける、事訳申す、片付ける(片を付ける)決める	良い加減	分かち、分別、張り合い
推測	嗜む		推量
探求	見る(見舞う、見せる)、尋ねる、問う、聞く(承る)、占う、吟味する、くり出す、探る		占い、試し
関連 依存	気に成る、案ずる	気遣い	次第、心一つ、場合

名詞に分類したものは、対格を与えることができないため、例文によってはガ・ヲ・ニといった格助詞が補いにくい場合がある。

(30) [どこぞへ一所に立ち退くか]、分別もあるところ。(近松・心中万年草)

しかし、このような場合でも、動詞の意味(弁える/判断する)との対応から、疑問節を

問節に格助詞が付く例を『日本語歴史コーパス』明治・大正編からいくつかサブ・コーパスを選んで検索すると<sup>(22)</sup>、「III 明治初期口語資料」(1869~1879年刊)に3例、「I 雑誌」(1874~1888年: コアのみ)に11例、「IV 近代小説」(1887~1926年: コアのみ)に17例見つかった。それぞれの最も早い刊行年(生年も)の例を(27)に示す。

- (27) a. 甲子屋の新造衆が[客の来るか来ねへか]を茶屋に念をおすこと(安愚楽鍋、1871年刊)
- b. 残った消極の害ばかり取って此害ばかりを数へ立てて[其害が幾つあるか]を見て(内地旅行、1874年刊)
- c. 其処で自分は[夏の郊外の散歩のどんなに面白いか]を婆さんの耳にも解るやうに話して見たが無駄であつた。(武蔵野、1898年刊)

ここから近代に入り、カに格助詞が付く例が徐々に増え始めたことが想定される。この想定が正しければ、中世に見られた格助詞や係助詞によって埋め込みを標示する間接疑問文は一旦衰退し、改めて、近世期から間接疑問文が徐々に発達していったと考えられる。

#### 4.4 まとめ

本節では、形式的な側面に着目して間接疑問文の発達を観察し、以下の結論を得た。

- (28) a. 疑問標識の、肯否疑問節と疑問詞疑問節への両用化に着目すると、カによる間接疑問文は、近世に入ってから発達し始め、近世後期には「直接疑問文」から独立した構文として定着していた。
- b. 係助詞や格助詞による埋め込み標示は近世を通じて少なく、間接疑問文の発達を示す証拠は見出しにくい。
- c. 格助詞による埋め込みが増加するのは近代に入ってからである。

一方、中世期の特に抄物資料には(28b)(28c)の事実と反し、係助詞や格助詞によって埋め込み表示された間接疑問文の例が見つかる。この事実に対し、本稿は間接疑問文は二段階に分かれて発達したという以下の仮説を提示した。

- (29) 中世に発達した間接疑問文はそのまま現代には引き継がれず、近世に入り現代日本語に繋がる節末にカがある間接疑問文が徐々に発達していった。

### 5. さいごに

本稿では間接疑問文の統語的特徴を疑問節が述語によって統率されている複文と定義し、中古まではそのような間接疑問文が未発達であったという想定のもと、中世以降、間接疑問文が量的、質的にいつごろ発達していくのかを考察した。

その結果、中世の前期においては、疑問節を形成するどのパターンでも間接疑問文の萌芽となる「疑問節-述語」連鎖が少なく、間接疑問文自体の発達が中世半ば以降であることが明らかになった。また、中世半ば以降の「疑問節-述語」連鎖を観察すると、(ゾを含む)助詞なし(Ø)、ヤラ、カ文末が互いに補いあいながら表し分け、カによる間接疑問文が発達する土壌を作り上げていくことが確認された。

しかし、質的側面から見ると、現代日本共通語へと直接連なる間接疑問文は、近世期に、

表 11 格助詞の有無

	覚平家	史記	天草	虎明	近松	上方	江戸	人情
ヤラ	1/3	4/26	0/1	0/5	0/15	0/6	0/1	0/3
カ	0/2	4/15	0/4	0/40	1/55	1/40	1/26	0/51

- (23) a. [おほいやらうすくないやらう] をば知り候はず。(覚平家・巻 5)  
 b. [漢ハイカホド、大ナヤラウ、小ナヤラウ] ヲモ不知ゾ (史記抄・大宛列伝)  
 c. [ナニト云ワウズヤラウズ] ヲモ不知ゾ (史記抄・范蔡列伝)
- (24) a. [物ノヨイワルイ事ヲ、ヨウセウズカワルウセウズカ] ヲ、弁ズル事ノ難ト云ハ、(史記抄・申韓列伝)  
 b. [此ニ留ラウカ、留マイカ] ヲ、トシテ知ラウゾ (史記抄・孫呉列伝)

これらの例ではヤラもしくはカが疑問節であることを明示し、かつ格助詞がその埋め込みを明示しているため、明確に間接疑問文であることが確認できる。しかし、このような例が中世にしか確認できないことは現代語の間接疑問文の成立を考える上で見過ごせない事実である。近世にもカに格助詞が付いた例が 3 例見られるが、これは、(23) (24) とはやや性質が異なる。次に例を全て挙げる。

- (25) a. このおきはと夫婦になれ。サアどうぞやサア [否か応か] の返事せい。(近松・生玉心中)  
 b. さびしい時は火箸で灰に穴をあけ、[お客のお出るかお出んか] の灰占 (上方酒・無論里問答)  
 c. 老功の智恵を出し、むかしとつた杵塚をもつて、[その虚か実] を探らんこと、たなごころのうちにあり (江戸酒・花街鑑)

(23)(24) では疑問節の最後に疑問標識のヤラもしくはカが現れ、埋め込みを示すのに対格標識のヲが用いられている。一方、(25a)(25b) では疑問節に属格ノが続き、(25c) では疑問節の最後に疑問標識のカは現れていない。(25) の特徴は選言のカに見られる特徴であり(詳細は衣畑・岩田 2010)、確実に間接疑問節が埋め込まれている例とは言えない。

以上のように見ると、中世の抄物前後に見られる間接疑問文の特異性が明らかになる。このことは、中世の抄物にのみ、カによる係り結びに格助詞が付いた間接疑問文が見られること (3.1 節: 用例 (10)(11))、ヤラに係助詞が付く間接疑問文が見られること (4.2 節: 用例 (21)) からも支持される。これらを総合して考えると、中世の抄物資料前後の位相において、疑問節形成のパターンに関係なく、疑問節を格標識で埋め込める間接疑問文が成立していたのではないか。しかし、この位相で成立した間接疑問文はそのままの形で現代共通語には受け継がれなかったものと思われる。

実際、中世の抄物と異なり、現代日本語のヤラによる間接疑問節には格助詞も係助詞も付けにくい (例は高宮 (2004: p. 18)。モの判断は筆者)。

- (26) 何人がパーティーに出席するやら {\*/も} 覚えていない。

また表 11 が示すように近世のうちにカに格助詞が付くことはほとんどない。カによる疑

格助詞が付いた例を見た後に再度述べる。

最後にカに係助詞が付く例について述べる。カに係助詞が付く例は中世までほとんど見られず、近世に入っても多くはない。一見、江戸後期の人情本で用例数が増えているように見えるが、これらの中にはカがモダリティ形式の一部として語彙化されている可能性があり、注意が必要である。たとえば次のような例である。

- (22) a. 一家一門そなたを恨み憎しみ、万人に死に顔をさらす身の恥。[親はないか] も知らぬども、もしあれば不幸の罰。(近松・心中天の網島)
- b. さりながら時にとってはこつちの仕合せ。[ちつとはまんが直つたか] も知れぬ。(明烏後の正夢・初編 1)
- c. 左「まことに恐入やす。夫ぢやアごく短いのを一席咄して参じやせう。鯉「今日の見物はよツ程割がわるいネ。左「<sup>ながなが</sup>長談と遣られるよりやア徳用か] もしれぬへ。(春色江戸紫・初編上)

これらの例はいずれも疑問節選択述語が「知らない」にもかかわらず、疑問節の内容についての無知を提示しているわけではない。むしろ、「親はない」「まんが直った(=めぐり合わせがよくなった)」「長々と咄されるよりは良い」という命題の成立へのバイアスが読み取れ、それを主張していると解釈できるため、カモシレス(> カモシレナイ)という可能性を表すモダリティ表現とも取れる。

疑問節が並列されず(「単独」と呼ぶ)、かつ疑問詞のない肯否疑問節である場合は、命題に対するバイアスを読み取りやすくなる。そこで、カを肯否疑問節と疑問詞疑問節に分けた表 8 の肯否疑問節をさらに節が単独のものと同列のもの(カによる節が選言関係にある選択疑問節)に分けると、表 10 のようになる。

表 10 カ: 係助詞の有無(節のタイプ別)

		覚平家	史記	天草	虎明	近松	上方	江戸	人情
肯否	単独	0/1	0/10	0/1	0/31	1/24	1/23	1/8	4/10
	並列	0/1	0/5	0/0	0/9	0/25	2/13	0/6	0/11
疑問詞	単独	0/0	0/0	1/3	0/0	1/6	0/4	0/12	1/30

命題にバイアスがない肯否疑問節が並列されるものと、疑問詞疑問節のものに着目する。すると、係助詞が後接する例がこれらで増えているとは言いがたく、係助詞が付くかという観点から疑問節の埋め込みが進んでいることを実証するのは難しい。

#### 4.3 格助詞による埋め込み標示

疑問節は格助詞によって動詞の項であることが明示できる。疑問節を明示する助詞がない場合(∅)には、格助詞で疑問節を埋め込んだ例は見つからない。ヤラ、カ文末による「疑問節-述語」連鎖における用例数を表 11 に挙げる。分母が「疑問節-述語」連鎖の総数、分子が格助詞が付いた用例数である。

用例が見えるところに網掛けをした。中世の半ば、特に史記抄にまとまった用例が見られるが、それ以降はきわめて稀になる。覚一本平家物語、史記抄の例を、(23)にヤラ<sup>(21)</sup>、(24)にカ<sup>(22)</sup>の順で挙げる。

Øによる「疑問節-述語」連鎖の疑問節は疑問詞を必ず持つ(3.2節)が、その疑問詞が疑問節によって認可されているのか、係助詞モによって認可されているのかが決められないからである。

たとえば、次の(20a)では「どこにあるかもわからない」のように疑問節にモが付いているとも解釈できる一方で、「どこにあるのもわからない」のように、疑問詞「どこ」がモによって認可され、節自体は疑問節ではないという解釈の余地を残す。(20b)も直後に「なんにもぞんぜぬ」と言い直され、疑問節でなくても解釈できる。

- (20) a. 都へ上り着て御さるが、張蛸はどこもとに御さるもぞんぜぬ(虎明・張蛸)  
 b. 食べ酔ふてござる所で、なにとござつたもおほえまらせぬ、なんにもぞんぜぬ(虎明・柑子)  
 c. どなたが伝授なされたも存ぜぬ故、お尋ね申す(近松・鐘の権三重帷子)  
 d. イヤノ\こんな処に長居したらどんな目に逢ふもしれぬ。まん直しに外へ往て彼女へのつらあてはなやかな事仕て見しよ(上方酒・南遊記)

(20c)(20d)は「お尋ね申す」や「長居したら」など前後の文脈から「どなたが伝授したか」「どんな目に逢うか」と解釈するのが自然なように思われるが、疑問詞がモによって認可されている可能性は排除できない<sup>(20)</sup>。その証拠にØでもゾが文末にあればそれを係助詞モが承けることはない(ゾの用例は(13a)(13b)を参照)。これは、ゾがある場合はそこまでが疑問節となり、疑問詞が疑問節内で認可されるため、モによる認可が必要ないためと考えることができる。表9でゾがないØに係助詞の出現が集中するのは、モの中に疑問節が埋め込まれているのではなく、モが疑問詞を認可するために用いられていることを示唆している。だとすると、Øにおける係助詞の出現は、疑問節が埋め込まれている証拠には使えないということになる。

次に、ヤラに係助詞が付く例について検討する。ヤラに係助詞が付く例は少なく、しかも中世末期以降は見られなくなる。天草版に見られる1例(21b)は覚一本(21a)と対応するものであるが、間接疑問文としての解釈に不審な点を残す。(21a)(21b)は、東国で源氏が蜂起していることに、都にいる平氏が無頓着である様子を表している。つまり、「浪の立つ」も「風の吹く」も「源氏の蜂起」を指し、どちらかわからない、という意味ではなく、「浪の立つのも風の吹くのも気にせず」といった解釈が適切である。

- (21) a. かやうに浪のたつやらん風の吹くやらんも知らぬ体にて、花やかなりし事共、なかなかいふかひなうぞみえたりける。(覚平家・巻6)  
 b. 波の立つやら、風の吹くやらも知らいで(天平家・巻3-1)  
 c. 秦ノ軽クセンヤラウ、重クセンヤラウハ定ルマイソ(史記抄・秦本紀)  
 d. ドコヲ刪省シタヤラウモ今頗亦不可分明ナリ。(史記抄・秦始皇本紀)

平家物語の例を除くと、ヤラに係助詞が付いた例は史記抄にしか見られない。史記抄に見られる例に関しては、係助詞が付くことにより疑問節の埋め込みが示されていると言えそうである。ヤラは元々疑問標識であり、また、肯否疑問節にハが後接する(21c)もある。しかし、史記抄以外に確例が見られないことから、係助詞によって疑問節を埋め込んだ間接疑問文が現代まで受け継がれているとは考えにくい。このことについては、次の4.3節で

黒の点はそれぞれ「疑問節-述語」連鎖、「直接疑問文」における疑問詞疑問節の割合をプロットしたものであり、それにもとづいて、ロジスティック回帰モデルにより回帰曲線を引いている。上側の上昇が「疑問節-述語」連鎖を表し、下側が「直接疑問文」を表す。それぞれの実線の上下には、95% 信頼区間を破線によって示している。「疑問節-述語」連鎖はサンプル数が少ないため、信頼区間に大きな幅ができるが、それでも 1740 年ごろを境に信頼区間が交わらなくなり（1741 年の「疑問節-述語」連鎖における疑問詞疑問節の割合の信頼区間は 0.051~0.252 (5.1%~25.2%)、「直接疑問文」のそれは 0.014~0.037 (1.4%~3.7%)）、以降両者の間には大きな有意差がみられるようになる<sup>(19)</sup>。

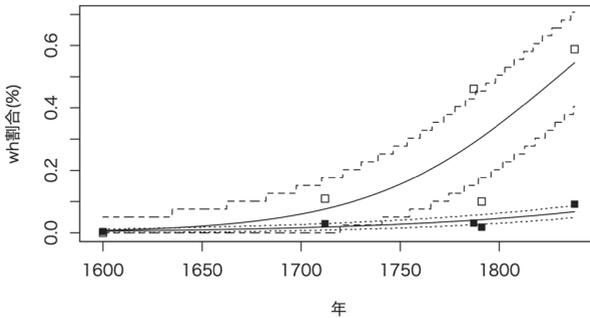


図2 疑問詞疑問節増加率と信頼区間

そもそもカの付く疑問詞疑問節の割合から言えば、近世前期の上方語から、「疑問節-述語」連鎖の方が一貫して高く、これは、このコンテキストの中で間接疑問文が直接疑問文から独立した構文として発達したためであるとすれば説明が付く。よって、肯否疑問節・疑問詞疑問節への両用化を指標とすれば、近世前期から間接疑問文が発達し始め、後期には直接疑問文とは異なる構文として確立していたと言えるだろう。

#### 4.2 係助詞による埋め込み標示

直接疑問文では疑問節が埋め込まれることがないため、係助詞が付くことはない。よって、疑問節に付く係助詞はその疑問節が従属節として埋め込まれていることを示唆する。

表9には $\emptyset$ 、ヤラ、カ文末に見られる「疑問節-述語」連鎖(分母)の中で、係助詞が格助詞を介さず疑問節に後接する例(分子)がどのくらいあるかを示している。用例数によって網掛けに濃淡を施し、1~3例を薄く、5例をやや濃く、9例以上を濃く色分けした。

表9 係助詞の有無

	寛平家	史記	天平家	虎明	近松	上方酒	江戸酒	人情
$\emptyset$	0/1	0/0	0/0	10/35	9/13	5/25	0/2	0/1
ヤラ	1/3	2/26	1/1	0/5	0/15	0/6	0/1	0/3
カ	0/2	0/15	1/4	0/40	2/55	3/40	1/26	5/51

表9を見ると、 $\emptyset$ に係助詞が付く例が多いことがわかる。しかし、 $\emptyset$ の例を観察すると、係助詞が承けているのが疑問節と言えるのか確定するのが難しいものがある。その理由は、

数を肯否疑問節と疑問詞疑問節に分けて示すと表 7 のようになる。

表 7 ヤラ: 肯否/疑問詞疑問節

		覚平家	史記抄	天平家	虎明	近松	上方酒	江戸酒	人情
疑問節-述語	肯否	2	7	1	4	3	1	0	0
	疑問詞	1	19	0	1	12	5	1	3
「直接疑問文」	肯否	55	83	1	9	32	0	1	1
	疑問詞	27	37	1	18	30	26	5	9

ヤラは覚一本平家物語から、肯否疑問節だけでなく疑問詞疑問節にも使われるが、その用例数は、疑問節選択述語が見られない「直接疑問文」が「疑問節-述語」連鎖を圧倒している。史記抄や近松浄瑠璃では「直接疑問文」と異なり、「疑問節-述語」連鎖で疑問詞疑問節に付くヤラが、肯否疑問節に付くものを上回るが、他の資料では用例数が少なく、傾向がはっきり掴めない。よって、肯否疑問節・疑問詞疑問節への両用化は、直接疑問文の特徴の反映である可能性も残る。

一方、文末のカについては、肯否疑問節・疑問詞疑問節への両用化が、間接疑問標識としての発達を示している可能性がある。表 4 のカ文末の内訳を表 8 に挙げ<sup>(16)</sup>、「疑問節-述語」連鎖、「直接疑問文」それぞれにおける疑問詞疑問節の割合を示す。

表 8 カ文末: 肯否/疑問詞疑問節

		覚平家	史記抄	天平家	虎明	近松	上方酒	江戸酒	人情
疑問節-述語	肯否	2	15	1	40	49	36	14	21
	疑問詞	0	0	3	0	6	4	12	30
	割合	0%	0%	75%	0%	10.9%	10%	46.2%	58.8%
「直接疑問文」	肯否	126	515	239	1011	1034	708	405	437
	疑問詞	1	0	42	4	31	13	13	44
	割合	0.8%	0%	14.9%	0.4%	2.9%	1.8%	3.1%	9.1%

カ文末は天草版平家物語の例外を除き(衣畑 2024 参照)中世末まで疑問詞疑問節にはほとんど使われない。一方、江戸時代に入ると、疑問詞疑問節の節末で使われるようになる用例がある程度現れる。その数は、「疑問節-述語」連鎖で 6 例、疑問節を受ける述語がないもので 31 例であり、「直接疑問文」の方が多く見える。このような用例数を重視して、衣畑(2022: 5 節)で筆者は、疑問詞疑問文の節末に使われるカの発生は、間接疑問文の発達によるのではなく、カ自体に[-問いかけ]という特徴が生じた結果だと考えた。

疑問詞疑問節末のカの発生については、ここでも同様の考えを採る。しかし、「疑問節-述語」連鎖でその後も疑問詞疑問節に付くカが伸長し、肯否疑問節と同等以上に使われることは、カによる間接疑問文の発達によるものと考えられる。たとえば、江戸の洒落本では、「疑問節-述語」連鎖で、疑問詞疑問節にカが付く例が肯否疑問節とほぼ同数になっているが、これが、カが付く疑問詞疑問節の割合が 3% 程度の「直接疑問文」の影響であるとは考えにくい。さらに人情本では、疑問詞疑問節の割合が「疑問節-述語」連鎖では肯否疑問節を上回る<sup>(17)</sup>。中世末以降(「虎明」以降)の疑問詞疑問節の増加率の平均(幾何平均)を計算すると、「直接疑問文」が 2.07 倍なのに対し、「疑問節-述語」連鎖には 4.92 倍の伸び率が見られる<sup>(18)</sup>。この増加過程の違いを視覚化したのが図 2 である。図 2 の白・

表5 疑問詞疑問節・肯否疑問節の推移

		史記抄	虎明	近松	上方酒	江戸酒	人情
肯否疑問節	ヤラ	7	4	3	1	0	0
	カ	15	40	49	36	14	21
疑問詞疑問節	∅	0	35	13	25	2	1
	ヤラ	19	1	12	5	1	3
	カ	0	0	6	4	12	30

表6 疑問詞疑問節における∅・ヤラ・カの偏相関行列

	∅	ヤラ	カ
∅	1.000	-0.736	-0.779
ヤラ	-0.736	1.000	-0.740
カ	-0.779	-0.740	1.000

がわかる<sup>(14)</sup>。

もっとも、ここで示す用例数はあくまで「疑問節-述語」連鎖であり間接疑問文そのものではない。しかし、間接疑問文の成立をダイナミックな視点から捉えるならば、いくつかのボタンが相俟ってその発達を醸成したと言え、間接疑問文の成立が特定の形態における用法の発達以上に、構文としての発達過程があったことを、重ねて示唆している。

#### 4. 形式的側面の変化

前節では中世半ば以降、「疑問節-述語」連鎖が増加していくことを示した。しかしこれは間接疑問文成立の必要条件であって、ここから間接疑問文の成立が直接結論されるわけではない。間接疑問文の成立過程を示す意味的な側面については Kinuhata (2012) で既に考察した。本節では、「疑問節-述語」連鎖の形式的特徴に着目しながら、間接疑問文の成立を追究する。

##### 4.1 肯否疑問節と疑問詞疑問節

間接疑問文発達の1つ目の指標として、間接疑問節の標識が、肯否疑問節にも疑問詞疑問節にも使えるようになる変化を考えてみたい。衣畑 (2021) では琉球宮古語で、直接疑問文で疑問詞疑問文専用の *gara* という形式が、間接疑問文では疑問詞疑問節だけでなく肯否疑問節にも使われるようになってきていることを述べている。このことを踏まえると、ヤラ (3.4 節) とカ文末 (3.5 節) が肯否疑問節・疑問詞疑問節の両方に使えることは、間接疑問標識としての発達に関係する可能性がある<sup>(15)</sup>。なぜなら、文末のカは中世末まで肯否疑問文にのみ使われており、ヤラも平安時代に肯否疑問文専用であった係助詞ヤに由来するからである (衣畑 2014)。

しかし、ヤラおよびカ文末が肯否疑問節・疑問詞疑問節の両方に使えるようになるのがそれらの直接疑問文での変化の結果である可能性を排除する必要がある。この点で、次に示すヤラのデータからは、その可能性を排除しにくい点に問題がある。表3のヤラの用例

忌歌念仏)

- b. なんだと手水に往たと。[手水か行水か]しらねへが大概ほどの有たもんだ(江戸酒・深川新話)
- c. [こんな勝手な唄妓衆が外にもあるか]知らねへが私はそれでとほして来て(人情・春色辰巳園)
- (18) a. 上方から筑紫の果てまで修行して、[発心の因縁は、どうしたことか]知らねども(近松・薩摩歌)
- b. 谷「…半口乗て無尽を買なせへ 綱「[無尽とは何の事か]ぞんじいせん(江戸酒・甲駅新話)
- c. [どのやうな事するものか]様子はしれぬことながら、何でも辻に立て居て往來の人をもしもしと呼びかけるといふ(人情・花廻志満台)

### 3.6 まとめ

以上、パタンごとに見てきた「疑問節-述語」連鎖の出現傾向は、(19)のようにまとめられる。

- (19) a. カ係り、ヤ係り・文末が「疑問節-述語」連鎖を形成することはほとんどない。ただし、史記抄にはカ係りの例がいくつか拾える。
- b.  $\emptyset$ 、ヤラ、カ文末には「疑問節-述語」連鎖のまとまった用例が見られる。各パタンがまとまって見られる時代を整理すると、以下のようになる。
- $\emptyset$  : 中世末から近世の上方資料
- ヤラ : 中世半ばの史記抄と近世前期近松淨瑠璃
- カ文末 : 中世半ば以降増え続ける

ここからまず指摘しておかなければならないのは、中世前期までは、疑問文を形成するどのパタンにおいても、「疑問節-述語」連鎖の用例自体がほとんど見られなかった、ということである。これまで、間接疑問文の発達は、ヤラやカといった形式に着目していたため、間接疑問文の未発達が特定の形式の問題なのか、そのような構文自体がなかったのかが明らかでなかった。しかし、中古の状況も考え合わせると(2節の最後)、上のことは、疑問節を動詞の項とする間接疑問文という構文自体が中世前期までは安定的に存在していなかったことを示している。

次に、中世半ば以降に発達していくパタンを見ると、 $\emptyset$ 、ヤラ、カ文末の3つのパタンが互いに補い合うように分布していると言える。このことは、肯否疑問節、疑問詞疑問節に分けてそれぞれのパタンの用例数を見ると一層鮮明になる。これを表5に示す。用例が全般的に少ない平家物語を除き、2桁の用例数が見えるところには網掛けをする。

表5から、肯否疑問節では一貫してカ文末が多い一方、疑問詞疑問節では、上方落本まで $\emptyset$ とヤラがおおよそ補うように分布し、江戸落本からカ文末が優勢になるのがわかる<sup>(13)</sup>。資料(=時代)をケースとし、 $\emptyset$ 、ヤラ、カによる疑問詞疑問節の用例数の偏相関行列を示すと表6のようになる。

いずれも強い負の相関を示しており、一方が増えると他方が減る関係になっていること

各文献の合計数を見ると、ヤラは上方の資料では安定して見られるが（ただし天草版平家物語には少ない）、出版地が江戸に移る洒落本や人情本では少なくなる。また、史記抄以降には、合計の2割前後で「疑問節-述語」連鎖が見られる。これは0や次のカ文末と比べ全体の用例数が多くないためだが、これまでのパタンが数パーセントに留まることと比べると、突出して高い値と言える。なお、江戸の洒落本と人情本の割合の高さは、ヤラ全体の用例数が少ないので、上方語で間接疑問節を形成したヤラが固定的に受け継がれたことによる可能性がある。

また、ヤラによる「疑問節-述語」連鎖がこれまでと異なる特徴として、肯否疑問節にも疑問詞疑問節にも使われることが挙げられる。(15) がヤラが肯否疑問節を形成する例、(16) が疑問詞疑問節を形成する例である。

- (15) a. [雞卵ヲモ土卵ト云ヤラウ]、不知ゾ（史記抄・龜策列伝）  
 b. それは諸国の寺々寺社をめぐる事じや程に、[五年てまがいらふやら、三年てまいらふやら]、しらぬ事じや（虎明・花子）  
 c. アア何言やる。[京へ行こやら、冥途へ行こやら]知れたことか（近松・心中万年草）
- (16) a. [蜂ノ鼻ハナントルモノヤラウ] ヨウモ不知ゾ（史記抄・秦始皇本紀）  
 b. 奥の火燵もまだふさがず、香の物も見廻ひたし。[何からせうやら]、気がうろつく（近松・心中宵庚申）  
 c. [どこの牛の骨やら]しれもせぬ筋目もないいけぬ気量な者を安う買とり（上方洒・無論里問答）

### 3.5 カ文末

カが文末（節末）で使われる例は歴史を通して一貫して見られるため、中世から近世末を対象とする。表4に「直接疑問文」<sup>(11)</sup>と比較した「疑問節-述語」連鎖の用例数とその割合を示した<sup>(12)</sup>。

表4 「疑問節カ-述語」連鎖の推移

	寛平家	史記抄	天平家	虎明	近松	上方洒	江戸洒	人情
疑問節-述語	2	15	4	40	55	40	26	51
「直接疑問文」	127	515	281	1015	1065	721	418	481
割合	1.6%	2.8%	1.4%	3.8%	4.9%	5.3%	5.9%	9.6%

「直接疑問文」の用例数が多いため、ヤラに比べると全体的に割合は低くなるが、それでも、虎明本狂言集以降に増加が見られ、江戸時代の後期にはその割合も5~10%に達する。これは、同じく「直接疑問文」の用例が多い0（表2）と比べると、高い値であることがわかる。

文末のカが用いられる「疑問節-述語」連鎖にも、ヤラと同じく、肯否疑問節の例も疑問詞疑問節の例も見られる。(17)に肯否疑問節をカが標示する例、(18)に疑問詞疑問節を標示する例を挙げる。

- (17) a. [サア助けてたもるか、殺しやるか]きつとした誓文で承らう（近松・五十年

れば、それ以前に 〇 による「疑問節-述語」連鎖が見られるのは、文末のカによる間接疑問文の未発達を埋める役割をしていた可能性も考えられる。このことについては 3.6 節で他のパターンと比較してまとめる。

以下に虎明本狂言集から上方洒落本までに見られる用例を挙げる。いずれも「直接疑問文」と同じく疑問詞疑問節の例になる。

- (13) a. 今の手はめづらしひ手じやが、[何といふ手ぞ]問ふてこひ (虎明・鼻取相撲)  
 b. [一のくひハどこもぞ]知らぬよ、いやこれがそじや、是につながふ、(虎明・牛馬)  
 c. [その深い男は誰ぢや]知らぬが、あるまいことぢやないかひの (近松・生玉心中)  
 d. ヲヲこちの兵助じゃわいな。しまひしまひ。[どうして知ってきた]知らぬ。(上方洒・新月花余情)

### 3.3 ヤ係り・文末

疑問助詞のヤは、覚一本平家物語には多く見られるが、中世も半ばになると漢文や韻文以外ではほとんど見られなくなる。ここでは、覚一本平家物語とその影響を受けた天草版平家物語を対象とする。

覚一本平家物語では、疑問助詞ヤが用いられた肯否疑問文が 367 例(係り 320 例、文末 47 例)見られるが、「疑問節-述語」連鎖と解釈できるのは次の 1 例のみ (0.3%) である。

- (14) 先途後栄を存じて、[当家に奉公いたさんとや思ふ]。ありのままに申せ」とこそ宣ひければ、(巻 4)

天草版平家物語ではヤの例は大幅に減って、37 例(係り 35 例、文末 2 例)しか見られない。「疑問節-述語」連鎖と見られる例も見つからなかった。

なお、ヤは中世に入ると疑問詞疑問文にも使われるようになるが、表現が固定的(「いかにやいかに」など)であり用例は多くない。覚一本平家物語には 26 例、天草版平家物語には 1 例見られるが、「疑問節-述語」連鎖と考えられる例はない。

### 3.4 ヤラ

ヤラは係り助詞のヤがコピュラ動詞(ニ)アリ・推量接辞ムと融合したもので、平安時代には、融合前の「にやあらむ」という形のみが見られる。中世以降融合が進み、「やらむ」「やらん」「やらう」のように表記されるが、この形は前節の「ヤ係り」には入れず、まとめてここでヤラとして扱う<sup>(10)</sup>。

ヤラに見られる「疑問節-述語」連鎖の用例数を、「直接疑問文」と対比させて表 3 に示す。

表 3 「疑問節ヤラ-述語」連鎖の推移

	覚平家	史記抄	天平家	虎明	近松	上方洒	江戸洒	人情
疑問節-述語	3	26	1	5	15	6	1	3
「直接疑問文」	82	120	2	27	62	26	6	10
割合	3.5%	17.8%	33.3%	15.6%	19.5%	18.8%	14.3%	23.1%

稀であるが、抄物を見るといくつか用例が拾える。筆者の調査では史記抄に 7 例が見つかった。そのうち 3 例を以下に挙げる。

- (10) a. [カウアラウダニ、ナントカアラウズラウ] ヲモ不知ゾ。(孝武本紀)  
 b. [李徳載ハ何書ヲ見テカ 注シツラウ]<sub>i</sub> 出処<sub>i</sub> ヲ不引<sub>i</sub> 遺恨ナゾ (呉太伯世家)  
 c. [行レ道事ハナントカアルラウ] 不知ゾ。(弟子列伝)

史記抄にはカ係りによる「直接疑問文」が 275 例程度あると見られ<sup>(7)</sup>、そこからすると 7 例 (約 2.5%) というのは決して多い数値とは言えない。しかし、(10a) のように疑問節に対格助詞ヲが付き、確実に疑問節が述語に埋め込まれていることを示す例もある。高宮 (2004: p. 22) で挙げられる漢書抄と史記抄からの 2 例にもやはり格助詞ヲが付いている。

- (11) a. 三処ノ中ニ [ドコニカ羽ガイツラウ] ヲモ知<sub>i</sub> ヲスホドニ (漢書抄 3, 36 ウ)  
 b. [何処デカ打死ヲセウズラウ] ヲモ不知ゾ (史記抄・孫呉列伝)

一方、(10b)(10c) では疑問節の中に主題のハがあり、疑問節は独立した文と解釈しやすい。疑問節に格助詞が付くことについては、4.3 節で再述する<sup>(8)</sup>。

### 3.2 ∅ (助詞なし)

疑問詞疑問文で疑問の助詞がないパターンは上代から現代まで一貫して見られる。よって、このパターンについては、中世から近世末までを対象とする。この期間における、「疑問節-述語」連鎖の用例数を、連鎖がなく直接疑問文と確実に言える例と対比して表 2 に示す。なお、「疑問節-述語」連鎖にも直接疑問文の例が含まれるため、連鎖がない例を便宜的に「直接疑問文」と括弧に括る。全体のうちゾが付いたものの用例数も参考として掲げ、最下段には欄ごとの合計に対する「疑問節-述語」連鎖の割合を示す (覚一本平家物語なら  $1/214=0.005$ )<sup>(9)</sup>。

表 2 「疑問節 ∅-述語」連鎖の推移

	覚平家	史記抄	天平家	虎明	近松	上方酒	江戸酒	人情
疑問節-述語	1	0	0	35	13	25	2	1
(うちゾ)	1	0	0	25	1	1	1	0
「直接疑問文」	213	125	238	803	780	433	344	330
(うちゾ)	87	100	193	614	195	38	3	10
割合	0.5%	0%	0%	4.2%	1.6%	5.5%	0.6%	0.3%

表 2 からわかるように、∅ による「疑問節-述語」連鎖の用例は、中世末の虎明本狂言集から近世の上方資料までまとまった数が見られるが、その前後にはほとんど認められない。ただし、中世と近世後期では、用例が認められない理由は異なると思われる。

中世において「疑問節-述語」連鎖が認められない理由は、カ係りにそれが少ないことと考え合わせれば、疑問文を述語の項とすること自体が発想されていなかったためと考えられる。覚一本平家物語に見える次の(12)も、独立した 2 文のように解釈できる。

- (12) かたへの女房たち、「[是は**いづく**よりの月影ぞや]<sub>i</sub>、出所<sub>i</sub> おぼつかなし」などと、  
 わらひあはれければ、(覚一平家・巻 1)

一方、近世後期の江戸語については、後で見るように、カ文末が間接疑問標識として発達するため、疑問節を疑問の助詞で示さない ∅ が用いられなくなったのではないかとす

(4)

込む間接疑問文の発達を醸成するコンテキストとなったことは想像に難くない。そのような視点からすれば、1200 例中の 5 例という数字は通時的な観点から初めて意味を持つものと言える。次の 3 節では、まず間接疑問文の質的な側面は措いて、「疑問節-述語」連鎖の計量的な側面から中世以降の間接疑問文の成立の基盤を探ることとする。

### 3. 「疑問節-述語」連鎖

本節ではまず、疑問文を形成するパターンごとに、「疑問節-述語」連鎖の用例数を見ていく<sup>(5)</sup>。時代ごとではなくパターンごとに見ていく理由としては、各時代において疑問文を形成するパターンが異なること、「疑問節-述語」連鎖が見られやすいパターンと見られにくいパターンがはっきりしていることが挙げられる。衣畑 (2014) による中世前期の覚一本平家物語の調査からは、この時期には疑問詞疑問文・肯否疑問文それぞれに、おおよそ以下の助詞が使われることがわかっている。

表 1 覚一本平家物語に見られる助詞のパターン

	係り	文末	その他
疑問詞疑問文	カ	ヤラ(ン)	助詞なし(0)
肯否疑問文	ヤ	ヤ/カ/ヤラ(ン)	

このうち、肯否疑問文に使われる係りと文末のヤ、疑問詞疑問文にも肯否疑問文にも使われるヤラ(ン) (以下「ヤラ」) をそれぞれ 1 つにまとめ、以下順番に見ていく<sup>(6)</sup>。

#### 3.1 カ係り

係り結びは中世の中頃には衰退し、1604 年書写の虎明本狂言集には文語的な部分にしか見られない。しかし、衣畑 (2024) でも論じたように、天草版平家物語 (1591 年刊) では疑問詞疑問文全体の約 2 割にカ係りが見られる。そこでまず、覚一本と天草版の平家物語を比較する。

覚一本平家物語では、カ係りが 321 例見られる。そのうち、「疑問節-述語」連鎖に該当するのは以下の 2 例のみ (0.6%) である。

(8) a. 「上古には、か様にありしかども事いでせず。[末代いかがあらんずらむ、おぼつかなし](巻 1)

b. 又宮の御在所は、いづくにかわたらせ給ふらん、知り参らせ候はず。(巻 4)  
(8a) は「末代いかがあらんずらむ。おぼつかなし。」の 2 文とも解釈でき、(8b) は「宮の在所は、知り参らせ候はず」への挿入的な疑問文にも解釈できるが、述語の項として埋め込まれているか否かは確定できず、形式的な「連鎖」に注目して用例数に入れる。

天草版平家物語ではカ係りによる疑問詞疑問文は 68 例見られるが、「疑問節-述語」連鎖は次の 1 例のみ (1.5%) である (添字の <sub>i</sub> は同一内容であることを表す)。

(9) 俄かに西の風激しゅう吹いて [頼まれた義教緒方が船たる船共いづくの浦へか吹き寄せつらう]<sub>i</sub>、行き方<sub>i</sub>知らずに成った。(巻 4・25)

以上のように、中世を通してカによる係り結び文が疑問節選択述語に後続されることは

- (4) a. 太郎は [花子がパーティに来たか] と言った。  
 b. \*太郎は [花子がパーティに来たか](を) 言った。

また引用される内容も主節述語が発話・思考動詞ならばさまざまであり、特定の文タイプに偏ることはない。この点は中古語も現代語と同様である。

- (5) a. 心の中には、ただ、[藤壺の御ありさまをたぐひなし]<sub>平叙文</sub>と思ひきこえて、  
 (源氏・桐壺)  
 b. [ゆくりかに見せてまつりて思し数まへざらん時、いかなる嘆きをかせん]<sub>疑問文</sub>と思ひやるにゆゆしくて、(源氏・明石)  
 c. さすがに、[ながらへよ]<sub>命令文</sub>と思ひたまへる心ばへも、あはれなり。(源氏・総角)

辻本 (2022) が間接疑問文に相当するとしている中古語の例を見ると、このような引用のトの性質が強く反映しているように見える。辻本 (2022) 自身が指摘しているように、この間接疑問節に相当する引用節の中にある疑問文は、(6) のように係り助詞や疑問詞の結びとして連体形で終止し、「通常の疑問文と変わらない形となっている」(p. 74) というのである。

- (6) a. [世に人やある]とも知らせ給はず、内などにも参らせ奉り給ふばかりしかど、中宮のかくておはしませば、おぼし絶えたるになん。(栄花・二十・下-477)  
 b. 煙立つ 頭の雪は 夏若み [いかで降れる]と 知る人のなき (宇津・菊宴)

辻本 (2022: pp. 73-4)

だとすると、「通常の疑問文」が引用のトによって埋め込まれた (5b) と意味・統語的には変わらず<sup>(2)</sup>、本稿で発達過程を問題にする、疑問節を述語の投射が直接支配する間接疑問文とは区別すべきものと言える<sup>(3)</sup>。

次に高山 (2021) が間接疑問文に当てはまるとしている例について検討する。高山 (2021) の例を(7) として再掲する。

- (7) さて [返しはいかがしたりけむ]知らず。=(1a)

この例の解釈としては、「いかがしたりけむ」という疑問節が動詞「知る」の項として埋め込まれているのではなく、「いかがしたりむ。知らず。」のような 2 文がたまたま連続していたという可能性がある。近世以前の資料では句読点は示されなため、校訂の段階で(7) のように 1 文として解釈された可能性がある。高山 (2021) によると、このような間接疑問文に当てはまりそうなパターンは、上代・中古の疑問文約 1200 例のうち僅か 5 例しかなく、しかも、挙げられる用例が伊勢物語と大和物語からのみである (p. 88)<sup>(4)</sup>。このことは、上代・中古において間接疑問文は未だ発達しておらず、特定の作者の語り口が疑問節とそれを選択する述語の連続(「疑問節-述語」連鎖)を偶然生み出していたという可能性を示唆する。

ただし問題は、現代の我々が「いかがしたりけむ知らず」という例に直面しただけでは、それが 1 文からなるのか 2 文からなるのか、客観的には定め難いということである。よって、このような例だけを見て、上代・中古に間接疑問文があったともなかったとも言うことはできない。しかし、このような「疑問節-述語」連鎖が、やがて疑問節を項として埋め

(2)

## 2. 間接疑問文の定義

本稿では間接疑問文の統語的特徴を以下のように定義する。

### (2) 間接疑問文の定義

疑問節が述語の投射によって直接支配されている (= 述語に統率されている) 複文

この定義は間接疑問文における疑問節の統語構造について、2つのことを仮定している。1つは疑問節が述語の項となっているということである。もう1つは、述語以外が疑問節を支配してはいけない (= 述語以外の投射が「障壁」になってはいけない) ということである (「統率」「障壁」については Chomsky 1986)。

この定義によって、たとえば同じように疑問節が埋め込まれているように見えても、(3a) は間接疑問文であるのに対し、引用のトによって疑問節が埋め込まれた(3b) は間接疑問文ではないものとして区別できる。

- (3) a. 太郎は [花子がパーティに来たか](を)尋ねた。
- b. 太郎は [花子がパーティに来たか] と尋ねた。

(3a)(3b) の関係する統語構造をそれぞれ図 1 に示す。

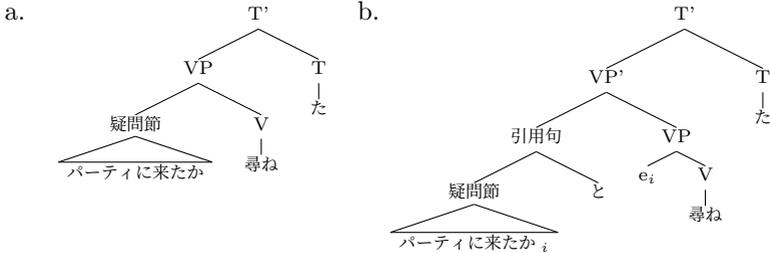


図 1 (3a)(3b) の統語構造

(3a) は、図 1-a. のように、疑問節「パーティに来たか」が動詞「尋ね」の項としてその投射である VP に直接支配されているので、(2) の定義に従って間接疑問文である。一方、(3b) は図 1-b. の構造から二重の意味で間接疑問文とは言えない。1つは、疑問節を含む引用句は動詞の項ではなく、動詞句全体に係る付加詞の位置にあるためである<sup>(1)</sup>。さらにもう1つは、疑問節は引用のトの投射に直接支配されているため、(たとえ引用句を動詞の項であると仮定しても) 動詞はこれを直接支配することはできない ((3a) のヲはそれ自身の投射を持たない格標識であるのに対し、トは投射を持つ後置詞であると仮定) ためである。

図 1-b. の疑問節はトによって選択され、述語によって選択されているわけではないので、疑問節を述語に取らない動詞も (トの意味と齟齬しなければ) 来ることができる。(4) の発話を表す「言った」は(4b) のように疑問節を直接取れないが引用節なら(4a) のように埋め込むことができ、疑問節と述語の間に統率関係がなくても引用節内にそれが生起可能であることを示している。

# 間接疑問文は日本語にどのように発達したか

## —直接疑問文との対比から—

衣 畑 智 秀

### 1. はじめに

本稿では日本語の歴史において間接疑問文が発達していく過程を論じる。間接疑問文は中古語にはなく(近藤 2000: 6章5節)、中世以降発達した新しい構文であるとされる。しかし、高山(2021: 2章4節)では、限られた文献資料をもとに「古代語での非存在を証明することは困難である」(p. 62)とし、古代語にも(1a)のように間接疑問文と見られる例が存在することを指摘する。また、辻本(2022)でも、「間接疑問文を作るための専用の形式が古代に存在したかは疑わしい」(p. 71)とはしながらも、(1b)のような引用のトを使った構文が、間接疑問文相当の表現として用いられていたとする。以下、疑問節を[]で括り、疑問節を選択する述語に波線を付す。

- (1) a. あけて見るに、悲しきことものに似ず、よよとぞ泣きける。さて[返しはいかがしたりけむ]知らず。(大和、高山 2021: p. 88)
- b. [年ごろは世にやあらむ]とも知らざりつる人の、この夏ごろ、遠き所よりもして尋ね出でたりしを、(源氏・宿木、辻本 2022: p. 73)

古代語における間接疑問文の存在が指摘される背景には、間接疑問文の発達がヤラ(高宮 2004)や節末にあるカ(高宮 2005、Kinuhata 2012)といった特定の形式に着目して論じられてきたことが指摘できる。間接疑問文という構文の発達が、個々の形式における機能変化としてしか示されないために、ヤラや文末のカを用いない(1)のような間接疑問文の存在が問題視されるのである。

以上の問題に対し、本稿では疑問節とそれを選択する述語の連続(以下で「疑問節-述語」連鎖と呼ぶ)という、間接疑問文を生み出すコンテキストに注目し、特定の形式に限らず間接疑問文が発達していく過程を論じる。そのことにより、中世より前には間接疑問文といえる構文はやはり未発達であったこと、また、中世以降にヤラやカという形式で間接疑問文の発達が見られるが、中世と近世ではその発達過程が異なることを論じる。

以下、2節では間接疑問文の定義から(1)のような例を位置付け、3節では間接疑問文を成立させる必要条件である「疑問節-述語」連鎖の通時的な調査結果を示す。その上で4節では形式的な特徴に着目し、現代日本語に繋がる間接疑問文は近世から発達したものであることを論じる。

